

愛知学院大学

教養部紀要

第72巻 第2・3合併号

論文

- 川口 勇 作：英語学習者のライティングプロセスと結束性の関係
——課題序盤・終盤の行動に焦点を当てた予備的検討—— (1)
- 佐々木 真：AI時代の英語教育についての一考察 (13)
- Sadaharu JO : Quality Evaluation by Synchrotron Radiation X-ray Topography of Hen-Egg-White Lysozyme
Single Crystals Obtained by NiCl_2 Concentration Gradient Technique (33)

資料

- 川口 高 風：明治期以降曹洞宗人物誌（十一） (86)
- 研究業績（2024年1月～12月） (87)
- 第72巻総目次 (95)

2025

愛知学院大学教養部

英語学習者のライティングプロセスと 結束性の関係

——課題序盤・終盤の行動に焦点を当てた予備的検討——

川 口 勇 作

Abstract

本研究は、英語学習者のライティングプロセスと結束性の関係を探ることを目的とし、課題の序盤および終盤の行動に着目した。英語を学習する日本の大学生が執筆した英語エッセイのライティングプロセスデータを用い、序盤の語数の割合と終盤の修正回数をライティングプロセスの指標とした。これらの変数と結束性指標との相関分析の結果、序盤に計画を優先すると語彙の多様性が高まり、語彙の重複が減少することが示された。また、終盤の推敲行動と結束性指標の間にも関連が確認された。

キーワード：英語ライティング、ライティングプロセス、結束性

はじめに

近年の英語教育では、これまでの授業において読む・聞くといった受容的能力に加えて、話す・書くといった発信的能力の育成にも重点が置かれつつある。日本の大学入試改革の動きにおいても、単なる知識の習得ではない、思考力や表現力を重視する動きがみられる。こうした流れの中で、現行の学習指導要領から、外国語科の科目の一つとして「論理・表現」が新たに導入された。この科目では、「書くこと」の領域において「論理の構成や展開を工夫して文章を書いて伝えることができる」ことの重要性が強調されている。論理的な文章を構成するためには、テキスト内のアイデアを適切に結びつける必要があるが、その役割を担うのが結束性(Cohesion)という概念である。

従来の研究では、完成したエッセイの結束性を評価することが主流であったが、結束性がライティングプロセスの中でどのように形成・調整されるのかについての検討は十分に行われて

いない。特に、ライティングの序盤における計画段階や、終盤の推敲段階での行動が、結束性にどのように影響するかについては、明確な知見は得られていない。

本論文は、英語学習者の英語ライティングプロセスと、文章のまとまりの良さを示す概念である結束性との関係について、ライティングプロセスのデータから観察されるライティング課題序盤および終盤における行動に焦点を当てて予備的・探索的に検討するものである。

結束性とライティング能力・エッセイ評価

Halliday and Hasan (1976) は、結束性を「テキスト内に存在する意味の関係 (relations of meaning that exist within the text)」と定義し、談話の中のある要素の解釈が別の要素の解釈に依存するときに結束性が生じる、としている。また、Crossley et al. (2016b) では、読み手がテキスト内でアイデアを結びつけることができるような言語的手がかりとも定義されている。結束性のある文章とは、テキスト内のさまざまなアイデア同士が、言語的に目に見える形で結びついている文章であるといえる。

Halliday and Hasan (1976) は、結束性の特徴を以下の5つの要素に整理している：

1. 指示 (Reference) は、代名詞や指示語 (定冠詞 the や、this, that, so など) によって、テキスト内の他の要素を参照することを意味する。
2. 代用 (Substitution) は、名詞であれば one、動詞であれば do などを用いて、既に言及された要素を別の語で置き換えるものである。
3. 省略 (Ellipsis) は、先行する語句を後続する文で使用する場合に、それらを省略することを指す。
4. 接続 (Conjunction) は、接続詞や副詞などのつなぎ言葉によって、2つの文 (あるいは節) が接続されていることを指す。これら4つは文法的結束性にかかわる要素とされている。
5. 語彙的結束 (Lexical cohesion) は、同一の語や類義語、上位語などを用いて、文と文とのつながりを持たせることを意味する。

これらの要素を満たすことで、文同士のつながりがより強固になり、結束性のあるテキストが産出される。

また、Crossley et al. (2016a) は、結束性指標の算出ツールである TAACO (Tool for the Automatic Analysis of Text Cohesion) を開発した。その中で、結束性の指標を5つのカテゴリに整理している (pp. 1230-1232)：

1. 語彙的多様性 (Lexical Density あるいは Type-token Ratio) は、異なり語数 (type) を総

語数 (token) で割ることでテキスト内の語彙の繰り返し度合いを示す。

2. 語彙的重複 (Lexical Overlap) は、段落や文の間の、様々な品詞、内容語・機能語の重複の度合いを示す。
3. 意味的重複 (Semantic Overlap) は、WordNet データベースを使用して、文間および段落間での同義語セット (synset) の重複度合いを示す。
4. 接続語句 (Connectives) は、接続詞や副詞などが含まれており、肯定的・否定的な結束をもたらすものと、Halliday & Hasan (1976) によって提案された、時間的・添加的・因果的接続詞といったものに分けられる。
5. 既知性 (Givenness) は、情報が既知である度合いを示すもので、人称代名詞や指示詞、定冠詞 the などの使用が含まれる。

既成の標準化されたライティングテストの評価基準やヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) などの中にも、結束性にかかわる評価項目や指標が存在している (工藤, 2011) など、結束性はライティング能力に深く関係している概念であると考えられている。Liu & Braine (2005) は、英語が母語ではない中国人大学生を対象に Halliday & Hasan (1976) で提案された結束装置の使用頻度とエッセイ評価の関係性を調査した。その結果、語彙的結束の使用量が多い学習者ほどエッセイ評価が高かったと報告している。同様に Yang & Sun (2012) は、中国人英語学習者のエッセイを分析し、正しく使用された結束装置の合計数とエッセイ評価との間に相関があると報告している。

日本の英語学習者を対象とした研究も行われている。福田 (2020) は、学習者にみられる結束性の使用傾向を観察するとともに、結束性とエッセイ評価との関連性を検証した。結果として、先行研究と同様に学習者がつなぎ言葉を過剰に使用する傾向が明らかになった。また、結束性はエッセイ評価を有意に予測し、その結束性は指示代名詞やつなぎ言葉の交互作用に影響を受けることも明らかになった。

一方で、Crossley and McNamara (2010) のように、必ずしも結束性指標がエッセイ評価と関係しているわけではないと主張する研究もみられる。Crossley and McNamara は、英語母語話者のエッセイと専門家の評価との関連を検証した結果、段落レベルでの結束性はエッセイ評価と相関がある一方で、文間の語彙的重複や接続語句の使用といった局所的な結束性や、全体的な語彙の多様性や既知性については、エッセイ評価とほとんど関連がないか、あるいは負の相関があると報告している。沢谷・鈴木 (2016) は、人称代名詞の使用とエッセイ評価との間に正の相関関係があることを示す一方で、接続語句や語彙的結束性についてはエッセイ評価との相関がみられなかったと述べている。Crossley et al. (2016b) は、第二言語ライティングのエッセイ評価と結束性指標の関連を検証し、全体的な結束性がエッセイ評価と関連があることを示

す一方で、接続詞や代名詞の使用が評価と負の相関を示すとも報告している。これらの研究は、結束性とライティング評価との間に、複雑な関係性があることを示唆している。

結束性とライティングプロセス

それでは、この結束性は、ライティングプロセスとどのように関連することが見込まれるのであろうか。これまでの第二言語および外国語ライティングプロセス研究では (a) 計画、(b) 文章化、(c) 推敲という、3つのサブプロセスが取り上げられてきた (e.g., Hayes and Flower, 1980)。特に、計画と推敲は多くの研究で焦点が当てられている。これらは、書き手の熟達度や最終的なプロダクトの質、そして全体の構成や論理の流れに関連するものと考えられており、ひいては結束性にも関連性をもつことが示唆される。

計画や推敲に関する先行研究では、高熟達度の書き手について、課題序盤や文章を書き始める前に全体の構成の計画（包括的計画）を行い、ある程度文章が完成した課題終盤には推敲を行うという特徴が指摘されている (e.g., Hirose & Sasaki, 1994; Manchón & Roca de Larios, 2007; Roca de Larios et al., 2008; Sasaki, 2000; Yamanishi, 2009)。Hirose and Sasaki (1994) は、ライティングプロセスに関する質問紙を質的に分析し、高熟達度の書き手が文章化の前に内容や構成について計画したり、書き終わった後に推敲を行ったりする傾向があると報告した。さらに、Sasaki (2000) でも、高熟達度の書き手は書き始める前に全体の構成を計画することが示されている。Yamanishi (2009) は、量的な質問紙を用いた調査で、高熟達度の書き手ほど、文章の流れ (flow) を考慮しながら書くことや、内容をまとめるための表現を考えながら書くといった意識を、より強く持っていたと報告している。

また、計画や推敲の時間配分についても多くの研究がなされている。高熟達度の書き手における時間配分の特徴として、計画に多くの時間を充て、課題序盤には計画に、終盤には推敲に多く時間をかける傾向がある (Roca de Larios et al., 2008; Xu, 2018; Xu & Qi, 2017) ことが示されている。特に Xu (2018) は、修正行動に焦点を当てた分析の結果、課題終盤に向けて修正の割合が増えていくと報告している。

これらの先行研究で得られた知見から、課題序盤に書く内容や構成について計画を立てる書き手は、文章化を中盤以降に行うため、序盤にプロダクトの大部分を書き上げることはないと推測できる。また、推敲についても、課題終盤には修正の頻度が増加するという見通しが立つ。したがって本研究では、包括的計画と関連が見込まれる行動として、課題序盤においてどれだけの割合の語数を書いたかを取り上げる。また、推敲に関わる行動として、課題終盤における修正の回数に着目する。これらの変数と最終的な英作文の結束性指標との関連を検証し、

ライティングプロセスと結束性指標の関連性を検討する。

序盤の語数の割合が小さい書き手ほど、序盤に文章化よりも計画を優先して行っていると考えられ、その結果結束性のある質の高い文章が書けることが見込まれる。また、終盤の修正回数が多ければ、終盤に推敲を重ねていることが見込まれるため、こちらも結束性のある文章になることが見込まれる。

調査対象

本研究では、ライティングプロセスコーパスである WritingMaetriX Corpus（以下 WMXC; 石井ほか, 2015）のデータを分析対象とする。WMXC には、日本の大学に在籍する英語学習者 ($n=164$) から収集された、344本の英語エッセイの最終的なプロダクトファイルと、ライティングプロセス記録ソフトウェア WritingMaetriX（草薙ほか, 2015）によって記録されたライティングプロセスのファイルが含まれている。エッセイ課題は、20–60分の範囲というゆるやかな時間制限下で、最終的な語数の目安を200–300語として、WritingMaetriX 上で書くように指示されたものである。その他のデータ収集の手続きやデータの詳細については、石井ほか (2015) を参照されたい。

WMXC に含まれるエッセイ課題のトピックは、(a) It is important for college students to have a part time job, (b) Smoking should be completely banned at all the restaurants in the country, (c) School Education の3つである。トピックがプロセスに与える影響を考慮し、本研究では最もエッセイの本数が多かった (a) のトピックで書かれたエッセイのみを分析対象とする。正しく記録がなされていないなど、データに不備があるものを除外し、最終的に分析対象となったのは154本であった。この分析対象のデータの平均課題遂行時間は40.26分 ($SD=7.89$) であった。

データ処理・分析

分析には統計解析環境 R 4.3.3 (R Core Team, 2024) を使用した。これらのライティングプロセスデータから、課題序盤における語数の割合ならびに終盤における修正の回数を算出した。序盤・終盤の時間の閾値については、課題時間を5つに区切った Xu and Qi (2017) に倣い、各データの課題の開始から全体時間の20%を序盤、終了前の20%を終盤と定義した。修正回数については、Backspace キーを押下した回数とした。

結束性指標の算出には、TAACO 2.0.4 (Crossley et al., 2016a) を用いた。(a) 語彙の多様性 (Lexical Density)、(b) 語彙の重複 (Lexical Overlap)、(c) 意味の重複 (Semantic Overlap)、(d)

接続語句 (Connectives)、そして (e) 既知性 (Givenness) の 5 つのカテゴリの、150 を超える結束性指標が算出されたが、今回のエッセイはすべて 1 段落構成となっているため、段落間の語彙的重複などの、段落についての指標は除外し、合計 104 の指標を分析対象とした。

序盤の語数の割合と終盤の修正回数、ならびに結束性指標のそれぞれについて、記述統計量を算出するとともに、ピアソンの積率相関係数を算出した。

結果・考察

課題序盤における語数の割合ならびに終盤における修正の回数の分布を図 1 に、記述統計を表 1 に示す。全体的に、課題の序盤でおよそ半分の分量を書き上げている書き手が多いことが分かる。一方で、終盤の修正回数については、書き手間でのばらつきが大きかった。中盤に書き上げてから課題終了まで、ほぼ修正をしない書き手も見られた。

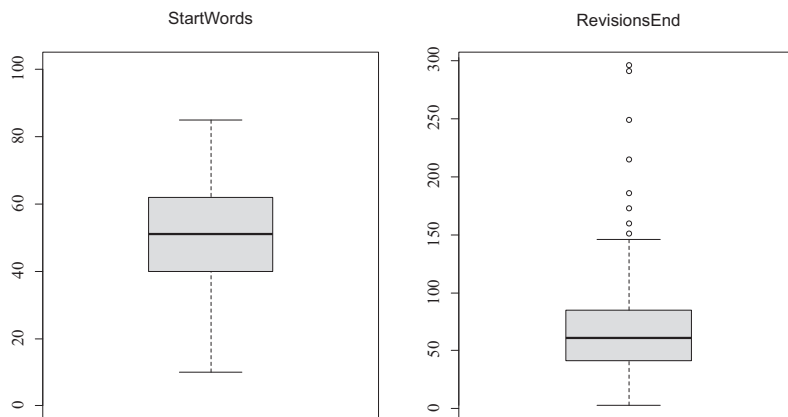


図 1 課題序盤の語数の割合 (左) と終盤の修正回数の分布 (右)

表 1 課題序盤における語数の割合ならびに終盤における修正の回数の記述統計 ($n=154$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.
序盤の語数 (%)	51.01	15.35	10	85
終盤の修正回数	67.49	47.33	0	293

以下に、これらライティングプロセスを示す 2 変数と、TAACO で算出した結束性指標との間の記述統計と相関係数をカテゴリ別に示す。まず、語彙的多様性の指標の記述統計と 2 変数との相関係数を表 2 に示す。序盤の語数の割合が、複数の指標と緩やかな負の相関を示してい

ることから、序盤の語数が少なければ少ないほど、すなわち文章化よりも計画を優先的にやっているほど、語彙的多様性は大きくなることが分かる。語彙的多様性の指標が大きいということは、同一の語や類義語、上位語を繰り返し使っていないということを意味するため、序盤の計画は、結束性の語彙的多様性の側面を向上させるとはいえないと考えられる。

表2 語彙的多様性の指標の記述統計と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.	序盤語数	修正回数
レンマ TTR	0.42	0.06	0.27	0.63	<u>-.35</u>	-.18
移動平均レンマ TTR	0.70	0.04	0.56	0.82	-.13	-.15
語彙的密度 (トークン単位)	0.56	0.04	0.46	0.69	-.03	.20
語彙的密度 (タイプ単位)	0.67	0.04	0.59	0.79	.05	.15
内容語レンマ TTR	0.51	0.08	0.30	0.73	<u>-.27</u>	-.18
機能語レンマ TTR	0.34	0.05	0.19	0.55	<u>-.34</u>	-.15
移動平均機能語 TTR	0.46	0.05	0.31	0.58	-.05	-.13
名詞レンマ TTR	0.46	0.11	0.22	0.82	<u>-.25</u>	-.17
動詞レンマ TTR	0.54	0.09	0.30	0.79	-.16	-.03
形容詞レンマ TTR	0.67	0.15	0.25	1.00	-.06	-.06
副詞レンマ TTR	0.73	0.16	0.33	1.00	-.16	-.05
代名詞レンマ TTR	0.22	0.11	0.08	1.00	<u>-.26</u>	-.03
名詞・代名詞レンマ TTR	0.38	0.08	0.22	0.76	<u>-.31</u>	-.16
連語 (2-gram) レンマ TTR	0.79	0.07	0.59	0.93	<u>-.22</u>	-.10
連語 (3-gram) レンマ TTR	0.90	0.05	0.72	0.99	-.14	-.04

注. 下線は .20 以上の相関を示す。

次に、表3に語彙的重複について記述統計ならびに相関係数を示す。語彙的重複のカテゴリには非常に多くの指標があるが、ここでは紙面の都合上、2変数のいずれかに相関関係が見られたもののみを掲載する。こちらも、序盤の語数の割合が、いくつかの指標と相関を示した。特に、内容語や名詞+代名詞に重複して使用しているものが多い書き手は、序盤に書く語数の割合が大きい傾向にあった。これは、序盤に計画よりも文章化を優先して行っている書き手ほど、結束性の語彙的重複の側面がよいと解釈できる。

しかし、語彙的重複の指標 (隣接語重複率 [全文、文単位で標準化]) の値が最も大きかったエッセイで使用されている語彙を観察したところ (図2)、part time job や money, important, learn といった特定の単語やフレーズが何度も繰り返し使用されている。したがって、語彙的重複の値が大きいとはいえ、過度に同じ単語やフレーズを繰り返し使用しても、洗練された文章にはならないということがわかる。

表3 語彙的重複の指標の記述統計と相関係数(抜粋)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.	序盤語数	修正回数
隣接語重複率(全文)	0.22	0.05	0.11	0.37	.19	.05
(全文、文単位で標準化)	2.47	0.86	1.00	7.00	.21	-.02
(2文前、内容語、文単位で標準化)	1.84	0.79	0.42	5.14	.20	.05
(2文前、内容語、二値化)	0.64	0.11	0.29	0.84	.21	.14
(名詞+代名詞、文単位で標準化)	1.08	0.43	0.28	2.88	.21	.10
(2文前、名詞+代名詞、文単位で標準化)	1.58	0.57	0.48	3.57	.24	.07
(2文前、名詞+代名詞、二値化)	0.68	0.11	0.26	0.86	.20	.12

I think that it is important for college students to have a part time job. First, we don't have much money. The textbooks we buy for lessons are so expensive. And most Japanese students live alone. We have to prepare our meals and buy several goods we use in order to live. For these reasons, we don't have much money. In order to save money, we have better have a part time job. Second, we can learn many things by earning money and having a part time job. We study several things by attending lessons of colleges. But if we weren't allowed to have a part time job, we would know only academical things after graduating the colleges. When we come to work in society, we must know many things. In order to live efficiently in the future, we should have a part time job. Some people claim that college students need not have a part time job and must concentrate on only the lessons and HomeWorks. But I don't agree with this opinion. I think that we can't learn the skills which play important roles only by addressing lessons and homework and even if we have a part time job, we can study well. For these reasons, I think that we can learn many important things by having a part time job. It is important for college students to have a part time job.

図2 語彙的重複の指標の値が大きいエッセイ(下線は繰り返し使用されている語)

次に、意味的な重複の記述統計と相関係数を表4に示すが、ここでは文間の名詞・動詞の同義語の重複に非常に弱い相関関係がみられる以外、顕著な相関は見られなかった。課題の序盤の計画や終盤の推敲といった行動は、最終的なプロダクトにおける意味的重複とは関係性が無いことが示唆された。

表4 意味的重複の指標の記述統計と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.	序盤語数	修正回数
文間の名詞同義語重複	0.86	0.59	0.05	4.25	.18	.13
文間の動詞同義語重複	0.59	0.43	0.00	2.75	.16	-.12
文間の LSA コサイン類似度	0.43	0.11	0.15	0.75	.06	.02
2つ先の文との間の LSA コサイン類似度	0.78	0.06	0.62	0.92	.02	.01
文間の Word2Vec 類似度	0.90	0.03	0.79	0.96	.02	.06
2つ先の文との間の Word2Vec 類似度	0.92	0.02	0.85	0.98	-.01	.05

次に、接続語句の記述統計と相関係数を表 5 に示す。接続語句のカテゴリにも多くの指標があるが、ここでは語彙的重複と同様に、2 変数のいずれかに相関関係が見られたもののみ抜粋して報告する。順序を表す語（first, next, to begin with など）と序盤の語数の割合との間に、中程度の負の相関がみられた。序盤に文章化よりも計画を優先して行っている書き手ほど、順序を表す接続語句を多く使用し、論理的な構成の文章を書く傾向があることが明らかとなった。

一方、名詞句を伴う指示詞（this や that の後ろに名詞句を続けて使用する、例：this sentence）を多く使う書き手ほど、終盤の修正回数が少ないことがわかった。これは、終盤に推敲を行うことで結束性が向上するという、ライティングプロセスに関する先行研究の知見とは反する結果となった。

表 5 接続語句の指標の記述統計と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.	序盤語数	修正回数
順序を表す語	0.01	0.01	0.00	0.02	<u>-.26</u>	<u>-.07</u>
名詞句を伴う指示詞	0.01	0.01	0.00	0.03	<u>-.12</u>	<u>-.20</u>

最後に、既知性の記述統計と相関係数を表 6 に示す。繰り返し使用された内容語レンマの比率、ならびに繰り返し使用された内容語と人称代名詞レンマの比率の 2 指標が、序盤の語数の割合と終盤の修正回数ともにゆるやかな正の相関を示した。この結果は、序盤に計画よりも文章化を優先する書き手は、同じ内容語を繰り返し使用していると解釈できる。一方で、終盤の推敲において、内容語を繰り返したり、代名詞の使用を検討したりしたという解釈も可能であろう。

表 6 既知性の指標の記述統計と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.	序盤語数	修正回数
代名詞密度	0.07	0.03	0.01	0.15	.13	.06
代名詞と名詞の比率	0.27	0.13	0.05	0.69	.12	.00
繰り返し使用された内容語レンマの比率	0.37	0.06	0.24	0.52	<u>.21</u>	<u>.22</u>
繰り返し使用された内容語と人称代名詞レンマの比率	0.44	0.07	0.25	0.58	<u>.26</u>	<u>.22</u>

結論

本研究では、英語学習者のライティングプロセスと、結束性との関係を、ライティング課題の序盤にどの程度の割合の語数を書いたか、そして終盤にどれだけの回数の修正を行ったかの 2 点に着目し、探索的に検討した。結果として、序盤の計画行動と終盤の推敲行動の一部が結

束性の特定指標と関連していることを示した。具体的には、序盤に文章化よりも優先して計画を行うと、語彙的多様性が高まるが、逆に序盤に文章化を優先して行えば、語彙的重複が大きくなる傾向にあることが明らかとなった。一部の結果は、従来のライティングプロセス研究の知見と異なる傾向を示しており、ライティングプロセスと結束性の間には複雑な関係性があることが示唆された。

これまでライティングの結束性はエッセイのプロダクトの中のみで評価されてきたが、本研究では結束性とライティングプロセスとの関連を探ったという点で意義がある。英語学習者のライティング指導において、結束性の一部の側面を向上させるうえで、計画や推敲について考慮することが重要であることを示唆することができたのも、本研究の意義といえよう。

一方で、本研究では TAACO で算出された大量の結束性指標のうち、ライティングプロセスを表す行動指標と相関がみられた指標のみを取り上げて議論した。しかし、この点は本研究における課題である。本来であれば、すべての指標の関係性を考慮した分析を行うのが望ましい。決定木分析などのデータに基づいて変数を選択する手法を用いたより詳細な再分析も今後の課題としたい。また、様々な熟達度のデータを収集し、上級者と初級者のプロセスと結束性の関係性を比較することで、ライティング指導上のより実践的な示唆を得ることも今後の方向性としていきたい。

引用文献

- Crossley, S. A., & McNamara, D. S. (2010). Cohesion, coherence, and expert evaluations of writing proficiency. In S. Ohlsson & R. Catrambone (Eds.), *Proceedings of the 32nd Annual Conference of the Cognitive Science Society* (pp. 984–989). Austin, TX: Cognitive Science Society. <https://escholarship.org/uc/item/6n5908qx>
- Crossley, S. A., Kyle, K., & McNamara, D. S. (2016a). The tool for the automatic analysis of text cohesion (TAACO): Automatic assessment of local, global, and text cohesion. *Behavior Research Methods*, 48, 1227–1237. <https://doi.org/10.3758/s13428-015-0651-7>
- Crossley, S. A., Kyle, K., & McNamara, D. S. (2016b). The development and use of cohesive devices in L2 writing and their relations to judgments of essay quality. *Journal of Second Language Writing*, 32, 1–16. <https://doi.org/10.1016/j.jslw.2016.01.003>
- 福田陽子 (2020). 「英語学習者のライティングにおける一貫性・結束性の量的分析から質的分析へ—「読み手からみた不自然さ」を左右する要因とは—」 *EIKEN Bulletin*, 32, 44–67. https://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol32/vol_32_p44-p67.pdf
- Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. Routledge.
- Hayes, J. R., & Flower, L. (1980). Identifying the organization of writing processes. In L. W. Gregg & E. R. Steinberg (Eds.), *Cognitive processes in writing* (pp. 3–30). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Hirose, K., & Sasaki, M. (1994). Explanatory variables for Japanese students' expository writing in English: An

- exploratory study. *Journal of Second Language Writing*, 3, 203–229. [https://doi.org/10.1016/1060-3743\(94\)90017-5](https://doi.org/10.1016/1060-3743(94)90017-5)
- 石井雄隆・石井卓巳・川口勇作・阿部大輔・西村嘉人・草薙邦広 (2015). 「WritingMaetriX を用いた言語資源の構築と英語学習者のライティング・プロセスの解明」『外国語教育メディア学会 第55回全国研究大会 発表要綱集』 190–193.
- 工藤洋路 (2011). 「日本人英語学習者のライティングにおける結束性の特徴」 東京外国語大学 博士論文. <https://doi.org/10.15026/69492>
- 草薙邦広・阿部大輔・福田純也・川口勇作 (2015). 「学習者のライティングプロセスを記録・可視化・分析する多機能型ソフトウェアの開発：WritingMaetriX」『外国語教育メディア学会中部支部紀要』 26, 23–34. https://doi.org/10.20656/letcj.26.0_23
- Liu, M., & Braine, G. (2005). Cohesive features in argumentative writing produced by Chinese undergraduates. *System*, 33, 623–636. <https://doi.org/10.1016/j.system.2005.02.002>
- R Core Team (2024). R: A Language and Environment for Statistical Computing. R foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <https://www.R-project.org/>
- Roca de Larios, J., Manchón, R., Murphy, L., & Marin, J. (2008). The foreign language writer's strategic behaviour in the allocation of time to writing processes. *Journal of Second Language Writing*, 17, 30–47. <https://doi.org/10.1016/j.jslw.2007.08.005>
- Sasaki, M. (2000). Toward an empirical model of EFL writing processes: An exploratory study. *Journal of Second Language Writing*, 9, 259–291. [https://doi.org/10.1016/S1060-3743\(00\)00028-X](https://doi.org/10.1016/S1060-3743(00)00028-X)
- Sasaki, M., & Hirose, K. (1996). Explanatory variables for EFL students' expository writing. *Language Learning*, 46, 137–168. <https://doi.org/10.1111/j.1467-1770.1996.tb00643.x>
- 沢谷佑輔・鈴木智己 (2016). 「英語ライティングにおける結束性と評価の関係性—まとまりのあるライティングを目指した実践的研究—」『北海道英語教育学会紀要』 15, 35–54. https://doi.org/10.24675/helesje.15.0_35
- Xu, C. (2018). Understanding online revisions in L2 writing: A computer keystroke-log perspective. *System*, 78, 104–114. <https://doi.org/10.1016/j.system.2018.08.007>
- Xu, C., & Qi, Y. (2017). Analyzing pauses in computer-assisted EFL writing—A computer-keystroke-log perspective. *Journal of Educational Technology & Society*, 20, 24–34. <https://www.jstor.org/stable/26229202>
- Yamanishi, H. (2009). Japanese EFL learners' use of writing strategies: A questionnaire survey. *The Bulletin of the Writing Research Group, JACET Kansai Chapter*, 8, 53–64.
- Yang, W., & Sun, Y. (2012). The use of cohesive devices in argumentative writing by Chinese EFL learners at different proficiency levels. *Linguistics and Education*, 23, 31–48. <https://doi.org/10.1016/j.linged.2011.09.004>

AI時代の英語教育についての一考察¹⁾

佐々木 真

Abstract

This paper aims to discuss the current state of English education in relation to the development of artificial intelligence technologies. It briefly overviews artificial intelligence and its relevant aspects, including its applications, basic concepts, and highly specialized fields such as ChatGPT. The discussions in the paper predict the pros and cons of these technologies, providing examples to conclude that AI should not be rejected but embraced in English education.

Keywords: 英語教育、生成 AI、人工知能、ChatGPT

1. はじめに

Artificial Intelligence は「人工知能」という日本語訳が存在するが、近年では AI と表示されることが多く、マスメディアでもこの表記を見ない日はないほど、日常的な言葉となっている²⁾。特に ChatGPT に代表される生成 AI の発達は目覚ましく、画像や映像の創出、そして人間が自然言語でコンピュータと対話することさえ可能となっている。その中でも翻訳への応用は顕著であり、今やスマートフォンにインストールされた翻訳アプリを使えば、外国語での音声認識と翻訳、そして日本語での応対の音声認識と表記の双方向が簡単にできる³⁾。

このような社会状況の大きな変化の中、英語教育はどのようにあるべきかが問われている。それは英語を含む外国語教育の目的が何なのか、そして、教育の方法はどうあるべきか、ということにもなろう。もはや人工知能に抗うことは現実的ではなく、むしろ活用して英語教育をどのように充実させるかを考える段階にある。

本稿の筆者は情報科学の専門家ではない。しかしながら、言語学者として、また英語教育を

担う一人の教員として、現在の人工知能や生成 AI が英語教育にどのように関わるのかの現状を認識し、この技術がこれからの英語教育にどのように関与するかを一考する。

2. 人工知能の利用例

冒頭にも述べたように、人工知能 (AI) の社会での利用例は毎日のようにメディアで取り上げられている。松原 (2022) は人工知能が現状どのように使われ、また将来の社会をどのように変える可能性があるかをわかりやすく説明している。新聞でも様々な記事で、多くの分野での活用例が示されている。ビジネス分野では、銀行の融資に対する査定⁴⁾、財務分析⁵⁾、不動産鑑定⁶⁾、社員の人材育成⁷⁾、自動運転⁸⁾など多岐にわたり、多額な投資をするまでになっている⁹⁾。また学術や教育分野でも、実験の補助¹⁰⁾、授業での活用¹¹⁾、就職指導¹²⁾と応用範囲が広がっている。驚くことに、人間にだけ許された創造的な行為についても、すでに人工知能の活躍が見られ、俳句の作成や (川村、山下、横山 2021)、小説の執筆さえ可能になっている (佐藤 2016)。

また、残念なことに、人工知能の利用には負の側面もある。犯罪¹³⁾や軍事 (嘉幡 2018) への利用の他、特に生成 AI による著作物については、その著作権についてのトラブルが生じている¹⁴⁾¹⁵⁾。このようなことから各国政府も、人工知能や生成 AI について、規制や対応の動きを見せ始めている¹⁶⁾。

人工知能や生成 AI の利用が、特に英語教育に直接関係するのは、自動翻訳や通訳への応用だろう。すでに同時通訳機能を内蔵するスマートフォンが発売され¹⁷⁾、ライブ通訳のサービスもある¹⁸⁾。また専用マイク付きのイヤフォンをお互いにつけることで、自然な同時通訳が可能になった製品も出ている¹⁹⁾。

こうした人工知能の飛躍的な利用を可能にしたのは、ハードウェアの飛躍的發展に寄るところが大きい。例えば、スマートフォンの代表として Apple 社の iPhone 15 Pro の処理性能は 1993 年に公開された映画 *Jurassic Park* の作成で使用された Clay 社製のスーパーコンピュータ、Clay-X-MP の 3 台連結分の 100 倍の処理性能である²⁰⁾²¹⁾。身につけられるほど小さな機材に人工知能の機能が内包され、また使用することが可能な日常になっている現実を見据えて、英語教育がどうあるべきかという視点を改めて持つ必要があるのではないだろうか。

3. 人工知能について

人工知能とは「人間の知能に近い人工的な知能をもつコンピューター」(松原 2022: 14) で

あり、Artificial Intelligenceという言葉が初めて使われたのは1956年のことである（森川 2022: 8）。以後、パズルなどの推論や探索を行う1960年代の第一次ブーム、エキスパートシステムと呼ばれる特定の知識に特化した1980年代から90年代の第二次ブームを経て、機械学習とディープラーニングによる生成AIの2000年代から現在の第三次ブームへと変遷している（松原 2022: 36-43）。

機械学習とはコンピュータが「データをもとにルールや知識を自ら学習する……」（松原 2022: 52）ということである。インターネットの普及によって得られる大量のデータから「どのように適切なグループ分けができるのか、その分け方を自動的に学習する方法」（松原 2022: 55）と捉えることができよう。

人工知能も上記の定義によるとコンピュータであり、コンピュータはそれを制御するプログラムで動く。プログラムであるから、何かしらの入力があり、そこに演算が働き、出力をする。すなわち関数と同じであるが、人工知能では、その処理が高度に複雑になっている。最近の人工知能を特徴づける概念が深層学習であり、これは「深層ニューラルネットワーク（deep neural network）の学習」を意味する（上野 2022: 81）。深層ニューラルネットワークとは、入力と出力の間の処理が幾重にもまたがるものであり（上野 2022: 81-82）、人間の脳を参考にしたモデルである（森川 2022: 24）。

筆者はコンピュータ科学やデータサイエンスの専門ではないので、その仕組みについては松原（2022）、森川（2022）、上野（2022）を参照したいが、昨今の生成AIによる飛躍的な処理能力の向上は、この深層ニューラルネットワークによる機械学習の発展によるところが大きい。

4. 生成AIとChatGPT

人工知能の話題の中でも、生成AIとChatGPTと呼ばれる技術についての注目が大きい。生成AIとは「文章や画像、音声や動画を作り出す人工知能の技術」（野村総合研究所 2023: 94）である。動画ではすでにCMでAIによって作り出されたタレントが出ているし²²⁾、生成AIが作り出すフェイク画像については、あまりに精巧であるため現実のものか否か区別がつかない場合もある²³⁾。生成AIは画像の生成から発展していて（野村総合研究所 2023: 94）、画像を細分化したセグメントに分けて数値化し（次田 2023: 46）、その処理について蓋然性の比重（係数）をかけることで（松原 2022: 78-86）、精度を上げている。さらに出力の結果を処理にフィードバックして、係数を修正して出力の精度を上げる（松原 2022: 84-85）。人工知能による機械学習の利点はこの絶え間ない係数の修正によって出力精度が上がることである。人間と

は異なり、体力や集中力といった制限に縛られないため、その修正は絶えず行われ、処理精度が刻一刻と高まっている。

英語教育や言語処理に関連する AI としては「事前に獲得したルールを適用し抽出」する認識系 AI（野村総合研究所 2023: 98）と「事前に獲得した知識を活用して生成」する生成 AI（野村総合研究所 2023: 98）がある。前者は言語音や文字の認識をする役割を担い、後者が言語表現に関わる（野村総合研究所 2023: 97）。その中でも、特に英語教育に直結するのが、Open AI 社の ChatGPT²⁴⁾であり、昨今話題である。

ChatGPT は会話 AI（野村総合研究所 2023: 52）で、自然言語でコンピュータに入力し、その出力を得られる。従来人間がコンピュータとコミュニケーションをするには、コンピュータを制御する Python などのコンピュータ言語を利用するのが一般的だった。しかし ChatGPT では、人間同士の会話のように、自然言語のテキスト入力で結果が得られるという点において画期的と言える。ChatGPT による自然言語処理の範囲は多岐に渡り、おおよそ言語を使うことについては人間と同じような能力があるとも考えられ（野村総合研究所 2023: 77）、それを可能にしている背景には大規模言語モデルの存在がある（野村総合研究所 2023: 58）。

5. 大規模言語モデル

大規模言語モデルとは「人間が日常的に話したり書いたりする言葉（自然言語）について、次に出現する単語を予測するモデル」のことである（野村総合研究所 2023: 58）。この予測の根拠をなすのが膨大なデータから学習したパターンであり、そのパターンを支えるのが出現の蓋然性である（野村総合研究所 2023: 59）。

例えば、Hello という表現が出力されたとする。もしもこの後に表現が続かなければ 0、表現が続くとしたら 1 と仮定する。この場合、0 となる確率（もしくは蓋然性）と 1 となる確率は単純にそれぞれ 50% にはならない。例えば挨拶という場面なら、0 よりも 1 の確率が高く、What's up? など、何かしらの表現が続くのが自然なやりとりである。ネットの言語使用例をデータとするなら、会話やスクリプトから Hello に続く表現がある場合、ない場合よりも多いのであれば、この確率は、例えば 0 が 30%、1 が 70% のような比重になるであろう。

次に 1 が選ばれるとすれば、次に how, when, what, where などの疑問詞が続くとしたら、それらの比重も how が 70%、when が 60% のように定めることができる。さらに、その後には are, is, can などが選択され、その蓋然性も変化する。以降、このように語彙の選択が paradigmatic な蓋然性によって導かれ、同時に syntagmatic な関係から選択される語彙と、それらが構成する節の整合性について人工知能が機械学習を重ね、さらに精度を上げていく。

上記では語彙の選択について触れたが、これは表現自体の選択にも関連する。例えば、図1のように *Hello. How are you?* という表現に対する返答としては、いくつかの可能性があるが、その蓋然性は同じではなく、可能性の高さを係数で表示することができる。なお、図1で示された係数はあくまでも仮のものであって、例である。

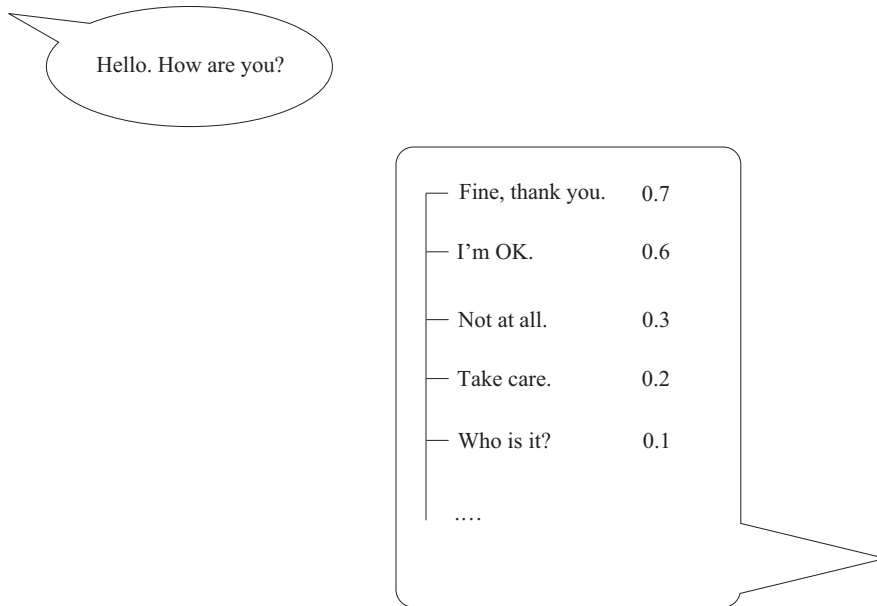


図1：応答の蓋然性

大規模言語モデルでは、膨大なデータからこの蓋然性を処理し、生成データとして出力する。そして同時に係数の修正を行い、処理精度の向上が得られる。すでに大規模言語モデルはアメリカの医師免許試験、司法試験、日本の医師国家試験合格のレベルにまで達しており（野村総合研究所 2023: 53-54）、ある意味では人間と同等か人間を超える域に達している。

このような蓋然性によって組み合わせが決まり、出力されるというのは筆者が専門とする選択体系機能言語学の中で扱う言語体系網と酷似している。この体系網は言語表現を *construe*（解釈構築）する際の選択枝のシステムであり、音声や語彙、節といった言語単位の中で何が選択されるかを示し、どのように構成され、さらにそこにどのような蓋然性があるかを数値として示されている（Matthiessen 1995: 152, 402; Halliday 1991）。実は、大規模言語モデルを支える理論の一つに分布仮説があり（次田 2023: 162）、これは言語学者の J. R. Firth (1957) が唱えた “You shall know a word by the company it keeps.” という考えに基づく²⁵⁾。次田（次田 2023: 162）はこれを「単語の意味はその単語が置かれうる環境によって決まる」と訳しているが、

この意味というのは、すなわち単語の持つ語彙的意味素性 (lexical semantic feature) だけでなく、そこに含まれる語用論的な意味素性である連想 (association) までも、その単語が置かれた環境の中で活性化すると解釈できる。大規模言語モデルでは言語表現が組み合わせられる環境をインターネットにある膨大な言語データから抽出し、組み合わせている。環境 (コンテキスト) における言語表現の選択という点において、生成 AI は選択体系機能言語学と親和性が高いと考えられ、実際に佐野 (2024) は選択体系機能言語学と ChatGPT についてわかりやすく明示している。

6. AI 時代の英語教育

6.1 語学教員としての生成 AI の捉え方

これまで言語学者として、また一人の英語教員として、情報科学の素人なりの理解で人工知能と生成 AI について述べてきた。雑駁な表現をすれば、「生成 AI は大規模なデータを基礎として解釈される可能性の高いもの、表出される可能性の高いものを組み合わせるものである」と捉えることができるだろう。その可能性は絶えず係数を調整することで精度を上げているために、生成 AI は時間を経るたびに、また入力と出力を繰り返すごとに機械学習を重ねて賢くなる。

生成 AI はこれまで人間が作成してきたことを抽出して、組み合わせることで、場面や目的に適応した言語表現を作り出すが、それは人工知能自体が意味を解釈したり、自らが考えて表出するものではない。しかしながら、その精度が高まっているため、生成 AI と接する人間が、人工知能をあたかも人間のように捉えてしまうことがある。人工知能は人間のように生理的・心理的制限がないため、時間のある限り機械学習を繰り返す。そのため、人間以上の学習能力を発揮して、学習成果を上げる。しかしながら、後述するように、生成 AI でも、まだ人間のように処理できない側面もある。

英語教員の中には情報機器に詳しい人もいれば、苦手意識を持つ人もいるであろう。だが、便利だからといって生成 AI に過度に依存してしまえば、出力結果に疑問を抱かず鵜呑みにする懸念がある。また反対に、必要以上に恐れて忌避し、デジタルネイティブの学生・生徒が囲まれている環境を理解せず、古い教授法に固執するあまり、教育効果を得る機会を逸してしまう可能性もある。むしろ、これからの英語教員は生成 AI の仕組みを漠然ながらも客観的に把握することによって、その現実を認識し、それを踏まえて英語教育をどのようにするのか、自ら模索するスタンスが求められるのではないだろうか。

6.2 実用か教養か

人工知能が当然となりつつある時代に、英語教育はどのようにあるべきなのだろうか。これまで約100年の間、日本の英語教育は「会話などの実用性を育成すべき」と、「人間力を涵養する教養として捉えるべき」という、実用対教養のシーソーの揺れに振り回されてきた（江利川 2022）。しかし、実用面について考えると、簡単な会話や質疑、さらには接客や会議さえ、ポケットク社の通訳機や通訳アプリ²⁶⁾が代行できるようになっている。「聞く・話す」といった実用性の意義は機械が取って代わり、「英語を使って会話するため」という理屈に説得力がなくなる。

一方、教養としての英語という観点はどうだろうか。教養として、「知っていた方がいい」という主張で、学生・生徒たちは納得して学習に取り組むことができるだろうか。教養という名目でも、自動翻訳機能や ChatGPT を使えば海外の文献は読めるし、AI が自ら科学論文の執筆さえできる状況²⁷⁾では、その主張も弱いと言わざるを得ない。

上記の状況を考えながら、それでも人が自ら英語を含む外国語を学ぶ意義を見出さなければ、教育する理由も、そしてそれを教える教員の *raison d'être* も見失うことになる。もはや英語教育は単に「実用か教養か」といった二元論を超えて、「人間か人工知能か」という語学教員の存在意義そのものを突きつけているようだ。

6.3 生成 AI は脅威なのか

生成 AI の中でも ChatGPT は特に教育について、その利用法が問われている。本学でも 2023 年 6 月 7 日付で学長名にて学生・教職員に「生成系 AI（人工知能）の利用について（方針）」が告知されている他、諸大学でも利用法についての方針が示されている²⁸⁾²⁹⁾³⁰⁾。ChatGPT は以下の例で示すように、レポート作成を簡単にしてしまう。そのため、学生や生徒が ChatGPT によって得られた回答をコピー・ペースト（コピペ）をして提出してしまうという剽窃行為が問題になっている³¹⁾。

だが、脅威やイメージが先行して、実際に ChatGPT がどのようなものか、どのように使用できるかについて知らないという教員もいるであろう。わかりやすい解説書も出ているので、詳細はそちらを参照してもらいたい³²⁾、要約すると、ChatGPT では「プロンプト」と呼ばれる人間が入力する質問や指示を認識してその応答を生成する。

例として、英文の和訳について見てみよう。筆者が教科書として使用しているテキスト（Douglas and Bohlke 2020）から一部を引用し、ChatGPT に和訳させたところ、数秒で日本語訳が出力された。

例1：教科書からの引用英文とその日本語訳

プロンプト：

次の英文を日本語に訳してください。

Many people say dolphins are intelligent. They seem to be able to think, understand, and learn things quickly. But are they as smart as humans, or are they more like cats and dogs? Dolphins use their brains quite differently from the way people do. But scientists say dolphins and humans are alike in some ways. How?

(Douglas and Bohlke 2020: 9)

出力：

「多くの人は、イルカは知能が高いと言います。彼らは考えたり、理解したり、物事を素早く学んだりできるように見えます。でも、彼らは人間と同じくらい賢いのでしょうか？それとも猫や犬に似ているのでしょうか？イルカは人間とはかなり異なる方法で脳を使います。しかし、科学者たちは、イルカと人間にはいくつかの共通点があると言います。どういう点でしょうか？」

(ChatGPT による出力)³³⁾

この和訳は自然な日本語であり、学生が訳したものと同等か、もしくは学生の和訳以上に自然である。学生が自分で英文の取り組みずに、ChatGPT を利用すれば、このように難なく和訳の課題ができてしまう。

では、レポートではどうだろうか。次の例は筆者が ChatGPT に「マクベスの血のイメージでレポートを400字で書いて」と入力したところ、ChatGPT が数秒で生成した回答である。

例2：マクベスのレポート

プロンプト：

マクベスの血のイメージでレポートを400字で書いて。

出力：

『マクベス』における血のイメージは、罪と内面的な苦悩を象徴する重要なモチーフです。物語が進むにつれて、血はマクベス夫妻の良心の呵責と恐怖の表現として強調されます。

まず、ダンカン王を殺害した際、マクベスは手に残った血を「ネプチューンの大海も洗い流せぬ」と嘆き、罪の深さを強く感じています。この血は単なる物理的なものでなく、彼の心の汚れを象徴しています。特に、マクベス夫人は「手に血が付いている」と幻覚を見て狂気に陥ります。彼女の台詞「この血の染みは何をもっても消えない」は、罪から逃れられないことを示しており、血が精神的な負担を象徴していることが明らかです。最終的に、血のイメージは人間の心の闇、そして権力への欲望が引き起こす悲劇的な結末を象徴する重要なテーマとして、『マクベス』全体にわたって繰り返されます。

これをそのままコピー・ペーストすれば、英文学の課題として上出来と言えるであろう。わずか数秒でこのようなレポートの作成が可能であるため、ChatGPTの利用で学生は自ら調べる努力をしない可能性があり、ひいては教育の阻害を招きかねない。そのために、ChatGPTは脅威であり、利用は望ましくない、禁止すべきとの意見が出ることも当然かもしれない³⁴⁾。

しかし、ICTのない昔から優秀な先輩のノートを丸写しにしたり、参考書を丸写しにしたものはあったはずだ。今はその優秀な先輩が生成AIに取って代わったに過ぎない。だが、人工知能は人間の先輩よりもあまりにも優秀すぎるし、手書きの手間さえ必要ない。これでは、人工知能、生成AIが教育を壊すのではないかという脅威論が出てくるのも当然のことかもしれない。

6.4 生成AIではできないこと

前節の例が示すように、ChatGPTは確かに学生・生徒の課題を代行し、人間の能力に取って代わる面がある。だが、果たして本当に生成AIは英語教育の意義を奪ってしまうのだろうか。先ほど示した英文和訳の一部をもう一度見てみよう。

「多くの人は、イルカは知能が高いと言います。彼らは考えたり、理解したり、物事を素早く学んだりできるように見えます。」

この和訳の中の「彼ら」は*They*の訳であり、問題はない。だが、この*They*は前文に示された*dolphins*のことであり、そのことは表出されていない。そもそも代名詞*they*は基本的には前出の複数名詞のことを指すため、*They seem to be able to think, understand, and learn things quickly.*という文が、例えば、*There are some genius young children in this school.*という文に続くこともでき、その際の*They*は*some genius children*になる。ChatGPTは入力された文章の意味解釈はせず、表層的な語彙項目とその結合の蓋然性から生まれる表現を出力すれば良い。

しかし、人間が解釈をする際には、代名詞 *they* が何を示すかを考えないと解釈できない。「木を見て森を見ず」の言のように、筆者が教室で学生に和訳を求めると、多くの学生が、*they* を「彼ら」とは理解できるが、前出の *dolphins* との関係に気づかず、それによって文と文との意味的接合が見えない。すなわち文ごとに意味は独立して理解できるのだが、それがまともに、文章全体になると理解ができないという事象が見受けられる。代名詞の解釈は語彙同士の照応関係からくる意味であり、実際の読解では、この照応関係の理解力が、文章の理解力につながる。

照応関係は文内における語彙の意味が他の節や句、及び文に依存する関係であり、コンテキスト依存の意味である。代名詞はそれが顕著に現れる事象である。だが、英語の場合には「*the*+ 名詞」という表現形式がこの関係を生み出すため、この照応関係に由来する表現の理解がポイントになる。これを示す例として、筆者が他のクラスで独自に作成している教材から英文を取り出して、ChatGPT に次のように指示を出し、和訳をさせた。

例 3：英文和訳 1

プロンプト：

次の英文を日本語にしてください。

Your critical comments gave me new viewpoints to amend my doctoral dissertation and your kind advice encouraged me for the academic task.

出力：

あなたの批判的なコメントは、博士論文を修正するための新たな視点を与えてくれました。また、あなたの親切な助言は、この学術的な課題に取り組む勇気を与えてくれました。

上記の例では「*the academic task* この学術的な課題」とは先行する「*my doctoral dissertation* 博士論文」のことである。しかし、表出された日本語にはその関係が明示されていない。

つまり、ChatGPT でもコンテキストに由来する意味については、まだ不十分なのである。実はこのコンテキストこそ人間が人工知能よりもまだ優位にあるところと考えられるのである。

6.5 コンテキスト

コンテキストとは状況、脈絡のことである。言語表現の狭義のコンテキストは共起する他の

語彙がある。それが次第に先行・後続する節や文、さらに談話内の照応関係などが関係する。また言語表現が交わされた場所や時間、目的、さらには話者同士の関係といった、状況に関するものがあり、広くは文化的なこともコンテキストになる (Halliday and Matthiessen 2014)。

言語表現でも文化的なコンテキストに連動したものとして慣用句がある。例えば、英語では The elephant in the room. という表現がある。例えば、この表現を使って、I suppose I'll be the one to mention the elephant in the room.³⁵⁾ という英文の意味を ChatGPT に尋ね、以下のような出力を得た。

例 4：英文和訳 2

プロンプト：

次の英語を日本語にしてください。

I suppose I'll be the one to mention the elephant in the room.

出力：

私が部屋の中の象に触れる人になるのかしら。

上記の和訳が成立するとしたら、「動物園のゾウのいる象舎の中で複数の人間が順番に象に触っている」という状況だろうが、これは日常生活ではほぼあり得ない状況であり、表現としては不自然さが残る。実はこの the elephant in the room という表現には「重要なのに誰も触れたがらない問題」³⁶⁾ という意味がある。したがって、上記の英文の意味は「私だけがその誰にも触れたがらない問題に言及するだろう」あるいは「私しか苦言を呈する人はいないだろう」などの日本語訳が考えられる。だが、ChatGPT の出力結果はあくまでも表面的な結果しか出せないのである。人間であれば、慣用句としての意味も加味しながら解釈の幅を取り、意味の選択肢を考えることができるであろう。

なお、ChatGPT でも適切なコンテキスト情報をプロンプトで示すと、蓋然性の高い慣用表現を示すことができる。ChatGPT に次のように尋ね、以下のような出力を得た。

例 5：英文和訳 3

プロンプト：

次の英文を日本語にしてください。

Everyone knows the difficulties for the project, nobody are likely to mention them. I suppose I'll be the one to mention the elephant in the room.

出力：

「誰もがこのプロジェクトの困難さを知っていますが、おそらく誰もそれについて触れようとはしません。私がある場のタブーに触れる人になりそうですね。」

ChatGPT でも、プロンプトによってコンテキスト情報が入力されれば、そこにおける表現の蓋然性から慣用句でも意味を示すことができる。だが、人間はこれまでの経験によって言語化されていない状況も記憶の中で再現することによって、その言語表現の意味を再現することができるのであり、ここに人間と AI の大きな違いがあると言えるだろう。

もう一つ例をあげよう。赤塚不二夫作の『天才バカボン』という漫画の中には「レレレのおじさん」というキャラクターがいて³⁷⁾、いつも道の掃除をしながら、通りかかる人に「お出かけですか？」と声をかける。さて、その意味はどのようなものだろうか。これを英語にする場合はどのような英語表現になるか ChatGPT に尋ねた。

例 6：英文和訳 4

プロンプト：

あなたは近所の人に会いました。「お出かけですか」、を英語にしてください。

出力：

Are you heading out?

この出力結果は確かに英語としては正しい。しかし、問題は日本語の文脈的コンテキストの中での「お出かけですか？」と英語文化圏で他人に Are you heading out? という表現の機能が異なるということである。この場合の「お出かけですか？」には相手に対する質問をして情報を得るという機能ではなく、むしろ「挨拶」としての機能が大きい。一方、英語圏で Are you heading out? と個人的な情報を聞き出す表現は挨拶として機能せず、むしろ個人的なことを聞くとは失礼だと言外の意味が生まれてしまう。したがって、上記の場合なら、Hello, how are you? くらいの英語表現にするべきだろう。

このようにコンテキストに大きく依存する事項ではまだ人間の経験という言葉化されない資

源によって解釈や表現ができるのだが、これももしかすると時間の問題であり、AI が視覚情報を同時に取り込み、過去のデータベースから人間関係に関する情報を重ねて「挨拶」という目的を引き出し、それに適合する表現を出力するということも、ごく近い将来には可能になるのかもしれない。

6.6 生成 AI による虚偽と偏見

生成 AI は 4 節でも述べたようにフェイク画像やフェイク映像を作成して、不正な情報作成に悪用されるケースがある。だが、これとは別に ChatGPT は事実とは異なる虚偽の内容を、さも事実であるかのような出力をすることがある。このような虚偽はハルシネーション³⁸⁾と呼ばれる（佐野 2004: 77）。また質問や指示の内容によっては差別や偏見に満ちた出力を行う場合がある（野村総合研究所 2023: 187-188）。これらの事象は生成 AI がどのようなデータを元にしているかによって発生してしまい、「データバイアス問題」と言われている（野村総合研究所 2023: 188）。

生成 AI はあくまでもサンプリングするデータの中から出現頻度や蓋然性といった確率の高いものを組み合わせて出力するのであり、出力の是非について人工知能は考えない。したがって、出力結果を鵜呑みにするのではなく、あくまでもそれを利用する人間が最終的に判断することが求められる。むしろ AI の時代だからこそ、人間の判断力が求められるとさえ言えるだろう。

7. 英語教育での AI 活用

ここまで ChatGPT に代表される人工知能がどのようなものであり、どのようなことができ、どのようなことがまだ不得手であるかを述べてきた。6.1 でも述べたように AI を活用することは社会的な流れであり、抗うことはできない。むしろ、社会は人工知能の利用を求めているし、教育分野でも例外にはならない。むしろ人工知能をどのように活用するのかを模索することが求められ、結果的にそれが今後の英語教育の活性化につながる。この節では実際に AI を活用した事例を紹介する。

7.1 教員としての具体的な利用法

教員はどのように ChatGPT と向き合い、共存すべきだろうか。福原（2023）は教員として ChatGPT をどのように利用するかを具体的に示している。そこには、授業計画作成、教材作成、例文作成、テストの問題作成などが挙げられ、示唆に富んでいる。ChatGPT は学生の

利用ばかりに注意が払われるが、教員としての有効利用という面もこれからは議論されるべきであろう。

筆者も日常的に ChatGPT を教材の作成に活用している。筆者の担当する「英語 Ib/Iib」は講読の授業であり、毎回学生に英文を読ませる。授業では学生が自分で訳読をする時間を与え、その後学生を当てて、答え合わせをしながら筆者がさまざまな項目について解説していく。この授業では授業の初めに15分、前週でポイントとなった項目の入った英文のプリントを小テストとして課し、学生は辞書を参照しながらそれを和訳する。この小テストは教科書の英文から引用するのではなく、学習した項目の入った別の英文である。従来はインターネット上で該当の項目の入った英文を検索し、この小テストの作成に膨大な時間が掛かっていた。しかし ChatGPT に次のようにプロンプトを入力し、英文を作成するようにしたところ、時間を短縮しつつ、学習用の英文として適切なものが得られるようになった。以下は cause という動詞が入った説明文を、英語を外国語として学習する学生に適切なものとして、40語で作成せよというプロンプトであり、そこから数秒で出力された英文である。

例7：英文作成1

プロンプト：

You're an English instructor. Please compose an explanatory passage in 40 words, using a verb "cause". The passage should be suitable for ESL students.

出力：

Lack of sleep can cause problems with focus and mood. When people do not sleep enough, they may feel tired and unable to think clearly. This can lead to mistakes at work or school and affect relationships.

このように、ターゲットとする項目を入れ、レベルの適切性や語彙数を簡単にプロンプトの中で指示することで、毎週用意しなければならない小テストの作成作業の負担が軽減されている。なお、単純に教科書の一部を引用して、再び和訳を求めれば教員の負担は少ないだろう。しかし、それは学生の「暗記力」を測定するものであり、英語力の判定にはならないし、学生の英語力の向上には繋がらないと懸念される。

ChatGPT によって出力される結果は、必ずしも担当している学生の習熟度に適切とは限らない。そこで何度か同じプロンプトを入力して、複数の出力を得るようにすることができる。

が、実際の出力結果は文章の構造については同じである。

例 8：英文作成 2

プロンプト：

Please compose an explanatory passage with 50 words, using the following expressions: “cause”, “allow”, “Once”, “help you”, “predict”, which are appropriate for ESL students.

出力 1：

Once you understand basic English grammar, it will allow you to express ideas more clearly. Grammar mistakes can cause confusion, but improving these skills will help you communicate better. Practicing often helps you predict how others will understand your message, making your English easier for everyone to follow.

出力 2：

Once you understand key grammar rules, it will allow you to communicate more clearly in English. Errors can cause misunderstandings, but improving grammar and vocabulary will help you share ideas effectively. Practicing regularly helps you predict how listeners will interpret your words, making communication smoother and more accurate.

出力 3：

Once you learn basic English grammar, it will allow you to express ideas more accurately. Mistakes can cause confusion, but a strong grasp of grammar will help you communicate effectively. Practice can help you predict how others will understand your words, making your English clearer and more reliable.

上記の 3 種類の出力では「英文法を学べばミスも減り、コミュニケーションが円滑になる」という意味内容ではおおよそ同じだが、細かい語彙の使い方や名詞句表現の複雑さが異なる。このように ChatGPT が出力したものをそのまま使うのではなく、比較検討して、時には、出力されたものを組み合わせるなどの工夫が教員に与えられた余地であろう。ChatGPT の出力結果がどれほど有用かは、実際に学生・生徒の習熟度や理解度を把握している教員だからこそできる判断である。

7.2 学生としての活用法

セクション6.3にも書いたように ChatGPT の学生利用には問題がある。しかし、その利用を止めることはできないし、社会的にはその有効利用を模索することが求められている。そうであるなら、むしろどのように ChatGPT や他の生成 AI と向き合い、利用していくべきなのかを学生・生徒と一緒に模索することが建設的だと言えないだろうか。

学生の ChatGPT 利用として、筆者の受け持っている学生の利用について簡単に紹介しておく。筆者は「実践英語 IV」の授業で、学生に英語でのメール指導を行なっている。学生にはメールの目的によって書かれるメールのモデルを提示し、表現構成の注意を示したのちに課題を出す。学生に示す課題は「クライアントに打ち合わせをしたい旨のメール」といった概要のみであり、いわゆる英文和訳ではない。そのため学生は自分たちで用意した PC やタブレットを用いて、示されたモデルを参考にするか、ネット上でテンプレートを検索する。授業ではパソコンで利用できるものは、どのようなものでも活用してもいいと指導している。

その中には実際に ChatGPT を利用する学生もいる。学生にどのように活用しているかと尋ねると、自分が作成した英文を ChatGPT に入力して校正させているとのことであった。この学生の作成した課題は文法的な間違い等はない。興味深いのは、ChatGPT による校正ができるという安心からか、この学生の作成した英文メールは他の学生と比較して情報量が多く、発展性に富んでいる。単に日本語を英訳させただけではメールを構成する表現形式を順序よく配置することができない。あくまでも当該の学生が日本語でまずはイメージした内容を英語にして、ChatGPT を使って修正をするという使い方である。このように自分の考えや解答を生成 AI に丸投げするのではなく、あくまでもネイティブチェックのように使用することは適切な利用法だと言えるのではないか。

また、別な例として、筆者が「教養セミナーⅡ」にて、学生にグループ活動をさせているが、その際にもテーマについてのヒントをまずは ChatGPT にて質問する学生もいた。この場合もその出力をそのまま使うということはず、その出力結果から得られた情報から議論の切り口を探るという使い方であった。これもまた有効な利用法であると考えられるし、むしろこれからの教育にはそのような利用法を教員から紹介・指導すべき時代が来ているとも言えるだろう。

8. AI 時代にめざすもの

本稿では人工知能、特に ChatGPT を例とする生成 AI がどのように英語教育に関係するかを述べてきた。OpenAI ChatGPT の他にも Apple 社の Apple Intelligence や Microsoft 社の Copilot+

Google社のGeminiなど、さまざまな生成AI機能が手軽に使い、社会のさまざまな場面での活用が取りざたされている。

そのような時流の中で、英語教育や他の語学教育において人工知能の使用を禁止するというのは、もはや現実的ではない。また、社会が大学教育に求めるものに、人工知能を使いこなす能力、共存する方法の習得もあろう。そうであれば、大学での英語教育では、さまざまな英語を経験させてChatGPTを補助として使い、そのアウトプットが適切かどうか、判断する力を涵養することに重きが置かれて然るべきではないだろうか。

デバイスや人工知能の発達は英語教育の価値を奪うのであろうか。いくらデバイスが通訳になり、対人コミュニケーションを助けるとはいっても、我々はいつでもオンラインにいるとは限らない。災害などによりインフラ環境が阻害されてしまった時こそコミュニケーションが重要になるはずである。その時にオフラインにて外国語を駆使できる力は否定されるものではないだろう。

また臨機応変な対応という面では人間の力が求められると思われる。筆者の経験で、コンビニの自動支払いでは、一度わからないことがあって躓いた時に、その場にいた店員が私の理解度に合わせて対応方法を説明してくれ、解決することができた。モニターで支払いの方法を表示していても、AIはその場のコンテキストに臨機応変に対応できないため、人間が処理しなければならないことも多いはずである。

対人コミュニケーションにおいて考えれば、親密度が上がるほど、直接言葉を聞いて理解したいと思うのが人情ではないだろうか。その時に共通言語としての英語やその他の外国語の能力があれば、さらに濃密なコミュニケーションができるはずである。

英語を含み、外国語教育を受ける価値は単にスキルの問題だけではない。外国語を通して、自分たちとは違う発想法や文化的な価値観に触れる。これからの外国語教育の目的は、いわば、「多様性を外国語で経験する」ということになるであろう。

人工知能を活用しつつある時代に、教育だけが時代の波に抗うことはできないはずである。そうであるなら、いかに人工知能と共存し、活用していくのかを探るのがこれからの語学教員に求められる姿勢と言えるのではないだろうか。

注

- 1) 本論文は2月14日、常葉大学大学院 国際言語文化研究科 FSDS 研修会にて行った講演、「AI時代の大学教育を考える」を元にして、語学教育に焦点を当てて論文化したものである。
- 2) 本論文における情報は2024年2月段階のものを中心としているが、執筆中に入手できたものについても、適宜示している。

- 3) ポケットーク株式会社では既に AI を利用した同時通訳のサービスを開始している。<https://pocketalk.jp>
- 4) 「みずほ、AI で新興に融資」日本経済新聞、2023 年 11 月 9 日
- 5) 「中堅企業、AI で財務分析」日本経済新聞、2023 年 12 月 6 日
- 6) 「戸建て価格、即日で査定」日本経済新聞、2023 年 12 月 8 日
- 7) 「コーチングに AI 活用」日本経済新聞、2023 年 11 月 25 日
- 8) <https://www.nissan.co.jp/BRAND/DRIVING/>
- 9) 「生成 AI 活用へ 500 億円 三井住友 FG 接客や営業に導入」日本経済新聞、2024 年 11 月 17 日
- 10) 「生成 AI が実験手助け」日本経済新聞、2023 年 11 月 10 日
- 11) 「授業に生成 AI、思考育む」日本経済新聞、2023 年 12 月 3 日
- 12) 「就活に AI 効果的に」日本経済新聞、2023 年 12 月 1 日
- 13) 「詐欺師の正体は生成 AI」日本経済新聞、2023 年 12 月 31 日
- 14) 「生成 AI 「無断学習」 歯止め」日本経済新聞、2023 年 12 月 21 日
- 15) 「NY タイムズ 「記事無断使用で損害」 オープン AI を提訴」日本経済新聞、2023 年 12 月 28 日
- 16) 「EU, AI を包括規制」日本経済新聞、2023 年 12 月 9 日
- 17) <https://www.samsung.com/jp/smartphones/galaxy-s24/>
- 18) <https://pocketalk.jp/forbusiness/livetranslation>
- 19) <https://www.timekettle.co/ja>
- 20) <https://medium.com/@justinwalls/just-one-iphone-15-pro-is-about-100x-more-powerful-than-the-supercomputer-array-that-ran-jurassic-991686e09dfd>
- 21) <https://www.jurassic-pedia.com/cray-x-mp-supercomputer/>
- 22) <https://www.itoen.co.jp/news/article/64855/>
- 23) <https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/02779/031100002/>
- 24) <https://openai.com/ja-JP/>
- 25) J. R. Firth は選択体系機能言語学の創始者 M. A. K. Halliday の恩師にあたり、この理論の源流の一人である。
- 26) <https://pocketalk.jp/pt-app>
- 27) 「AI が自動で科学研究：サカナ AI、数時間で論文執筆」日本経済新聞、2024 年 10 月 29 日
- 28) 常葉大学 <https://www.tokoha-u.ac.jp/info/240306-01/>
- 29) 東京大学 <https://utelecon.adm.u-tokyo.ac.jp/docs/20230403-generative-ai>
- 30) 武蔵野美術大学 https://www.musabi.ac.jp/news/20230511_03_01/
- 31) 「生成 AI で感想文 困った」日本経済新聞 2024 年 8 月 24 日、夕刊
- 32) 例えば、『わかる！使える！ ChatGPT 超入門』、メディアソフト、がある。
- 33) 以降、ChatGPT による出力データについては「ChatGPT による出力」の表記は省略する。
- 34) <https://www.technologyreview.jp/s/304063/banning-chatgpt-will-do-more-harm-than-good/>
- 35) <https://www.fruitfulenglish.com/blog/erii-27/> より引用
- 36) 「リーダーズ英和辞典」第 3 版
- 37) <https://www.koredeiinoda.net>
- 38) ハルシネーションについての詳細は次の URL を参照されたい。<https://www.nri.com/jp/knowledge/glossary/1st/ha/hallucination>

参考文献

- Douglas, N. and D. Bohlke (2020) *Reading Explorer Split 1A*, Boston: National Geographic Learning.
- 江利川春雄 (2022) 『英語教育論争史』、講談社
- Firth, J. R., (1957). A synopsis of linguistic theory, 1930–55. In Palmer, F. R. (ed.) (1968). *Selected papers of J. R. Firth 1952–59*. London and Harlow: Longman.
- 福原将之 (2023) 『教師のための ChatGPT 入門』、東京：明治図書
- Gillian Butler & Freda McManus (2014) *Psychology: A Very Short Introduction* 2nd edition. Oxford: Oxford University Press, p. 8.
- Halliday, M. A. K. (1991). Towards probabilistic interpretations. In Ventral, E. (Ed.) *Functional and Systemic Linguistics*. Mouton de Gruyter: Berlin and New York.
- Halliday, M. A. K. and C. M. I. M. Matthiessen (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar* 4th edition. London and New York: Routledge.
- 市川正樹 (2023) 『文系のためのデータサイエンス・AI 入門』、東京：学術図書出版社
- 嘉幡久敬 (2018) 「人工知能の軍事応用—世界の現状の日本の選択—」、『科学技術社会論研究』第16号：科学技術社会論学会
- 川村秀憲、山下倫央、横山想一郎 (2021) 『人工知能が俳句を詠む—AI 一茶くんの挑戦—』、東京：オーム社
- Matthiessen, C. (1995) *Lexicogrammatical Cartography: English Systems*, International Language Sciences Publishers: Tokyo.
- 松原仁 (監修) (2022) 『文系のためのめっちゃやさしい人工知能』、東京：ニュートンプレス
- 森川幸人 (2022) 『絵でわかる10才からのAI入門』、東京：ジャムハウス
- 野村総合研究所 (編) (2023) 『まるわかり ChatGPT&生成AI』、日本経済新聞出版
- 大西可奈子 (2018) 『いちばんやさしいAI超入門』、マイナビ出版
- 岡野原大輔 (2023) 『大規模言語モデルは新たな知能か』、岩波書店
- 佐野大樹 (2024) 『生成AIスキルとしての言語学』、かんき出版
- 佐藤理央 (2016) 『コンピュータが小説を書く日—AI作家に「賞」は取れるか—』、日本経済新聞出版
- 次田瞬 (2023) 『意味がわかるAI入門』、筑摩選書
- 上野晴樹 (2022) 『一般教養としての人工知能入門』、近代科学社

Quality Evaluation by Synchrotron Radiation X-ray Topography of Hen-Egg-White Lysozyme Single Crystals Obtained by NiCl_2 Concentration Gradient Technique

Sadaharu JO

The quality of hen-egg-white lysozyme single crystals obtained by the NiCl_2 concentration gradient technique was evaluated by white-beam X-ray topography. The configuration of each Laue spot reflected the crystal morphology, and the crystal quality was high enough to investigate crystal defects and strains present. Several topographic images exhibited the line-like contrast along the $[\bar{1}10]$ direction and the slight deformation along the $[110]$ direction. Such specific features suggest that the strain was accumulated along the $[\bar{1}10]$ direction and the lattice distortion was induced along the $[110]$ direction.

Keywords: hen-egg-white lysozyme, NiCl_2 concentration gradient technique, white-beam X-ray topography, lattice distortion, lattice defect

1. Introduction

In recent years, research studies of biopolymers in the biomedical field have attracted wide attention with the development of techniques.¹⁻⁵ Such vigorous research activities strongly enforce the technological production of new types of nanomedicine.⁶⁻¹⁰ To promote such research studies, the precise understanding of the relationship between functions and structures of biopolymer molecules is inevitably important. Moreover, most protein molecules, which are biopolymers, exhibit diamagnetic characteristics; thus, different types of intermolecular interaction affected by both the electrostatic and magnetic interactions must be understood as fundamental knowledge. At present, the functions of many proteins *in vivo* are well understood on the basis of results of many precise experiments. It is certain that the functions of proteins *in vivo* are clearly affected by their molecular structures; hence, the information on accurate molecular structures of various proteins is valuable to understand their functions. However, the molecular structures of most proteins have never been determined yet, mainly because they are very

complex, which are constructed by a huge number of atoms with very highly sensitive intermolecular interactions. Thus, the establishment of a method to determine the molecular structures of proteins has been strongly recommended for many years. The determination of molecular structures of many proteins will contribute to disease treatment and drug design. The accurate structural determination on the order of less than 2.0–2.2Å is inevitably required for studies mainly on the antigen–antibody reaction in the field of pharmaceutical science and the technological design of nanomedicine. Therefore, it is remarkable that the accurate determination of the molecular structures of proteins has been performed under such restricted conditions.^{11–20}

Historically, molecular structures of many proteins have been determined mainly by nuclear magnetic resonance (NMR), neutron diffraction, and X-ray diffraction techniques. For many years, NMR techniques have been used to determine the molecular structures of proteins, but their accuracy was insufficient. In recent years, effective improvements in NMR techniques have been realized, and as a result, remarkable successes have been achieved.^{21–30} On the other hand, the direct observation of protein molecules was achieved by neutron diffraction and X-ray diffraction techniques. Neutron diffraction is the only way to observe hydrogen atoms and water molecules directly; however, the preparation of high-quality single crystals with sizes larger than 10 mm is required for such purpose at present.^{31–35} Regarding X-ray diffraction, high-quality protein single crystals with sizes larger than 1 mm are required to determine the molecular structures of proteins. The direct observation of protein molecules is very effective for determining each atomic site inside the molecules. Thus, obtaining high-quality single crystals of various proteins larger than 1 mm is very important in determining the accurate molecular structures of proteins. X-ray topography is a powerful tool for evaluating the crystal quality nondestructively and the only way to identify various types of dislocation in topographic images. Moreover, the inclusion of local strains and their crystallographic direction can be clarified from the images, which is not possible by other microscopic techniques.^{36–39} Obtaining high-quality single crystals of proteins with sizes larger than 1 mm is very important in understanding the relationship between functions and structures of proteins. Persistent efforts to obtain large high-quality protein single crystals have continued for many years. However, no useful technique has been developed to date and the way to obtain high-quality single crystals of proteins is the bottleneck in clarifying the relationship between functions and structures of proteins. A growth technique under microgravity conditions was suggested in 1980.^{40–42} Moreover, a growth technique for protein single crystals involving Fe atoms in a magnetic field was suggested by Rothgeb and Oldfield.⁴³ After that, the growth technique for protein single crystals without Fe atoms inside the molecules in a magnetic field was suggested with detailed descriptions by Sazaki et al.⁴⁴ and Ataka et al.⁴⁵ Crystallization

techniques for hen-egg-white lysozyme (HEWL) single crystals in a magnetic field have been developed to date.^{46–50} The NiCl_2 concentration gradient technique for obtaining HEWL single crystals was suggested by Ataka and Katsura, for the first time in 1993,⁵¹ with a follow-up study by their group in 2003.⁵² The fascinating feature of the NiCl_2 concentration gradient technique is that only a short growth interval is required to obtain protein single crystals with sizes larger than 1 mm. Moreover, this technique is very attractive because of its convenience and low cost, and no microgravity or magnetic field is required. In this paper, the results of the quality evaluation by the white-beam X-ray topography of HEWL single crystals obtained by the NiCl_2 concentration gradient technique are reported.

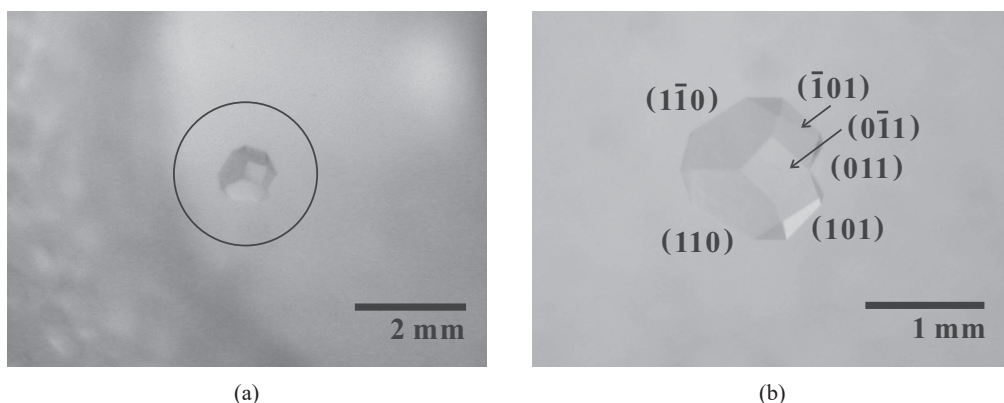
2. Experimental Procedure

HEWL powder was purchased from SERVA Electrophoresis GmbH, Germany. Single crystals were obtained by the NiCl_2 concentration gradient technique.^{51, 52} Thus, NiCl_2 was used as a crystallizing agent in this study. The conditions for the initial solutions were as follows: HEWL=40 mg · ml⁻¹, NiCl_2 =60 mg · ml⁻¹, and pH=5.0. pH was adjusted in each experiment by adding 1 N HCl. HEWL was crystallized in a ϕ 12 mm×25 mm ampoule. The solution height in the ampoule was controlled at 10 mm. The growth temperature was set at 13 °C by flowing water from a bath controller. The growth interval was 14 days. The crystal morphologies were observed by optical microscopy. Crystallographic characteristics were analyzed experimentally by the Laue method using the white-beam X-ray topography apparatus at SPring-8, the Japan Synchrotron Radiation Research Institute (JASRI), BL28B2 beamline. The apparatus was arranged such that it generated a forward reflection in accordance with the Laue method. The available X-rays had a wide energy band with energies higher than 5 keV. The critical energy of the X-rays was 28.9 keV. To reduce the damage to the HEWL single crystals caused by the X-rays, a water filter unit of 5–10 mm path length was set. The camera length was set at 120 mm, which was larger than that generally used, to prevent any damage to HEWL single crystals caused by X-rays. The slit dimensions were set at 10×10 mm². The X-ray incidence was parallel to the $[00\bar{1}]$ direction. Topographic images were recorded on X-ray films (Agfa D2, Agfa, Mortsel, Belgium) at an exposure time of approximately 10 s.

To determine crystallographic indices, specific programs, namely, the Laue Pattern Digitize & Laue Analysis & Result Display Program and the Laue Pattern & Stereographic Projection Display Program, which were originally developed by Norm Engineering Co., Ltd. for our studies, were employed.

3. Results and Discussion

Fig. 1(a) shows the top view of the condition inside the ampoule after the growth of HEWL single crystals. The specimen used in this study is encircled. The crystal was grown by static floating on the solution without any substrates, which means that the crystal was grown with less interfacial tension with respect to its surroundings. Fig. 1(b) shows the morphology of the HEWL single crystal, which shows a shape typical of a tetragonal crystal structure. The crystal size was determined to be ca. 1.0 mm. The HEWL single crystal showed sharp facets, whose representative crystallographic faces are indicated as (110) , $(\bar{1}\bar{1}0)$, (101) , $(\bar{1}01)$, $(0\bar{1}1)$, and (011) in the figure. Generally, tetragonal HEWL single crystals appear with all of their four equivalent $\{110\}$ faces present at one pyramid end, as shown in Fig. 1(b). From our microscopic observation, no cracks or voids in the specimen were confirmed.



Figs. 1 (a) Top view of inside the ampoule after the crystal growth and (b) levitating HEWL single crystal.

Fig. 2 shows a Laue pattern of the HEWL single crystal shown in Fig. 1(b). Many Laue spots can be observed in the pattern. The configuration of each Laue spot reflects the crystal morphology. Note that each Laue spot does not have an elongated configuration along the direct beam position. Hence, the crystal quality is high enough to evaluate the crystal defects and strains present. Even the intensity of each Laue spot is relatively lower than those of single crystals of inorganic materials^{53, 54} and low-molecular-weight single crystals such as pentacene and naphthalene.^{55–59} However, the Laue pattern in Fig. 2 is sufficient to determine that the crystal structure is tetragonal with the lattice constants $a=79.1$ Å, $b=79.1$ Å, $c=37.9$ Å, and $\alpha=\beta=\gamma=90^\circ$.

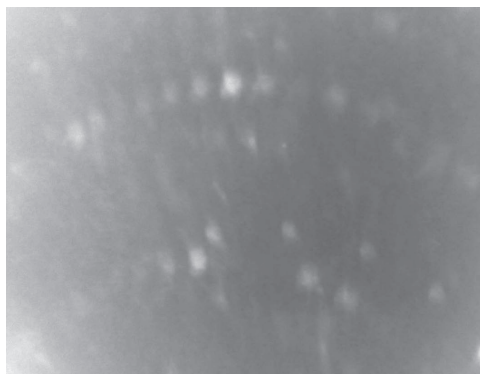
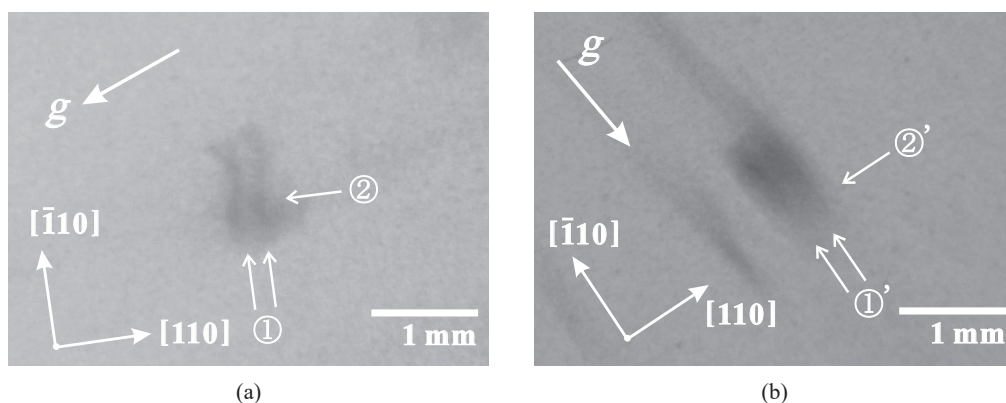


Fig. 2 Laue pattern of HEWL single crystal obtained by NiCl_2 concentration gradient technique. The incident X-ray beam was parallel to the $[00\bar{1}]$ direction.

Figs. 3(a) and (b) show enlarged topographic images of $\bar{1}\bar{1}0$ and $1\bar{1}0$ spots, respectively, which were recorded with the incident white beam parallel to the $[00\bar{1}]$ direction. Both topographic images substantially reflect the crystal morphology. In both Figs. 3(a) and 3(b), the two line patterns observed along the $[\bar{1}10]$ direction are indicated by two white arrows, ① and ①', respectively. On the basis of the theory of the invisible criterion for the dislocation contrast, the dislocations in images are assumed to be invisible at $\mathbf{g} \cdot \mathbf{b} = 0$. Here, $\mathbf{g}$ is the diffraction vector and $\mathbf{b}$ is the Burgers vector. Assuming that the origin of a line pattern is a screw dislocation, line patterns should be invisible or visible with a weak contrast in Fig. 3(a); on the other hand, assuming that the origin of a line pattern is an edge dislocation, line patterns should be invisible or visible with a weak contrast in Fig. 3(b). In fact, both line patterns ① and ①' are visible in both X-ray topographic images in Figs. 3(a) and 3(b); hence, the origin of the line patterns cannot be explained by the theory of the invisible criterion for the dislocation contrast. When the line patterns do not originate from any dislocations, it is generally considered that such line patterns originated from cracks and voids. However, no cracks or voids were observed by our microscopic investigations in real space. Therefore, it is most reasonable to consider that both line patterns originate from the accumulated strains along the $[\bar{1}10]$ direction. Tachibana et al. reported their observation of the line-like contrast originating from the screw dislocation line along the crystallographic $[1\bar{1}0]$ direction.⁶⁰ Moreover, the traces of the spiral step patterns originating from the screw dislocation with the $\langle 110 \rangle$ Burgers vector on the HEWL single crystal surfaces with the tetragonal HEWL single crystals have been observed by atomic force microscopy.^{61–63} By considering such experimental reports and our experimental results together, we found that the $[\bar{1}10]$ direction of the HEWL single crystal seems to have relatively

weaker molecular interactions than other crystallographic directions. In our study, it is possible that the crystal thickness is slightly small to detect dislocation lines by white beam X-ray topography, considering that the required size is larger than 1.5 mm.⁶⁰ Moreover, by comparing the topographic images in Figs. 3(a) and 3(b), we found that the line-like contrast in Fig. 3(a) possesses some deformation, indicated by the white arrow ②; however, that in Fig. 3(b) possesses no deformation, indicated by the white arrow ②'. Such configurational differences between topographic images in Figs. 3(a) and 3(b) are due to the induced lattice distortion along the $[110]$ direction.



Figs. 3 (a) and (b) show enlarged topographic images of the $\bar{1}\bar{1}0$ and $1\bar{1}0$ reflections, respectively.

Our quality evaluation by the white-beam X-ray topography of the HEWL single crystals obtained by the NiCl_2 concentration gradient technique revealed that the crystal quality was very high. However, it is considered that a more precise control of growth conditions, such as the growth temperature and growth interval, is required for determining molecular structures. It can be considered that strain accumulation and lattice distortion are caused by a slight change in growth temperature. It is certain that the growth interval should be longer to obtain larger HEWL single crystals. More stable and quasi-static growth conditions are required to obtain HEWL single crystals for determining their molecular structures. Tachibana et al. reported that large HEWL single crystals with a size of 4 mm were successfully obtained by the NiCl_2 concentration gradient technique.⁶⁰ Moreover, Suzuki et al. were the first to observe the dynamical diffraction phenomena by the oscillatory rocking curve technique for single crystals of glucose isomerase, which were never obtained under microgravity conditions.⁶⁴ Regarding HEWL single crystals, many researchers have assumed on the basis of the kinematic diffraction theory that the diffraction intensity should be proportional to the magnitude of the square of the structural factor. However, dynamical diffraction might occur even in HEWL single crystals. The NiCl_2 concentration gradient technique is

considered effective for obtaining high-quality HEWL single crystals.

4. Conclusion

The quality evaluation of HEWL single crystals obtained by the NiCl_2 concentration gradient technique was performed by synchrotron radiation white-beam X-ray topography. A precise comparison of representative enlarged topographic images between $\bar{1}\bar{1}0$ and $1\bar{1}0$ spots, the diffraction vectors of which were vertical to each other, revealed the existence of line patterns with the line-like contrast along the $[\bar{1}10]$ direction and the deformation of the line patterns along the $[110]$ direction. It is considered that HEWL single crystals in the $[\bar{1}10]$ direction relatively easily contain concentrated strains. Regarding the $[110]$ direction, the HEWL single crystal used in this study exhibited a lattice distortion along the $[110]$ direction.

Acknowledgements

The synchrotron radiation experiments were performed at SPring-8 with the approval of JASRI (Proposal Nos. 2003B0068, 2004A0212, 2005B0363, and 2006B1278; BL28B2). The author would like to thank Dr. M. Ataka (AIST), Professor K. Izumi (Kyoto Univ.), Dr. K. Kajiwara (JASRI), Dr. S. Maki (Okayama Univ. Sci.), Professor M. Tachibana (Yokohama City Univ.), Professor T. Kohzuma (Ibaraki Univ.), and Professor M. Takenaga (Tokyo Univ. Sci., Yamaguchi), for cooperation in experiments and fruitful discussions.

References

- 1 S. Jain, W. Medlin, S. Uprety, T. I. Smith, T. Olsson, J. Davis, S. Burrows, S. Chumley, M. Park, and G. M. Laurent: *Thin Solid Films* **791** (2024) 140236.
- 2 M. Rayatnia and G. Foroutan: *Surf. Sci.* **717** (2022) 121987.
- 3 F. Battaglia, F. Bonelli, M. Sgorbini, L. Intorre, M. Minunni, S. Scarano, and V. Meucci: *Anal. Methods* **15** (2022) 27.
- 4 F. Katral, D. Cimen, N. Bereli, and A. Denizli: *Mater. Sci. Eng. C* **97** (2019) 730.
- 5 H. Zhang: *Adv. Mater.* **32** (2020) 1806328.
- 6 F. Sadeghfar, M. Nikbakht, and R. Parvizi: *J. Mol. Struct.* **1309** (2024) 138110.
- 7 T. Lammers and M. Ferrari: *Nano Today* **31** (2020) 100853.
- 8 R. Pathak, V. D. Punetha, S. Bhatt, and M. Punetha: *Euro. Polym. J.* **196** (2023) 112257.
- 9 S. Bhatt, R. Pathak, V. D. Punetha, and M. Punetha: *React. Funct. Polym.* **191** (2023) 105678.
- 10 F. Naseer, E. Zahir, E. Y. Danish, M. Gull, S. Noman, and M. T. Soomro: *J. Environ. Chem. Eng.* **8** (2020) 104424.
- 11 I. Othmeni, R. Karoui, and C. Blecker: *Inter. J. Biol. Macromol.* **278** (2024) 134818.
- 12 P. Asrani, G. Seebohm, and R. Stoll: *J. Struct. Biol.* **216** (2024) 108112.

- 13 M. Daniela, T. Rodriguez, S. G. Lee, S. R. Choudhury, R. Paul, B. Selvam, D. Shukla, J. M. Jez, and S. Pandey: *J. Biol. Chem.* **300** (2024) 107252.
- 14 C. Palaniappan, S. Rajendran, and K. Sekar: *Current Res. Struct. Biol.* **7** (2024) 100145.
- 15 B. Gracia, P. Montes, A. M. Gutierrez, B. Arun, and G. I. Karras: *Cell Rep.* **43** (2024) 113803.
- 16 F. Rahimzadeh, L. M. Khanli, P. Salehpour, F. Golabi, and S. P. Bahrami: *Comp. Bio. Med.* **179** (2024) 108815.
- 17 J. P. Bonin, J. M. Aramini, Y. Dong, H. Wu, and L. E. Kay: *J. Mag. Res.* **364** (2024) 107725.
- 18 C. Moriscot, G. Schoehn, and D. Housset: *Ultramicroscopy* **254** (2023) 113834.
- 19 M. P. Dalton and J. Coleman: *Biophys. J.* **122** (2023) 53a.
- 20 K. Hatti, A. Biswas, S. Chaudhary, V. Dadireddy, K. Sekar, N. Srinivasan, and M. R. N. Murthy: *J. Struct. Biol.* **197** (2017) 372.
- 21 N. J. Fowler and M. P. Williamson: *Structure* **30** (2022) 925.
- 22 T. N. Bozin, I. G. Berdyshev, K. N. Chukhontseva, M. A. Karaseva, P. V. Konarev, A. M. Varizhuk, D. M. Lesovoy, A. S. Arseniev, S. V. Kostrov, E. V. Bocharov, and I. V. Demidyuk: *J. Biol. Chem.* **299** (2023) 104585.
- 23 B. Mao, R. Guan, and G. T. Montelione: *Structure* **19** (2011) 757.
- 24 A. Kumari and K. Dorai: *J. Molecular Struct.* **1041** (2013) 200.
- 25 K. T. Debiec, M. J. Whitley, L. M. I. Koharudin, L. T. Chong, and A. M. Gronenborn: *Biophys. J.* **114** (2018) 839.
- 26 J. W. Liebeschuetz: *J. Med. Chem.* **64** (2021) 7533.
- 27 M Hirai, S. Ajito, M. Sugiyama, H. Iwase, S. Tokata, N. Shimizu, N. Igarashi, A. Martel, and L. Porcar: *Physica B:* **551** (2018) 212.
- 28 M. W. Buckley and N. A. Besley: *Chem. Phys. Lett.* **501** (2011) 540.
- 29 H. Iwamoto: *Biophys. J.* **118** (2020) 120a.
- 30 D. K. Blumenthal, J. Copps, E. V. S.-Nguyen, P. Zhang, W. T. Heller, and S. S. Taylor: **289** (2014) 28505.
- 31 J. J. Kasianowicz, A. M. Ribeiro, and K. Robinson: *Biochem. J.* **121** (2022) 248a.
- 32 A. V. Shvetsov, D. V. Lebedev, D. B. Chervyakova, I. V. Bakhlanova, I. A. Yung, A. Radulescu, A. I. Kuklin, D. M. Baitin, and V. V. I.-Ivanov: *FEBS Lett.* **588** (2014) 948.
- 33 S. Chodankar, V. K. Aswal, P. A. Hassan, and A. G. Wagh: *Physica B* **398** (2007) 112.
- 34 R. J. C. Gilbert, R. K. Heenan, P. A. Timmirs, N. A. Gingles, T. J. Mitchell, A. J. Rowe, J. Rossjohn, M. W. Parker, P. W. Andrew, and O. Byron: *J. Molecular Biology* **293** (1999) 1145.
- 35 R. Willumeit, N. Burhardt, G. Diedrich, J. Zhao, K. H. Nierhaus, and H. B. Stuhmann: *J. Molecular Struct.* **383** (1996) 20.
- 36 B. Lorber, C. Sauter, J. D. Ng, D. W. Zhu, R. Giege, O. Vidal, M. C. Pobert, and B. Capelle: *J. Cryst. Growth* **204** (1999) 357.
- 37 K. Wako, D. Fujii, S. Tsukashima, T. Kishi, M. Tachibana, and K. Kojima: *J. Cryst. Growth* **401** (2014) 238.
- 38 H. G. Gallagher, J. N. Sherwood, and R. M. Vrcelj: *J. Cryst. Growth* **475** (2017) 192.
- 39 H. Koizumi, M. Tachibana, K. Kojima, and I. Yonezawa: *Physica B: Condensed Matter* **401–402** (2007) 691.
- 40 W. Littke and C. John: *Science* **225** (1984) 203.
- 41 W. Littke and C. John: *J. Cryst. Growth* **76** (1986) 663.
- 42 A. McPherson: *J. Cryst. Growth* **110** (1991) 1.
- 43 T. M. Rothgeb and E. Oldfield: *J. Bio. Chem.* **256** (1981) 1432.

- 44 G. Sazaki, E. Yoshida, H. Komatsu, T. Nakada, S. Miyashita, and K. Watanabe: *J. Cryst. Growth* **173** (1997) 231.
- 45 M. Ataka, E. Katoh, and N. I. Wakayama: *J. Cryst. Growth* **173** (1997) 592.
- 46 S. Maki, M. Ataka, T. Tagawa, and H. Ozoe: *Phys. Fluids* **19** (2007) 087104.
- 47 S. Maki and M. Ataka: *Jpn. J. Appl. Phys.* **46** (2007) 2910.
- 48 S. Maki and M. Ataka: *J. Appl. Phys.* **96** (2004) 1696.
- 49 S. Tanaka, S. Maki, and M. Ataka: *Phys. Rev. E* **73** (2006) 061510.
- 50 S. Maki, Y. Oda, and M. Ataka: *J. Cryst. Growth* **261** (2004) 557.
- 51 M. Ataka and T. Katsura: *JAERI-M* **92-213** (1993) 61.
- 52 D. C. Yin, Y. Oda, N. I. Wakayama, and M. Ataka: *J. Cryst. Growth* **252** (2003) 618.
- 53 Y. Chikaura, S. Iida, S. Kawado, K. Mizuno, S. Kimura, J. Matsui, M. Umoto, T. Ozaki, T. Shimura, Y. Suzuki, K. Izumi, K. Kawasaki, K. Kajiware, and T. Ishikawa: *J. Phys. D* **34** (2001) A158.
- 54 M. Shinbara, Y. Suzuki, Y. Chikaura, and H. Kii: *J. Cryst. Growth* **210** (2000) 187.
- 55 S. Jo: *J. Aichi Gakuin Univ. Hum. Sci.* **71** (2024) 1.
- 56 S. Jo, S. Suzuki, and M. Yoshimura: *Jpn. J. Appl. Phys.* **63** (2024) 065503.
- 57 S. Jo and M. Takenaga: *Jpn. J. Appl. Phys.* **49** (2010) 078002.
- 58 S. Jo, N. Takada, and M. Takenaga: *Jpn. J. Appl. Phys.* **50** (2011) 065501.
- 59 S. Jo, H. Yoshikawa, A. Fujii, and M. Takenaga: *Appl. Surf. Sci.* **252** (2006) 7383.
- 60 M. Tachibana, H. Koizumi, K. Izumi, K. Kajiware, and K. Kojima: *J. Synchrotron Rad.* **10** (2003) 416.
- 61 S. D. Durbin, W. E. Carlson, and M. T. Saros: *J. Phys. D Appl. Phys.* **26** (1993) B128.
- 62 J. H. Konnert, P. D'Antonio, and K. B. Ward: *Acta Cryst. D* **50** (1994) 603.
- 63 A. McPherson, A. J. Malkin, Yu. G. Kuznetsov, and M. Plomp: *Acta Cryst. D* **57** (2001) 1053.
- 64 R. Suzuki, Koizumi, K. Hirano, and M. Tachibana: *PNAS* **115** (2018) 3634.

明治期以降曹洞宗人物誌（十二）

川口 高風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第六十四巻第二号（平成二十九年一月）に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌（十）」の続編である。

凡例

〔見出し項目〕

- 一、収録人物は明治期以降に宗門の発展に活躍した人物で、その出典は「明教新誌」「宗報」「曹洞宗報」を中心に、明治、大正、昭和期以降に刊行された著作や各種雑誌、新聞などから採取した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。
- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げた。
- 四、かな見出し項目は姓と名の間にダッシュを挿入して読みやすくした。

〔見出し項目の配列〕

- 一、配列は五十音順の予定であったが、「い」以降は完成した原稿の順序とした。そのため本稿では「に」「ひ」「ほ」の項をとりあげた。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順（没年順）に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

〔本文の記述とその順序〕

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては居住地、号、字、生年月日、父母、誕生地（誕生時の地名）、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂（没）年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、本文は基本的に、編著者が直接、居住地へ問い合わせを行った返書（調査用紙）にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初（初出）に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地が郡の場合は県を入れ、市の場合は県を省略した。なお、平成の大合併による新市町村名への変更を行っていないものもある。
- 六、居住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

に

にいかわーかつぎゅう 新川活牛

安政元年（一八五四）―大正十四年（一九二五）

秋田県山本郡宝昌寺二十七世、北秋田市福厳寺十六世。号は鐵眼。安政元年七月十五日、出羽国山本郡森岳村に池内清太郎の二男として生まれる。受業師は白井孝賢、本師は浅田大賢。明治八年（一八七五）より行脚の地である富山県新川郡新川村との因縁あって、池内姓より新川姓に改姓したと伝わる。大正十四年三月十八日に七十二歳で示寂した。（「宝昌寺過去帳」）

にいまーこうどう 新美孝道

明治二十八年（一八九五）―昭和五十三年（一九七八）

東京都福厳寺二十四世、平塚市慈眼寺二十五世。号は敬山。明治二十八年十二月一日、東京新橋に深谷家の二男として生まれる。本師は新美即心。大正十年（一九二

一）駒澤大学を卒業し、十四年に慈眼寺住職となる。教区長、駒澤大学教練教官、特派布教師、管内布教師、教学審議会委員、曹洞宗布教師、教学研究所委員、總持寺顧問を歴任した。宗外では、仏教青年伝道会講師および理事、東京通信局嘱託講師、東京花まつり会常務理事、東京市社会局嘱託、同市立本所第二青年学校指導員、同市立業平商工学校講師、高等工業学校学生監

兼講師、東京都本所仏教会会長、財団法人東京都慰霊教会常務理事、大船観音協会法務局長、墨田区少年保護司会顧問および会長、東京少年保護司会理事、東京仏教団常務理事、墨田区少年保護察協会理事長、墨田区青少年問題協議会常任委員、財団法人宗教福祉協会理事、東京宗教補導連盟常任委員、震災記念堂主管、全日本仏教会組織教化委員ならびに理事、芸能文化連盟理事長を歴任した。昭和二十五年、保護司について文部大臣表彰を受けた。昭和五十三年二月十四日に八十三歳で示寂した。（「跳龍」第三五七号『洞門龍象要覧』『曹洞宗現勢要覧』）

にいまーそくしん 新美即心

―昭和五年（一九三〇）

東京都福厳寺二十三世。愛知県に生まれる。号は一應。本師は新美大定。天野信淳、服部太元、新美孝道に参随する。昭和五年十二月十四日に七十三歳で示寂した。

にかいどうーしゅうぜん 二階堂秀禪

―大正六年（一九二七）

郡山市常圓寺二十四世、郡山市廣修寺二十四世。号は默應。受業師は玉泉智成、本師は瑞祥俊林。明治三十五年（一九〇二）十二月に、常圓寺より廣修寺に入山する。大正六年七月十三日に示寂した。（「常圓寺過去帳」）

にかいどうーてんしゅう 二階堂恬秀

昭和七年（一九三二）―平成三年（一九九一）

郡山市常圓寺二十八世。昭和七年七月五日、郡山市熱海町に二階堂賢耳の二男として生まれる。受業師、本師は二階堂賢耳。駒澤大学仏教科卒業。青年期と昭和五十九

年（一九八四）二月から六十年十月まで永平寺に安居する。公務員を勤務後、六十三年秋に常圓寺住職となる。梵鐘の新鑄、墓地参道、境内、駐車場の整備事業などを多数行つた。平成三年十二月十四日に六十一歳で示寂した。（「傘松」第五八〇号）

にしありーえかん 西有恵観

ー昭和二十三年（一九四八）

桐生市鳳仙寺二十八世、神奈川県足柄下郡英潮院十九世、秩父市龍石寺。号は穆光。受業師、本師は西有穆山。曹洞宗大学卒業後、總持寺に安居する。アメリカ開教師としてアメリカ合衆国に駐在し、伝道布教に貢献した。また曹洞宗禅林講師を務める。昭和二十三年二月に示寂した。（『現代仏教家人名辞典』）

にしありーえとう 西有恵燈

嘉永三年（一八五〇）ー昭和七年（一九三二）

東京都鳳林寺二十一世、青森県三戸郡法光寺三十二世、青森県三戸郡瑞泉寺、青森県

三戸郡長泉寺。号は明庵。嘉永三年十二月十日に江戸牛込肴町に生まれる。明治八年（二八七五）六月二十三日に瑞泉寺、長泉寺、法光寺の住職となり、二十八年七月九日に鳳林寺住職となる。昭和七年八月十二日に示寂した。（鳳林寺歴住牌）（西有恵燈）死亡埋葬認許証）

にしありーせいかん 西有静観

明治十九年（二八八六）ー昭和三十二年（二九五七）

群馬県甘楽郡宝積寺四十六世、秩父市龍石寺、高崎市龍昌寺。号は穆堂。明治十九年六月三日、愛知県海部郡十四山村に平野徳次郎の二男として生まれる。受業師、本師は西有慧観。明治三十二年（一八九九）に得度、四十四年に曹洞宗大学を卒業、その後總持寺に安居する。大正二年（一九一三）に龍石寺住職となり、五年に龍昌寺に移り、十年二月五日に宝積寺四十六世となる。昭和四年（一九二九）に曹洞宗布教師、總持寺六百回大遠忌布教係、永平寺二祖六百五十回大遠忌布教師、教区長（三

回）、特派布教師、県布教委員を歴任する。また、昭和八年（一九三三）十二月に宝積寺開山四五〇回忌を営み、永代祠堂碑を建立する。宗外では、郡各宗和敬会長、仏聯支部理事、群馬県常務理事、社会教育委員、自治振興委員、中央教化団体地方委員を歴任し、十七年から十九年三月まで木幡農学校国語教授嘱託を務める。十九年八月に東京都王子区岩淵第二国民学校の集団疎開を受け入れ、学寮を指導する。著書に明治四十四年に『穆堂漫言』、大正十年『脚本 因果の水鏡菊が池』。大正五年から昭和二年（一九二七）まで『群馬新聞』に「穆堂禅話」を連載、その他に「正法仏田」「菊女一代記」がある。昭和三十二年五月十九日に七十二歳で示寂した。（『曹洞宗現勢要覧』『鷲翎山宝積寺史』）

にしありーぼくさん 西有穆山

文政四年（一八二二）ー明治四十三年（一九一〇）

總持寺独住三世、東京都鳳林寺十五世、静岡県駿東郡如来寺、神奈川県足柄下郡英潮

院十七世、東京都宗参寺、東京都本然寺十二世、桐生市鳳仙寺二十五世、青森県三戸郡法光寺三十世、袋井市可睡斎四十七世、横浜市内西有寺開山、札幌市中央寺開山。号は穆山、他に可翁、無為庵、有安老人。勅号は直心浄国禪師。文政四年十月二十三日、陸奥国三戸郡湊村に父笹本長次郎、母なをの長男として生まれる。受業師は金龍、本師は安窓泰禪。天保四年（一八三三）六月二十一日に青森県三度郡長流寺の金龍に就て得度、十二年に仙台松音寺悦音に参じ、江戸駒込栴檀林（吉祥寺）に学んだ。また、牛込宗参寺曹隆の庇護を受け、十四年に安窓泰禪に嗣法し、同年鳳林寺十五世として首先住職、次いで英潮院に転住する。文久二年（一八六二）に宗参寺に転住、初会修行し、次に鳳仙寺に歷住する。嘉永四年（一八五二）、相模早川海蔵寺の月潭全龍に学び、開悟の後には前橋龍海院の奕堂禪師に参じた。のち、原坦山、滝谷琢宗と共に教部省に出仕、中講義、ついで大講義に任ぜられる。總持寺出張所監院兼本山貫首代理に命じられる。明治八年（一

八七五）に法光寺に転住、北海道に中央寺を開いた。二十五年に島田町傳心寺に隠棲し、三十三年に横浜の信徒が一字を建立し西有寺と名付け、その開山に請われる。三十四年春に總持寺に独住三世として晋住し、六月十九日に直心浄国禪師の勅号を宣下される。三十五年（一八六四）に曹洞宗管長となり、永平寺の森田悟由と隔年で職を掌る。三十八年に總持寺を辞し横浜に退棲した。著作に『永平家訓私記』、『護法用心集』、『山陰閑話』、『洞上安心訣』、『禪戒鈔講話』、『学道用心集講話拾聞解』、『学道用心集提耳録』、『西有禅話』、『洞上五位説講話』、『洞上五位説不能語』、『坐禅用心記提耳録』、『正法眼蔵開講備忘』、『雪竇頌古称提聞解』、『普勧坐禅儀提耳録』、『宝慶記弁々』、『曹洞宗信徒安心訣』、『三松稿』、『禪戒訓蒙』、『禪戒の要訣』、『陸三布教問答』、『辨道話講義』、『参同契宝鏡三昧薫猶』、『正法眼蔵啓迪』、『直心浄国禪師語録』がある。明治四十三年二月四日に世寿九十歳で示寂した。（『仏教各宗高僧品評』『洞上高僧月旦』『各宗高僧譚』『曹洞宗百年のあゆみ』『曹

洞宗現勢要覽

にしおーれいじゅん 西尾令準

嘉永元年（一八四八）―大正十一年（一

九二二）

静岡県周智郡栄泉寺二十五世、小牧市圓昌寺七世。号は祖道。嘉永元年十二月十一日、尾張国熱田内田町に吉田常昭の長男として生まれる。受業師は西尾道宗、本師は村上祖禪。曹洞宗地方布教部委員長、静岡県第十二宗務所長を務めた。大正十一年七月三十一日に七十五歳で示寂した。（『現代仏教家人名辞典』

にしおかーつぎゅう 西岡哲牛

―大正九年（一九二〇）

胎内市廣嚴寺十六世、群馬県吾妻郡雙松寺、村上市正福寺。号は哲牛。新潟県北蒲原郡紫雲寺町稻荷岡に西岡善助の二男として生まれる。受業師は蘭山同香、本師は大志洞雲。明治十三年（一八八〇）に雙松寺にて首先住職、十九年に正福寺へ転住した。曹洞宗地方布教部委員長を務めた。大

正九年四月二十五日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』『廣嚴寺過去帳』)

にしかどーいつし 西門一之

明治二十年(一八八七)ー昭和三十八年

(二九六三)

姫路市圓通寺十八世、姫路市善福寺二十一世。号は格外。明治二十年一月五日、兵庫県加西郡北条町に生まれる。本師は甲山素学。曹洞宗第三中学林を卒業し、大正二年(一九一三)に曹洞宗大学本科を卒業する。五年に善福寺住職、十五年五月に圓通寺住職となる。昭和二年(一九二七)三月に圓通禅林の准師家、二十一年に宗議會特選議員、二十六年に景福寺専門僧堂准師家、宗務所長を務める。宗外では、兵庫県神崎郡各宗協合理事、同各宗宗教会長、円通寺婦人会総裁、社会教育委員、児童福祉委員、私立神崎学院院長、円通寺託児所長を務める。昭和二年に圓通寺の常恒会昇格、私立神崎学院建築、三年に圓通寺禅林設置など教育事業の功績によって管長より表彰状と安陀衣を受ける。また、接賓新築、諸堂大

修繕を行った他、大正十五年七月に山門より県道へ至る直通道路の新設、昭和二十五年に大梵鐘を鑄造する。昭和三十八年七月一日に七十八歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』)

にしかわーえつがん 西川悦巖

明治三十三年(一九〇〇)ー昭和四十四年(一九六九)

年(一九六九)

福島県石川郡長泉寺三十七世、福島県石川郡長慶寺十九世、二十二世、福島県石川郡長徳寺二十一世。号は大廣。明治三十三年九月十五日、福島県石川郡石川町北町繁松院に西川魁巖の長男として生まれる。受業師は大沢源良、本師は西川魁巖。明治四十年(一九〇七)に小学校尋常科に入学、大正二年(一九一三)四月に私立石川中学校に入学したが、途中曹洞宗第二中学校(梅檀中学校)に転校し、八年三月に卒業した。十三年に東洋大学学部印度哲学倫理学科を卒業した。昭和二十八年に曹洞宗議會議員、三十年に東洋大学常務理事および理事長、三十二年に曹洞宗宗務庁財務部

長、東北福祉大学理事及び学監を務めた。宗外では、大正十三年四月から昭和十六年まで私立石川中学教諭、昭和十四年から二十一年まで司法保護委員を務めた。昭和十四年九月十五日に六十九歳で示寂した。(『洞門龍象要覧』『東洋大学八十年史』『だんだんー石川の人物(九)ー』)

にしかわーかくりん 西川珪麟

嘉永三年(一八五〇)ー大正四年(一九一五)

一五)

山形県西村山郡永昌寺十三世、山形県西村山郡慈眼寺二十一世、寒河江市長泉寺。号は麒麟。嘉永三年二月四日、出羽国村山郡西里村に西川佐之助の三男として生まれる。受業師、本師は石垣珪全。明治十一年(一八七八)十月二十三日に慈眼寺住職となり、二十七年一月十三日に山形県第壹号曹洞宗務支局特選議員、八月二十一日に永昌寺住職に任ぜられ、慈眼寺は兼務となる。三十五年に宮城県第八岩手県第三第四各曹洞宗務支局巡回布教師、三十七年六月三日に山形県第三曹洞宗務支局管内巡回布

教師を務め、四十四年四月二十七日に長泉寺兼務住職となる。大正三年（一九二四）四月一日に山形県第三曹洞宗務所管内布教部委員長を務める。大正四年十二月二十一日に六十六歳で示寂した。（「永昌寺過去帳」「現代仏教家人名辞典」）

にしかわーげんりょう 西川玄梁

明治二十年（一八八七）ー昭和四十年

（二九六五）

名古屋市宋吉寺十三世。号は大淵。明治二十年六月二十六日、名古屋市南区稲永新田に生まれる。本師は野田道環。安齋院、最勝院認可僧堂に安居する。永平寺後堂を務めた。昭和四十年五月三十一日に示寂した。（『洞門龍象要覧』『傘松』第二九四号）

にしかわーしょうざん 西川象山

ー明治四十四年（一九一一）

金沢市龍源寺十九世、新城市永住寺二十五世、新城市張原寺十二世。号は象山、諱は良威。明治十六年（一八八三）四月二十日に龍源寺より永住寺に転住した。二十年に

明治維新の廃仏毀釈により廃寺となった永住寺末寺の群馬県利根郡増円寺末寺のうち、山形県寒河江庄の高福寺、南泉寺、龍洞寺、高音寺、二十四年に山形県上山の蓬萊院、延命寺、龍谷寺、久昌寺を永住寺の直末として帰入した。愛知県第二号曹洞宗宗務支局取締役を務めた。明治四十四年十月十八日に示寂した。（『洞上高僧月旦』『延命山永住寺史』）

にしかわーてつじょう 西川徹丈

ー昭和二年（一九二七）

南魚沼市永昌庵二十六世、南魚沼市楞嚴寺。号は千巖。新潟県小千谷市に生まれる。曹洞宗地方布教委員長を務めた。昭和二年六月十日に示寂した。（「永昌寺過去帳」「現代仏教家人名辞典」）

にしざわーおういつ 西澤應一

大正十一年（一九二二）ー平成八年（一九九六）

東京都祥雲寺三十一世、熱海市東明寺九世、平塚市宗真寺三十一世。号は換三。大

正十一年三月二十一日、東京都池袋に生まれる。受業師、本師は西澤頼應。昭和二十四年（一九四九）三月に東北大学法学部を卒業。曹洞宗審事院副院長を務め、宗外では保護司を務めている。平成八年二月十九日に示寂した。

にしざわーこうせん 西澤浩仙

明治二十年（一八八七）ー昭和三十五年

（二九六〇）

横浜市内西有寺四世、東京都宗参寺。号は黙室。明治二十年二月十日、埼玉県北足立郡田間宮村に生まれる。本師は兄玉安山。宗会議員特選、公選議員（三回）、宗務院財務部長、庶務部長、宗会議長、参議、第五専門僧堂師家を歴任した。昭和二十七年（一九五二）に大本山永平寺高祖大師七百回大遠忌勸募部長を務めて以来永平寺顧問となり、三十二年（一九五七）から三十四年まで宗務総長を務めた。三十三年には第五回世界仏教徒会議バンコク大会に日本仏教徒代表団団長として出席した。三十四年春に永平寺報恩授戒会で教授師を務めた。

宗外では、牛込区会議員、東京府会議員、財団法人牛込高等女学校理事長、財団法人青葉学園理事、財団法人駒澤学園理事を歴任した。昭和三十五年二月十九日に世寿七十四歳で示寂した。〔曹洞宗現勢要覧〕

〔傘松〕第二六八号）

にしざわーたいどう 西澤太堂

ー明治九年（一八七六）

埼玉県入間郡龍穩寺五十八世、南足柄市最乗寺四百十二世、東京都泉岳寺三十八世。号は祖山。北海道に生まれる。本師は智道太伝。明治七年（一八七四）に最乗寺輪住を廃し独住となる。最後の輪住（四百十二世）として畔上棟仙に引き渡した。明治九年十月十三日に示寂した。（龍穩寺世代帳）

にしざわーてんかい 西澤天海

ー昭和二十年（一九四五）

広島市国泰寺二十七世、廿日市市洞雲寺三十一世。号は雲巖。三原市の中島家に生まれる。受業師、本師は西澤佛海。明治二十

六年（一九〇三）に東京哲学館を卒業する。呉市神應院監寺、宗議会特選議員を務めた。昭和二十年八月六日に示寂した。（宗教時報）第一三二号）

にしざわーぶつかい 西澤佛海

弘化二年（一八四五）ー昭和二十年（一九四五）

九四五）

広島市国泰寺二十六世、廿日市市洞雲寺三十世。号は魯道。弘化二年十月五日、安芸国豊田郡長谷村に父井迫要助、母里の三男として生まれる。受業師は田坂不染、本師は鷲見獨秀。嘉永三年（一八五〇）八月に田浦村雙照院田坂不染の弟子となり、安政四年（一八五七）七月二十七日に得度する。備中玉島円通寺、名古屋市大光院、永平寺等を歴参。金沢市天徳院奕堂に参随した。明治元年（一八六八）に東京駒込吉祥寺檀林に入り、五年七月に埼玉県入間郡龍穩寺西澤太堂の籍に入り姓を継ぐ。六年に林下審司の推薦を受け小田原最乗寺に役詰めし、七年冬に東京芝青松寺北野元峰常恒会で立職、八年九月十八日に国泰寺の鷲見

獨秀に嗣法、十一月に總持寺で転衣した。

九年、洞雲寺に首先住職し、二十六年に国泰寺に転住した。明治十年三月に広島県中教院付属支校教師、二十六年以来公選により広島県第一号教導取締を務め、日清・日露戦争の時に本宗を代表して軍隊の慰問、戦死者追悼会等に当たる。三十七年三月に両本山貫首の命を受けて呉鎮守府を慰問した。寺院経営にも心を注ぎ、伽藍の修繕増築を行い両本山貫首を拝請、授戒会を修行し、禅学会や婦人会を起こした。大正二年（一九一三）には、赤穂義士の大石良雄（内蔵助）の室石束氏の墓が国泰寺にあったことから、二千数百円の資金を募集して境内に赤穂義士追遠塔を建設し、十月に浅野侯爵臨席のもと除幕式を挙行した。三十一年に認可僧堂を開単し、四十三年に幼稚園を市内に開設した。昭和二十年八月六日に示寂している。（曹洞宗名鑑）

にしざわーりょうぶん 西澤了聞

嘉永三年（一八五〇）ー大正四年（一九一五）

新発田市禅定寺二十三世、長野市如法寺三十一世。号は道戒。嘉永三年二月一日、越後國中蒲原郡横越村に父高野金次郎、母濱子の二男として生まれる。受業師は模岩、本師は溝口大善。文久二年（一八六二）六月に模岩について得度。慶応二年（一八六六）冬に横越村大榮寺片法幢会に首先安居し、明治三年四月から如法寺小山愚海に随侍した。七年冬に大榮寺溝口大善の片法幢会で立職し、八年六月二十三日に大善の室に入り伝法した。十年四月から越後西蒲原郡茨曾根村永安寺の加藤法昌に参禅し印可を受ける。十一年永平寺に転衣する。十五年五月から曹洞宗大学林に入り、十八年三月に全科卒業、十九年三月に北蒲原郡禅定寺に首先住職する。二十年九月に新潟県専門支校学監に任命され、二十一年五月に長岡監獄教誨師となる。二十四年夏初会結制を修行する。三十一年五月に如法寺に転住し大正四年十月一日に示寂した。（『曹洞宗名鑑』）

にしだーげんてい 西田玄挺

天保五年（一八三四）ー明治四十二年

（二九〇九）

北海道島牧郡千走寺五世中興。号は獨立。

天保五年六月四日、摂津国西成郡上福島村に父西田安兵衛の二男として生まれる。受

業師、本師は西田眞牛。嘉永四年（一八五

一）正月に山城国綴喜郡八幡別峰村講田寺の眞牛に就いて剃髪得度し、八月に伯耆国

八橋郡退休寺の俊亮に随伴し安居した。上野国前橋の龍海院の奕堂に随侍し、安政二

年（一八五五）江戸芝青松寺の観樹寮に掛籍し、四年に同寺首座職を務めた。五年に

四谷南寺町勝興寺の實山の室に入り伝法する。文久元年（一八六一）四月に北海道に

渡り、慶応三年（一八六七）に總持寺で転衣、上京して十月二十二日に綸旨を拝戴し

た。明治八年（一八七五）に千走庵を再建、十年十月に法地に列し千走寺と公称、

開山に渡島国松前郡福山法幢寺の松永大孝を請し、自らは二世となり、法幢寺の末寺

とした。二十七年に北海道島牧郡に永豊庵を建てる。明治四十二年八月二日に七十八

歳で示寂した。「千走寺過去帳」（『開法日東宗教家實伝』巻下）

にしだーこかい 西田湖海

ー明治十五年（一八八二）

宮津市盛林寺十六世。号は洞龍。明治十五年十月上旬に曹洞宗大学林に入校するが、

病氣により十一月二十九日に示寂した。辻顯高が秉炬師を勤め、学監や在校生二百余名の諷経による津葬式であった。（盛林寺

過去帳）「明教新誌」第一四二八号）

にしだーだいしゅう 西田大宗

明治三十三年（一九〇〇）ー平成四年

（二九九二）

田辺市不動寺六世。明治三十三年八月一日、大阪府泉南郡岬町多奈川に生まれる。

本師は補陀苗宗。管内布教師を務めた。宗外では、和歌山県西牟婁郡牟呂町長野教育

副委員長、小・中学校PTA会長、公民館長、郡公民館委員を務めた。農繁期に自坊

で託児所を開設、第二次世界大戦中および直後に麦作推進等の講演を行った。また、

信徒らと劇団をつくり、各地で宗教劇を上演するなどした。平成四年十一月十八日に九十二歳で示寂している。〔『洞門龍象要覧』〕

にしたにーとうりん 西谷洞林

明治十三年（一八八〇）ー昭和二十一年（一九四六）

沓岐市天徳寺十九世。号は亮高。明治十三年一月一日、長崎県沓岐郡蘆辺浦村に横山作太郎の三男として生まれる。三歳で天徳寺の西谷文亮の養子となり、六歳で沙弥となる。大沢伊尹に随従した後、總持寺および永平寺に登った。大野市寶慶寺の笠松戒鱗に安居を許され、永平寺にも安居した。

二十九年九月に熊本市聯合中学校林に入り、三十年冬諫早市天祐寺の松山大定の会で立職、三十三年八月に同寺認可僧堂に掛錫する。三十四年九月に曹洞宗大学林に入り、三十七年二月、日露戦争に際して出征し、その最中の十二月に天徳寺住職の任を受ける。三十九年三月に凱旋帰還して以来寺門経営、布教、また伽藍再興する等を行っ

た。昭和二十一年十一月十四日に六十八歳で示寂した。〔『曹洞宗名鑑』〕

にしの一こうほう 西野宏峯

明治二年（一八六九）ー昭和二十四年（一九四九）

宇治市興聖寺三十六世、京丹後市福聚院十一世、門真市安養寺二十世、八幡市講田寺十三世、堺市紅谷庵五世、宇治市東禪院二世、木津川市寶珠寺二世、大仙市高泉寺二世。号は雪巖。明治二年十一月二日、広島県福山町に大出新六の二男として生まれる。西野石梁の養嗣子となり改姓する。受業師は吉津宏巖、本師は西野石梁。渡辺実雄等に参随する。明治十五年（一八八二）

三月に得度、夏に尾道の天寧寺高橋黙仙の常恒会に入衆、二十一年冬に島根県西伯郡退休寺西野石梁の常恒会にて立職、二十二年三月に伝法した。三十年に曹洞宗大学林に入学し、三十五年七月に全林を卒業した。明治二十五年十一月三日に永平寺へ瑞世、三十年九月に安養寺に首先住職。三十三年二月に福聚院に転住し、初会結制修行

し、三十七年九月に講田寺に転住、四十二年八月に紅谷庵に転住した。三十八年十二月に准師家を認可され宇治興聖寺勤務、四十四年四月に大阪府第三曹洞宗務所管内布教部委員長、十一月大阪府第三曹洞宗務所長、八月師団付軍隊布教師に任じられる。

また、和歌山市の禅学会、紅谷庵の雲衲の接化なども行った。昭和二十四年十月十六日に八十一歳で示寂した。〔『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗名鑑』〔寺縁雑記〕〔講田開祖法系攷〕〔傘松〕第十二号〕

にしの一せきりょう 西野石梁

弘化三年（一八四六）ー大正七年（一九一六）

宇治市興聖寺三十五世、長久手市前熊寺十四世、木津川市寶珠寺開山、宇治市東禪院開山、鳥取県西伯郡退休寺十八世、池田市陽松庵二十七世、神戸市向榮寺開山、大仙市高泉寺開山、東海市神昌寺開山。号は棟嶽。弘化三年八月十五日、肥前国北高東郡深海村に父西野小藤治、母寅子の長男として生まれる。受業師は義恭、本師は久我環

溪。天祐寺の禹門、高伝寺の月庵、法持寺の鼎三等に参随した。十歳で義恭により得度した。慶応三年（一八六七）に武蔵国豪徳寺環溪に参じ、明治三年（一八七〇）夏に和泉国紅谷庵不二門眉柏の初会で立職し、八月に興聖寺久我環溪に伝法、冬に永平寺に瑞世した。七年十月に前熊寺にて首先住職、冬に初建法幢、十四年秋に陽松庵に転住、十九年秋に退休寺の独住十八世となる。二十五年九月二十五日に興聖寺に晋山開堂した。永平寺後堂を務め、兼務諸寺院結制の西堂九十三回、後堂四回、授戒会の戒師百二十三回、教授師十五回、引請師五回を務めた。大正七年八月十二日に七十二歳で示寂した。『興聖寺誌』『興聖石梁禪師語録』『宇治興聖寺文書』四『東禪寺と現住藤岡恵泉師』『宗教時報』第七号『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『石梁老僧御行跡記録』

にしはらーたいみょう 西原泰苗

明治二十四年（一八九二）―昭和六十二年（一九八七）

三重県多気郡普門寺二十世。明治二十四年五月十七日、三重県多気郡下御糸村大字北柴原普門寺に月鷄良関の子として生まれる。本師は島岡淳芳。大正四年（一九一五）三月末に永平寺に上山、その後十二年まで長崎市皓台寺に安居する。十三年に普門寺住職になり、昭和五十三年（一九七八）に弟子の江徳昌に住職を譲るまで務めた。昭和九年に三重県第二宗務所第五教区長、その他、後醍醐天皇御遠忌香資勸募督励部長を務めた。宗外では、大正四年まで小学校教員を務めたのち、昭和九年（一九三四）から十年間六月と十一月の農繁期に託児所を開設する。また、免囚保護委員、司法保護委員を務めた。十八年に託児所に對して皇后より内助金を下附され、二十二年に県仏教会より社会事業功労者として、三十三年には津保護視察所長より表彰される。四十四年には全国保護司連盟会長の感謝状を受ける。五十一年に勤続五十三年に及ぶ保護司を辞した。昭和六十二年七月八日に九十七歳で示寂した。（普門寺歴住世代帳」「普門寺過去帳」「曹洞宗現勢要覧」）

にしきーしんじ 西牧信治

明治十一年（一八七八）―昭和四十年（一九六五）

甲府市光福寺二十世、甲州市正継寺、甲府市清泉寺十三世。号は明鑑。明治十一年四月十五日に生まれる。受業師は西牧令参、本師は須田月岡。明治二十四年（一八九一）四月十五日に得度し、同年夏に山梨県東山梨郡平等村永昌院住職橋田寔海の常恒会地に首先安居し、二十九年八月五日まで随侍し行脚証明状を得る。三十年冬に山梨県西八代郡清澤寺住職渡辺湛道の初会で立職、三十五年四月八日に嗣法、同年八月七日に總持寺で転衣する。三十八年五月八日に正継寺へ首先住職、三十九年八月一日から四十四年四月三十日まで山梨県西八代郡久那土村郡慈観寺曹洞宗公認僧堂で学び、四十四年五月一日から大正三年（一九一四）四月三十日まで安居し証明状を得る。この間、四十二年七月十五日同僧堂高等科第一学年、四十四年七月十五日高等科を卒業する。四十四年八月十八日に清泉寺へ転住する。大正六年（一九一七）四月から勸

説寄進を得て、清泉寺本堂屋上を改築する。十五年十一月十七日に甲府市光福寺に転住する。昭和二年（一九二七）十月十五日に初会修行する。十二年から翌年にかけて庫裡を新築。宗外では、上石田町社会委員、山梨県方面委員、上石田町担当を嘱託される。四十年三月十日に示寂した。（『曹洞宗現勢要覧』『西牧信治履歴書』）

にしむらーしょううん 西村祥雲

天保二年（一八三一）―大正六年（一九

一七）

雲南市妙榮寺十四世。号は祥雲、諱は仙嶺。天保二年三月十八日、出雲国仁多郡湯村に生まれる。受業師、本師は飯石郡吉田村の長寿寺の仙洲。嘉永元年（一八四八）七月から東京高輪泉岳寺の哲輪に従って学び、安政元年（一八五四）哲輪の常恒会にて立職、三年に仙洲について嗣法した。大正六年二月十三日に示寂した。（『妙榮寺過去帳』『西村祥雲履歴書』）

にしむらーだいかん 西村大串

明治十六年（一八八三）―昭和三十五年（一九六〇）

加茂市大昌寺二十五世。号は大串、諱は無箭。明治十六年二月五日、新潟県南蒲原郡加茂町の有本長次郎の三男に生まれ久蔵と称した。受業師は石附全鼎、本師は西村堂明。明治二十九年（一八九六）六月に群馬県伊香保町天宗寺の石附全鼎に就いて得度し、三十三年冬に同県雙林寺間島祖禪の常恒会に入衆する。三十五年冬に新潟県村上の耕雲寺児玉玄海の常恒会で立身、三十六年三月に西村堂明に嗣法する。また、新潟県中學校、東京の京北中學校、第四高等學校を経て、東京帝国大学文科に入学し英文科を専攻、四十四年に卒業する。宗務所長、宗会議員二期、曹洞宗大学、京北中學校、成蹊実務學校の講師を務めた。宗外では、大正九年（一九二〇）加茂朝學校創立、昭和十二年（一九三七）甲種中學校に昇格、二十三年高等學校に昇格、加茂暁星高等學校と改称し、理事長兼校長に就任した。また、大正十年に私立加茂葵幼稚園を創立、

昭和三年に認可を得て園長となる。二年大昌寺禪林を設置、二十六年に僧堂を開單し、師家を務める。九年教育功勞者として帝國教育會長より表彰される。著書に『青年教養講座』、『日本精神』、『冥想録』がある。昭和三十五年十月七日に示寂した。（『宗報』第三一三号『曹洞宗名鑑』『曹洞宗現勢要覧』『冥想録』『暁鐘 加茂暁星學園六十年史』）

にしむらーとうぜん 西村登禪

―明治三十四年（一九〇一）

南丹市智恵寺十六世。号は義山。京都府田郡三和町に西村八郎衛門の二男として生まれる。本師は古春温山。明治三十四年七月十一日に示寂した。（『智恵寺歷住世代帳』）

にしやまーげんりゅう 西山彦隆

明治七年（一八七四）―昭和二十年（一九四五）

土岐市莊嚴寺十四世、横浜市陽光院十四世、横浜市西山寺開山。号は葦舟。明治七

年六月二十五日、愛知県名古屋区に父伊藤竹蔵、母しょうの子として生まれる。受業師、本師は莊嚴寺十三世の輕部彦勇。明治十四年（一八八一）から十八年まで名古屋の菅原小学校に学び、二十年から二十二年まで莊嚴寺住職輕部彦勇に学ぶ。二十二年から二十四年まで名古屋市の浅田塾に入學して漢籍を学ぶ。三十年曹洞宗大学校に入校、三十五年七月八日に卒業し、教導講習院に入り、三十六年に卒業する。この間、名古屋市瑞泉寺、同市永安寺に転錫し、三重県鳥羽湊常安寺に掛錫の時に折居光輪の堤擲を受けた。二十七年に山口県普濟寺にて野坂黙禪に随侍し悟道した。普濟寺で立職し、二十九年十二月に帰国して輕部彦勇に嗣法、三十六年に師跡を継ぎ莊嚴寺に住山する。また、永平寺に就いて瑞世し、三十六年十二月に曹洞宗両本山布教師となる。四十年から四十一年の両春に両本山巡廻布教師を拝命、その後、千葉監獄の教誨師を六年務める。大正二年（一九一三）五月に軍人布教師となり、函館に駐在した。昭和二十年十一月十日に七十二歳で示寂し

た。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』）

にしやまーほううん 西山法運

明治二十九年（一八九六）―昭和六十一年（一九八六）

米沢市林泉寺五十四世、米沢市海應院二十六世。号は愚徹。明治二十九年十月二十五日、山形県東置賜郡高島町亀岡入生田に父近野哲蔵、母里ようの二男として生まれ、後に西山法輪の養子となる。受業師、本師は西山法輪。大正六年（一九一七）三月十四日に山形県立米沢中学校卒業、同年十月九日から昭和元年（一九二六）十一月五日まで永平寺僧堂に安居するが、大正十三年から三年間は京都紫竹林学堂で岸沢惟安に随身する。大正七年冬に米沢市常安寺の漆山全景初会で立職、八年一月八日に西山法輪の室に入って嗣法し、十二月五日に転衣する。九年三月二十七日に永平寺に瑞世し、十二年一月三十日から昭和二十年一月二十日まで海應院の住職を務める。昭和十五年四月十四日に總持寺に瑞世し、十六年三月二十六日から六十一年八月二十二日ま

で林泉寺住職を務める。十七年から三十六年まで管内布教師、二十一年に林泉寺に参禅道場を開設し、参禅道場師家を務めた。

山形県第二宗務所第九区長、財団法人米沢仏教興道会監事および理事等多数の役職を歴任する。また宗外では、昭和七年一月から五年三月まで私立普慈幼稚園の園長を務めるなど、幼児教育に尽力した。四十八年十一月三日に社会教育に貢献した事により叙勲五等瑞宝章を授与され、曹洞宗管長表彰、五十一年には幼稚園教育に貢献につき文部大臣表彰を受けるなど多数表彰される。また、林泉寺、海應院の伽藍等の改修、建立なども行い、昭和六十一年八月二十二日に九十一歳で示寂した。（『曹洞宗現勢要覧』『傘松』第五一七号、「（西山法運）本葬しおり」）

にしやまーほうしゅん 西山法俊

明治三年（一八七〇）―大正十五年（一九二六）

東京都善徳寺十八世、東京都碩運寺二十六世、山武市元倡寺三十二世。号は英山。明

治三年十二月十八日、東京日本橋区横山町三丁目に生まれる。受業師、本師は福田有法。明治十八年（一八八五）から可睡齋の西有穆山に数年間侍した。その後、曹洞宗専門支校、中学林を卒業し、大八洲学校国語伝習所などで学び、東洋大学を卒業した。また、三十一年中等教員検定試験に合格し、静岡県浜名郡有玉村に中学予備校を設立する。その後、福田有法の室に入り伝法し、三十四年一月に總持寺で転衣した。

元倡寺に首先住職し、四十五年善徳寺住職となり、東京の各布教界において教化活動に尽力した。大正十五年七月二十七日に五十七歳で示寂した。『善徳寺史』『曹洞宗名鑑』

につたーかくじょう 新田覺成

弘化元年（一八四四）ー昭和七年（一九

三二）

足利市瑞泉院二十八世。号は開（戒）関。弘化元年十二月十五日、伊勢国員弁郡古田村に三和権右衛門の二男として生まれる。後に新田と改姓した。受業師、本師は高島

市の覚伝寺二十六世定巖慧明。後に広覚泰林にも参随している。昭和七年一月二十八日に八十八歳で示寂した。

にとうーこかん 仁藤巨寛

ー大正二年（一九一三）

山形県西村山郡長谷寺十九世。号は魯肩。妻は高橋泥舟妹の米。總持貫首崩崖奕堂の座下で永平貫首の森田悟由と共に学んだ恩義により、明治三十一年（一八九八）五月十九日から二十一日まで長谷寺で因縁戒会を執行了。また、二十四年七月には在田如山、小智智眼とともに曹洞宗同盟会の末派二千三百九十一ヶ寺總代委員を務め、曹洞宗務局へ辞職勧告書を提出している。大正二年三月十日に示寂した。『活波瀾』第六号「明教新誌」第四一二六号）

にながわーずいこう 蜷川瑞光

天保十二年（一八四一）ー大正三年（一

九一四）

富山市西光寺二世、富山市宗円寺、富山市最勝寺三十三世。号は布金、大魔庵、仙獄

堂、寂安。天保十二年十二月一日、越中国新川郡野口新村に宮尾宗右衛門の二男として生まれる。受業師は佛山知眼、本師は蜷川道應。嘉永五年（一八五二）に知眼に就いて得度し、万延元年（一八五〇）から明治十七年（一八八四）まで總持寺に安居する。また、万延元年（一八六〇）から明治三年まで金沢天徳院の奕堂に随侍し、四年から十年まで高岡瑞龍寺の規矩惟孝に就いて修学、十四年から十六年まで富山専門学校に学び卒業する。その後、道應の室に入って嗣法し、十九年に宗円寺を再興、三十年には西光寺特選住職となる。十八年から二十六年まで宗内僧風視察を務めたほか、宗務支局庶務、専門支校学監、尼衆学林創立委員及び総監、扶桑会社長、曹洞宗私立中学林創立委員、總持寺の副寺職を歴任する。西光寺では金毘羅堂、庫院を建立し、大梵鐘の鑄造、四十四年に鐘楼堂を建築する。大正三年十月二十三日に七十三歳で示寂した。『西光寺徒弟名簿一覽』『現代仏教家人名辞典』

にのとりょううん ニノ戸亮雲

一昭和五年（一九三〇）

山形市安養寺三十三世、山形市大昌院十七世。号は慈岳。山形市蔵王成沢に二ノ戸喜右衛門の二男として生まれる。山形県第一曹洞宗務所長、地方布教部委員長を務めた。昭和五年八月七日に示寂した。〔現代仏教家人名辞典〕

にぶーかくせん 仁生廓仙

明治九年（一八七六）一昭和十四年（一

九三九）

松山市法秀寺十七世、松山市大通寺三十三世。朝鮮元山法秀寺二世。号は無外。明治九年五月二十九日、愛媛県松山に父木原忠正、母歌子の二男として生まれる。受業師は仁生覚紋、本師は井上瑞峰。北野元峰に参随した。明治十九年（一八八六）七月に得度。二十三年から尾道天寧寺の笠山竺仙に随侍し、二十六年十一月に東京曹洞宗高等中学林に入り、三十三年に卒業する。同年十月に渡米し、サンフランシスコのトリニティハイスクールに入学、三十五年五月

に卒業、同年九月よりオハイオ州アゼンス

大学に在籍。続いてニューヨーク州コロ

ビア大学院に入学して哲学宗教学を専攻した。四十年来に欧州大陸を漫遊して四十一年

に帰朝する。四十三年三月に朝鮮布教師に

任命され、京城（現ソウル）に駐在、朝鮮

僧李晦光が経営する仏教師範学堂の教授を

嘱託される。四十五年三月には元山港に布

教所を開設して主任を務め、大正二年（一

九一三）四月、同地に法秀寺を開き、十四

年に聖徳太子堂を建立する。また、永興郡

（現咸鏡南道金野郡）の信者が永興郡庁よ

り払い下げられた旧庁舎を法秀寺に寄進し

たことから、境内裏山の山頂に純朝鮮様式

建造物の観音堂として移転再建し、大遊園

地として解放した。また、登山道には三十

三体の観音菩薩石像を勧請した。昭和二年

（一九二七）から宗会議員、十三年に特選

議員を務めた。昭和十四年十二月十七日に

六十四歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕『現

代仏教家人名辞典』『仁生廓仙和尚伝』

〔田舎寺和尚園長日記―或る寺の師資相承

五代教育（保育）から考える―〕『仁生廓

仙経歴』『宗教時報』第一二七号）

にわーえつどう 丹羽悦道

明治二十九年（一八九六）一昭和四十七

年（一九七二）

名古屋市含笑寺二十八世、秩父市四萬部寺

（妙音寺）二十一世。号は正山。明治二十

九年二月一日、神奈川県大磯に竹村知道の

子として生まれる。受業師は野々辺至遊、

本師は長田義孝。阿知波道全に参随する。

明治四十二年（一九〇九）八月五日に野々

辺至遊について得度し、大正四年（一九一

五）夏に阿知波道全について立身、九年六

月八日に秩父市の源蔵寺の長田義孝の室中

に入って嗣法する。同年六月十八日に転衣

本許状を受け、十月二十六日に四萬部寺

（当時は妙音寺）住職となる。十三年四月

に秩父仏教青年伝道部を結成、昭和五年

（一九三〇）三月に秩父札所霊場観音講講

長に任命される。十二年十月十三日に永平

寺に瑞世拝登し、冬には妙音寺初会結制修

行する。十七年十一月二日に埼玉県曹洞宗

宗務所管内布教師、十八年一月十日に永平

寺不老閣侍局勤務となり、十九年三月三日
に曹洞宗管長高階瓊仙の秘書に任命され尽
力した。二十五年に埼玉県管内布教委員、
二十六年に埼玉県第二曹洞宗事務所第十五
教区長等に任ぜられ、二十七年九月二十九
日に道元禪師七百回忌大遠忌にあたり表彰
される。二十八年一月十六日に含笑寺住職
となり、三十五年春に含笑寺本堂・庫院落
慶入仏供養法要を修行する。宗外では、埼
玉県司法保護委員、埼玉県保護司、方面民
生委員を務めた。四十五年十二月八日に住
職永年（五十年）勤続表彰を受ける。昭和
四十七年九月六日に七十七歳で示寂した。
〔含笑寺28世・妙音寺21世正山悦道大和尚
略経緯〕『洞門龍象要覧』

にわーけいどう 丹羽溪道

明治二十年（一八八七）ー昭和三十四年
（一九五九）

宮城県柴田郡龍島院三十二世、葦崎市東光
寺、小牧市村中玉林寺十五世。号は祖学。
明治二十年二月八日、愛知県東春日井郡村
中原新田村に生まれる。受業師、本師は玉

林寺十四世の村上明道。明治四十一年（一
九〇八）八月三十一日に曹洞宗第三中学林
を卒業。大正二年（一九一三）七月に曹洞
宗大学を卒業し、四年九月まで總持寺に安
居した。七年十二月十八日に龍島院住職と
なり、昭和八年（一九三三）四月二十五日
まで曹洞宗第三中学林副学監を務めた後、
同月に玉林寺に転住、十六年十二月まで両
寺を兼務する。また、昭和八年まで巡回両
本山布教師、工場布教師、警察署布教師、
宮城県管内布教師、教区長を務める。宗外
では、龍島院住職中に、在郷軍人会柴田郡
連合分会長、村田町分会長、司法保護会柴
田郡会長、方面委員、村田町社会教育委
員、剣道教師などを務めた。昭和三十四年
七月十一日に七十三歳で示寂した。

にわーちくどう 丹羽笠道

ー昭和十二年（一九三七）

太田市玉巖寺三十四世、足利市普門寺。号
は俤外。永田亀吉の子に生まれる。本庄市
安養院三十四世の丹羽懷道の弟子となって
受業し改姓する。曹洞宗大学林を卒業す

る。昭和十二年三月十五日に示寂した。

にわーぶつあん 丹羽佛庵

明治十三年（一八八〇）ー昭和三十年

（一九五五）

静岡市洞慶院独住五世、静岡市浄元寺十八
世、東京都慈眼寺二世。号は佛庵、老梅林
主、諱は慧明。明治十三年三月二十四日、
伊豆修善寺瓜生野に塩谷喜四郎の二男とし
て生まれる。受業師、本師は丹羽佛鑑。明
治二十六年（一八九三）四月八日に佛鑑に
就いて得度、二十七年から二十九年まで愛
知県渥美郡長興寺の麻苳舌溪に随侍し、三
十一年に佛鑑の夏安居で立身する。三十二
年二月に曹洞宗高等中学林に入学、続いて
高等学林に進学する。三十七年十一月から
満州へ兵卒として出征、三十九年二月に帰
国して大学林に復学し、同年に浄元寺の住
職となる。四十年に曹洞宗大学林を卒業す
る。四十一年に自坊で冬安居初会を行い、
四十三年四月二日に洞慶院へ転住した。布
教師としての活動を経て、大正五年（一九
一六）から昭和十年（一九三五）まで東京

都長谷寺永平寺出張所の役寮を務め、大正十一年から副監院を務める。また、両本山布教師を務め、昭和八から十年頃に洞慶院に専門僧堂を開単、十五年三月には師家第十禅林林長に任命される。十六年に静岡県曹洞宗宗務所長となる。二十年七月に永平寺監院に就任し、二十二年まで務め、永平寺の再建に尽力した。二十一年八月には長谷寺の住職となり、二十四年十月には長谷寺を永平寺別院に昇格させた。同時に洞慶院に再住している。昭和三十年十月七日に七十六歳で示寂した。（『現代仏教家人名辞典』『宗教時報』第一一八号『曹洞宗現勢要覧』『傘松』第二四六号、第五〇九号『禅学大辞典』『麻布長谷寺誌』『梅華開―わが半生―』『久住山洞慶院史』）

にわーぶつかん 丹羽佛鑑

文久二年（一八六二）―明治三十七年（一九〇四）

静岡市洞慶院独住三世、静岡市龍雲院二十世。号は明國。文久二年九月十九日、駿河国有渡郡曲金村に寺田家の長男として生ま

れる。受業師、本師は静岡市法蔵寺の増田瑞明。明治六年（一八七三）二月十五日得度。幼いころから学問に親しみ、十二歳の時に教導職十四級試補に任じられて浅間神社で説教をし、数え年十三歳の時に静岡県有渡郡豊田村小学校の助教員に補せられる。九年五月に洞慶院住職の古知知常の下に入る。十二年に修学中ながら静岡市の瑞光寺の柴田普門の常恒会で立職、その後曹洞宗専門支校を卒業する。同年に瑞明の室に入り伝法嗣法し、大学へ入学する。十八年に大学を卒業し、永平寺で転衣出世の法式、安居を終えた。十九年春に法蔵寺の瑞明の許に戻り、二十年五月に龍雲院住職となり、二十九年春に洞慶院独住三世となる。また、静岡県周辺の寺院が行う勉強会の講師として仏教祖録の提唱を行い、仏門繁栄のため心身を賭して教化に尽力した。

明治二十一年に伊豆田方郡蔵春院の結制教授師を務めるとともに、永平寺の禅師の侍者を務めるなどした。洞慶院の堂舎の修理、境内に六百株余りの梅の苗木を植えるなどしている。明治三十七年二月二十七日

に四十三歳で示寂した。（大内青巒「丹羽佛鑑和尚行状」『久住山洞慶院史』）

にわーれんぼう 丹羽廉芳

明治三十八年（一九〇五）―平成五年（一九九三）

永平寺七十七世、静岡市一乗寺、静岡市龍雲院、静岡市洞慶院、伊豆市修禅寺。号は瑞岳。明治三十八年二月二十三日、静岡県君沢郡瓜生野村の父塩谷加藤太、母むらの三男に生まれる。受業師、本師は丹羽佛庵。大正十三年（一九二四）三月に静岡県立韮山中学校を卒業し、夏に洞慶院の丹羽佛庵常恒会で立身し、十五年九月二十八日に佛庵に嗣法した。昭和五年（一九三〇）三月に東京帝国大学印度哲学科を卒業し、翌六年四月より京都紫竹林学舎に掛搭し、曹洞宗内地留学生として大谷大学で天台学を学ぶ。八年十月に永平寺本山僧堂を修了する。九年三月に一乗寺にて首先住職となり、十一年四月に洞慶院専門僧堂講師となる。二十四年十月に龍雲院へ転住、二十七年三月に曹洞宗審事院審事、二十八年六月

に曹洞宗特派布教師となった。三十年十一月に洞慶院に転住、また、三十五年六月に永平寺東京別院監院に就任し、三十六年にカンボジアでの第六回世界仏教徒会議に日本代表として出席した。四十年八月には曹洞宗梅花講正伝師範となり、四十二年に永平寺東京別院長谷寺が専門僧堂に認可されるにあたり、師家に就任する。五十一年六月に永平寺副貫首、五十九年二月に修禪寺に転住する。六十年一月には永平寺七十七代貫首に就任し、四月十二日に慈光圓海禪師の禪師号宣下を受けた。宗外では、静岡県教育委員会委員を務めた。スリランカより名誉仏教博士号を授与される。著書に『梅華開一わが半生』『みんな如来様だよ』など、「傘松」に「道元禪師と二祖国師」「正法眼蔵提唱」「道元禪師と学道用心集」「道元禪師と典座教訓」などを寄稿した。平成五年九月七日に八十八歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』『宗報』第六九七号「傘松」第六〇一号『曹洞宗宗勢のあゆみ』『近代曹洞宗法語精選』乾)

にわのーげんれい 庭野玄靈

明治四十四年(一九一〇)ー平成元年

(一九八九)

北海道網走郡瑞法寺二世。号は模哲。明治四十四年十一月五日、新潟県南魚沼郡浦佐に父羽賀佐平次、母テイの三男として生まれる。受業師は内藤玄教、本師は庭野瑞芳。大正九年(一九二〇)八月一日に新潟県南魚沼郡正眼寺の内藤玄教の徒弟となり、十三年に得度する。昭和二年(一九二七)四月一日に新潟県立六日町中学校に入學、三年九月に玄教の遷化により庭野瑞芳に転師し、四年三月二十五日に瑞法寺に入る。四月一日に北海道庁立網走中学校に転校し、七年三月五日に卒業した。八年三月十二日に永平寺に上山安居し、十一年三月に永平寺僧堂専門部三年を修了、同年七月瑞法寺開山の晋山結制法要で立職。十月二十日に嗣法した。十二年六月十四日に瑞法寺住職となる。開山石塔、本堂前石門柱を建立し、本堂基礎改造・修理、位牌堂の建立などに尽力した。十八年七月には応召して中国戦線に出征、二十一年五月二十九日

に招集解除となる。この間、昭和十九年三月二十三日付で北海道登呂郡大照寺兼務住職に任命される。二十二年六月十日、十一日に晋山開堂した。二十八年四月一日に管内布教師となり、二十九年に總持寺に焼香師として上山。四十四年十二月二十二日に北海道第三曹洞宗宗教教化主事となり、永平寺に焼香師として上山する。四十六年八月三十日に管内布教師となり、五十年七月二十三日に總持寺布教師を委嘱される。他に大祖堂再建祠堂貴教区勸募長、瑩山禪師大遠忌布教師、太祖瑩山禪師六百五十回大遠忌宗務所管内参拝委員を務めた。平成元年十一月二十四日に示寂した。(『御跡慕いてー瑞法寺八十年の足跡ー』)

ひ

ひおきーごほう 日置五峰

明治二十六年（一八九三）―昭和四十七年（一九七二）

仙台市龍雲院、仙台市輪王寺四十二世。号は天外。明治二十六年十月十三日、鳥取県久米郡に福定無外の姉ムラの二男として生まれる。俗名を寅吉という。本師は福定無外。北海道の曹洞宗武利意布教所の開設に尽力、紋別郡遠軽町に龍王寺を開創した。昭和十八年（一九四三）七月に輪王寺住職となり、二十一年には、曹洞宗参禅道場を設置する。二十五年に専門僧堂の認可があり数年間、専門僧堂として雲衲を育成した。三十二年、京都裏千家家元、仙台地方茶道諸流の賛助で、茶室半杓庵を建設、三十六年には、位牌堂を建設し、秋には、鐘桜吼月楼の梵鐘を完成させた。四十年、戦後の農地解放で失った土地を買い戻して、境内の整備を進め、四十四年には坐禅堂を新しく建設し、七堂伽藍を完備させた。昭

和四十七年十二月六日に八十歳で示寂した。『金剛山輪王寺五百五拾年史』『洞門龍象要覧』

ひおきーどうじゅん 日置道順

明治二十八年（一八九五）―昭和五十六年（一九八二）

丹波市円通寺四十四世。明治二十八年二月二十五日、鳥取県東伯郡下北条村島に生まれる。本師は福井適水。大正十年（一九二一）、曹洞宗大学を卒業。天徳寺第五禅林並附属天徳学院講師、准師家、第五禅林幹事、教区長、管内布教師などを務めたほか、昭和三十四年（一九五九）には兵庫県第二宗務所長となった。宗外では、兵庫県方面委員や司法保護委員会常務委員、社会教育委員を務めている。昭和五十六年三月三日、鳥取市中興寺にて八十七歳で示寂した。『洞門龍象要覧』

ひおきーもくせん 日置黙仙

弘化四年（一八四七）―大正九年（一九二〇）

永平寺六十六世。鳥取市中興寺十四世、丹波市円通寺四十世、袋井市可睡斎四十八世。号は維室。弘化四年正月二十三日、伯耆国久米郡下北条村に日置治左衛門の二男として生まれる。受業師、本師は笑巖默中、参随師は諸岳奕堂、獨遊橘仙。明治三年（一八七〇）十一月に中興寺へ初住し、七年十一月、円通寺へ転住する。二十五年秋には、西有穆山の招きに応じて可睡斎に昇住する。この間、十五年に兵庫県教導取締、二十二年に末派公選議員、二十九年には曹洞宗師家となった。三十三年、仏舍利奉迎のためにシャム（現タイ）に赴き、三十七年には、名古屋市中に各宗共立で仏舍利を安置する日暹寺（日泰寺）を創建した。大正二年（一九一三）に總持寺西堂となり、五年に永平寺六十六世として晋住する。大正九年九月二日に七十四歳で示寂した。著書に『従容録講話』『鉄笛倒吹講話』『日置黙仙禅師語録』『禅戒講話』などがある。『洞上高僧月旦』『日置黙仙禅師伝』『護法』第三十三巻第九号―明鑑道機禅師追悼号―『曹洞宗名鑑』『現代仏教家

人名辞典『曹洞宗現勢要覧』

ひがしおおじーつもん 東大路鐵門

明治六年（一八七三）ー昭和六年（一九

三二）

愛知県知多郡安楽寺五世。号は禪介。明治六年四月一日、名古屋熱田市場町に生まれる。受業師、本師は安楽寺四世山本石門。

明治三十二年（一八九九）に曹洞宗大学を卒業。永平寺、總持寺に安居する。愛知県第七宗務所布教部委員長および所長、愛知県第一宗務所布教部長および布教委員長・

副所長を務める。昭和六年一月三日に五十九歳で示寂した。（『安楽寺誌』『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗名鑑』）

ひがしだーだいどう 東田大重

明治三十年（一八九七）ー昭和三十一年

（一九五六）

糸島市大法寺二十四世。号は仏国。明治三十年一月一日、福岡県糟屋郡に生まれる。受業師、本師は大拙隆重。大豊隆全に参随した。山口県多々良中学校を卒業後、駒澤

大学、東北帝国大学法学部印哲科を卒業した。昭和十五年（一九四〇）頃に大陸に渡

り、京城市（現ソウル）曹溪寺に住み、幼稚園を経営するとともに恵化専門学校の講師を務める。十八年頃に内地に引き揚げ、

戦後には曹洞宗審事院監事、布教師を務めた。昭和三十一年二月二十六日に五十九歳で示寂した。

ひがしのーぎよくせん 東野玉尖

文久三年（一八六三）ー昭和十年（一九

三五）

名古屋市護国院十一世、福井県吉田郡天龍寺十九世、越前市願成寺、越前市金剛寺。号は大溪。文久三年九月一日、越前国南条郡に生まれる。受業師、本師は東野玉龍。俗姓を初め長谷川といったが、後に東野玉龍の養子となり東野姓を継いだ。永平寺副監院を十二年間務め、名古屋市護国院に住職した。また、天龍寺の境内地に松岡幼稚園を建設した。昭和十年十月二十七日に七十三歳で示寂した。（『天龍寺過去帳』『傘松』第四二九号『大本山永平寺名古屋別院奉安殿護国院

史』）

ひがしのーきんえい 東野金瑛

明治三十二年（一八九九）ー昭和五十九

年（一九八四）

山梨県南巨摩郡南明寺、甲府市光福寺。明治三十二年六月、福井県武生市に生まれる。大正元年（一九一二）願成寺の東野玉尖について得度。八年、武生中学校卒業後、名古屋市護国院に安居する。昭和三年（一九二八）駒澤大学卒業後、曹洞宗研究生、駒澤女子高校教諭、大日本聯合青年団主事などを務め、昭和二十一年（一九四六）九月に宗福寺に住職する。三十五年十月に南明寺住職になり、その後光福寺にも住職した。三十五年五月より五十二年三月まで早稲田大学学生クラブ活動坐禅指導や『正法眼蔵』の講義を行った。また、五十二年より三年間、永平寺報恩授戒会の説戒師を務めた。道元禅師鑽仰会から発刊された雑誌『道元』を戦後に復刊した。『永平禅』『永平真禅道』の著作がある。昭和五十九年一月二十四日に八十六歳で示寂し

た。〔傘松〕第四八七号〕

ひがしやまーとくおう 東山得應

天保十二年（一八四一）ー明治三十三年

（二九〇〇）

和歌山市西福寺七世、田辺市祐川寺二十一世。号は大器。天保十二年五月五日、紀伊国和歌山に生まれる。本師は喚山大應。明治十六年（一八八三）に西福寺より祐川寺に転住し、不動尊や堂宇の再建に努めた。

二十二年二月に勸募により『大般若経』三百巻を新添する。明治三十三年四月三日に六十歳で示寂した。（本宮町請川谷 祐川寺飛地境内 お滝不動尊堂内安置木札の銘文）〔旧請川村役場保管の死亡届書類〕

ひきたーげんこう 引田玄光

明治二十一年（一八八八）ー昭和二十年

（二九四五）

鳥取県東伯郡寶林寺十六世、鳥取市雲昌寺十八世。号は金龍。明治二十一年九月十八日、鳥取県久米郡中北条村の引田八平の三男として生まれる。明治三十五年（一九〇

二）、定光寺の福永毫千の常恒会に入衆、

立身した。名古屋の安斎院僧堂に安居したり、飛驒の圓城寺の寺島悦巖などにも随侍

した。本師は加藤玄瑞。小学校卒業。三十九年に嗣法の後、四十二年に總持寺において転衣する。大正二年（一九一三）に朝鮮布教師補に任命されるなど、布教活動に尽力した。昭和二十年十一月二十三日に五十八歳で示寂した。（曹洞宗名鑑）

ひきまーだいゆう 引間大雄

明治四十三年（一九一〇）ー昭和六十三年

（二九八八）

所沢市長青寺五世。号は洞壑。明治四十三年一月十四日、埼玉県秩父郡下吉田村に生まれる。本師は山梨県南巨摩郡の南明寺の森大器。高等小学校卒業。一等教師を務める。永平寺別院専門僧堂に安居した。昭和三十二年（一九五七）に長青寺を設立して開山に本師を迎え、四十五年には法地に昇格した。昭和六十三年一月三十一日に七十八歳で示寂した。（曹洞宗現勢要覧）〔傘松〕第五三四号〕

ひぐちーしがん 樋口芝巖

明治十二年（一八七九）ー昭和四十七年

（二九七二）

岡崎市龍溪院独住五世、京都府綴喜郡龍雲寺、愛知県額田郡本光寺三十二世、両本山間島別院初世。号は維石。明治十二年十月五日、愛知県中島郡稻沢村の樋口弥十郎の二男として生まれる。受業師は温嶽耕堂。

曹洞宗第八中学林を卒業後、曹洞宗大学林に進み、明治三十八年（一九〇五）七月に卒業。その後、宇治興聖寺西野石梁の座下に安居する。四十二年に龍雲寺に住職し、四十三年に本光寺に転住する。四十四年に愛知県第九宗務所管内布教師となり、大正二年（一九一三）三月には准師家に任命され、愛知県知多郡の乾坤院僧堂に常在した。六年に大本山布教師に任命され、九年には龍溪院に転住、十年に永平寺単頭に任ぜられる。また、十二年に満州の両大本山間島別院の院主兼布教師に任命された。昭和十年（一九四〇）に間島別院院主を辞任して帰国した。十九年には永平寺後堂となり、二十二年に教学審議会委員に任命され

る。二十三年に龍溪院を退院する。三十七年に高祖七百回大遠忌焼香師を務め、大教師に補任される。宗外では、間島星華女学校の経営、間島健児団の組織、愛知県額田郡岩津町大字桑原に自彊（強）座談会を組織。そのほか、額田郡幸田村教育会特別委員、愛知県社会教育委員、大政翼賛会額田郡支部常務委員、豊川教化団講師、豊橋少林会講師、岡崎市立商業学校宗教科講師、岐阜県主催農会技手講習会講師、渥美郡各町村婦人大会講師、岩津町社会教育委員会長などを務めた。昭和四十七年十月十一日に九十三歳で示寂した。論説に「般若心経の綱概」「宗学と諸問題」「自我の反省について」「羅漢考」「神道考」「心の糧」「参禅の用心」「般若心経綱概の拾遺」「戸羅会香語」「正伝仏法の真実義」などがある。〔『曹洞宗名鑑』『洞門龍象要覧』『曹洞宗現勢要覧』『大澤山龍溪院誌』〕

ひぐちーどうぎ 樋口道義

文久三年（一八六三）ー明治三十六年（一九〇三）

明治期以降曹洞宗人物誌（十二）

男鹿市清松寺、秋田市補陀寺三十八世。号は徳山。文久三年八月五日、出羽国秋田大町に生まれる。受業師は清岳智童、本師は竹庵撃輒。明治十三年（一八八〇）に得度の後、清源寺二十二世の撃輒に随侍する。同年三月に秋田県曹洞宗専門支校に入學、七月に撃輒の室に入る。十五年十二月に教導職試補となり、清松寺に住職する。二十二年八月に秋田県曹洞宗支局所轄教導副取締となり、十月に補陀寺住職、十二月には秋田県曹洞宗支局管理者教導取締に任命される。二十五年には、秋田県曹洞宗録所長となった。二十六年、かつて革新会に列した科により補陀寺住職を罷免されたが、両山和議により旧の如く住職となった。明治三十六年七月十五日に示寂した。〔『洞門二十五哲』『洞上高僧月旦』（昭和）〕

ひぐちーりようほ 樋口良歩

弘化元年（一八四四）ー昭和二年（一九二七）

甲府市光福寺二十世、山梨市信盛院二十三世、笛吹市廣嚴院四十世、安中市補陀寺四

十一世。号は退進。弘化元年九月十五日、越後国蒲原郡船戸山新田の樋口間右衛門の二男として生まれる。受業師は尾張・林泉寺の上杉獨歩、本師は越前金鳳寺の新豊即心。文久元年（一八六一）より尾張・法持寺の鼎三下に、慶応元年（一八六五）より摂津陽松庵の雪巖に参禅、帰省後、新潟市圓通寺の快豊に参禅する。明治四年（一八七一）に新潟市東陽寺明田川實参初会に立職する。五年に金沢市大乘寺の麟堂に、続いて廣嚴院の即心や鷹林冷生にも参禅した。七年に坂井市金鳳寺即心に嗣法し、八年に信盛院の住職となる。十四年に廣嚴院に転住し、十九年に補陀寺に転住する。山梨県第二十七・二十八区曹洞宗教会会頭、同県教導副取締、同県曹洞宗触頭、同県中教院教師、支局副取締、専門支校教師長、群馬県支局副取締、統洞上聯灯録編輯材料蒐集委員、雙林寺認可僧堂准師家、宗務所長、曹洞宗公選議員、地方布教師、同布教部委員長、両大本山巡廻布教師、甲府郵便局精神修養講師などを務め、慈観寺僧堂准師家も兼ねた。著書に『妙亀山廣嚴院三十

八祖即心永肩禪師伝』がある。昭和二年十一月十四日に示寂した。〔『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗名鑑』〕

ひこさかーそうこう 彦坂宗光

明治元年（一八六八）ー昭和十三年（一

九三八）

丹波篠山市太寧寺三十二世、丹波篠山市観福寺二世。号は一寶。明治元年六月五日、

丹波国多紀郡篠山南新町に彦坂鎔四郎の二

男として生まれる。受業師は清水仏光。明

治十四年（一八八一）八月に三田市永澤寺

の中尾瑞鳳に首先安居する。十九年に太寧

寺の直林鳳瑞の初会において立職し、二十

年九月十二日に鳳瑞の室に入って嗣法す

る。二十五年一月に観福寺住職、二十六年

十月には永平寺で転衣し、四十二年五月に

太寧寺に住職した。昭和十三年九月二十六

日に示寂した。〔『現代仏教家人名辞典』

「太寧寺過去帳」

ひさおうーりようえい 久翁亮英

天保十二年（一八四一）ー大正九年（一

九二〇）

中津川市源長寺七世。号は大保。天保十二年九月十日、美濃国恵那郡に可知儀右エ門の三男として生まれる。受業師、本師は源長寺六世の吉田亮倫。岐阜県第三曹洞宗務長を務めた。大正九年一月一日に七十九歳で示寂した。〔『現代仏教家人名辞典』〕

ひさばやしーようしゅう 久林養洲

ー大正十年（一九二一）

名古屋市建昌寺二世、静岡県周智郡大洞院

独住四世、浜松市龍現寺開山、豊田市廣濟

寺二十七世、豊田市宝積寺開山、豊田市恩

真寺開山、鹿屋市含粒寺開山。号は泰叟。

明治九年（一八七六）春頃、高山の善応寺

で説教するうち、信徒が結社して積善講が

生まれる程の行解者であった。大正十年七

月五日、米子市の久林貞宅にて八十一歳で

示寂した。〔建昌寺過去帳〕「明教新誌」

第三七〇号）

ひさまつーゆうぜん 久松有禪

元治元年（一八六四）ー大正十四年（一

九二五）

宿毛市円覚寺五世。号は無得。元治元年九月十日、伊予国下浮穴郡井門村に生まれた。俗名は右吉。本師は久松文明。明治十五年（一八八二）に松山法龍寺に安居した。池田有機に就いて修学し、愛媛県宗務支局において四級卒業した。二十二年六月に円覚寺に住職し、高知県曹洞宗宗務所長を務めた。大正十四年八月十一日に六十二歳で示寂した。〔『現代仏教家人名辞典』〕

ひなぢーごうせん 比奈地恒仙

ー明治三十八年（一九〇五）

掛川市最福寺三十世、牧之原市瑞昌院二十

三世。号は竺翁。遠江国周智郡森町村比奈

地に生まれる。安政三年（一八五六）四月

に瑞昌院の住職となり、本堂を建立し、七

年に晋山開堂した。明治四年（一八七一）

五月に最福寺に転住する。二十六年まで住

職を務め東堂となる。明治三十八年三月十

四日（一説・明治三十年一月十四日）に示

寂した。〔瑞昌院過去帳〕

ひのきーずいん 檜瑞運

ー昭和八年(一九三三)

新発田市常勝寺二十四世、新発田市宝泉寺二十五世、新発田市溪岩寺二十五世。号は天祥。能筆家と伝わる。昭和八年十月十三日に示寂した。

ひのしたーれいせん 日下令宣

明治十四年(二八八二)ー昭和三十八年

(一九六三)

厚木市福伝寺二十七世、相模原市仙洞寺二十二世。明治十四年二月一日、神奈川県愛甲郡浄雲寺に日下紀道の長男として生まれる。はじめ仙洞寺に住職し、のち福伝寺に転住する。寺院級階査定調査会委員、神奈川県第二宗務所第六・七・十三教区長、宗務所会議員、布教委員を務める。宗外では、神奈川県津久井郡串川村立尋常西青山小学校長、西青山実業補習学校長、郡仏教会理事、同副支部長、同理事長、五ヶ村組合法面委員、二ヶ村組合学務委員、司法保護委員、神奈川県仏教会愛甲郡支部長、民生委員、青少年転導会長、児童委員などを

務めた。昭和三十八年三月二十二日に示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』)

ひびーしょうおう 日比證應

明治二十年(一八八七)ー昭和三十七年

(一九六二)

桑名市真如寺二十三世。号は禅海。明治二十年二月十五日、真如寺に生まれる。受業師、本師は日比逸應。中学林卒で、總持寺に安居した。昭和二年(一九二七)には宗会議員に当選しており、二十一年に権大教師、三十七年に大教師となった。昭和三十七年七月十八日に示寂した。(『宗教時報』第一二九号)

ひびーほうずい 日比芳瑞

文政十一年(二八二八)ー明治三十四年

(一九〇二)

豊川市花井寺十七世中興、小牧市龍泉院十世。豊橋市医王寺、豊橋市玄超院開山。号は靈巖。文政十一年十月五日、三河国宝飯郡瓜郷村に生まれる。受業師、本師は照雙独雄。嘉永元年(一八四八)より五年まで

駒込吉祥寺に、安政二年(一八五五)より万延元年(一八六〇)まで名古屋大光院の大薩祖梁に参随した。明治二十年(一八八七)に可睡斎の西有穆山、二十八年に永平寺の森田悟由を請して授戒会を開く。明治三十四年九月二日に七十二歳で示寂した。(『花井寺歴代帳』)

ひやまーこくじょう 日山國城

ー明治三十八年(一九〇五)

志摩市栖雲寺十世、山梨県南巨摩郡廣禪院十一世、号は大梁。伊勢国度会郡河崎町に藪内家の子として生まれる。受業師、本師は大然古道。栖雲寺には慶応三年(一八六七)より明治二十三年(一八九〇)まで住職した。明治三十八年六月十三日に八十一歳で示寂した。

ひょうどうーてつじょう 兵藤鐵乗

明治二十二年(二八八九)ー昭和四十三

年(一九六八)

東京都豪徳寺三十三世、東京都福昌寺三十五世。号は大庵。明治二十二年三月八日、

愛知県豊橋町に生まれる。本師は梶川乾堂。大正四年（一九一五）に曹洞宗大学を卒業。世田谷中学教諭を二十余年務め、昭和二十年（一九四五）に總持寺副監院、三十六年に大教師となる。東京総和会会長、總持寺顧問会議長を務めた。昭和四十三年十二月十三日に七十九歳で示寂した。（『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』『跳龍』第二十一巻第二号）

ひらいーりゆうき 平井隆機

慶応二年（一八六六）―昭和二十四年（一九四九）

三原市米山寺十五世。ハワイ布教所（現オアフ島ワヒアワ龍仙寺）開山。号は大蔵。慶応二年十月五日、備後国奴可郡西城町能楽寺に生まれる。受業師は平井隆賢、本師は土肥黙宗。明治二十一年（一八八八）一月に米山寺住職となり、同年十月に永平寺で転衣する。三十七年に曹洞宗両大本山慰問使としてハワイへ派遣され、三十九年に両大本山布教所および日本人小学校を創立し、ハワイでの教化に努める。大正五年

（一九一六）八月に帰国した。昭和二十四年十一月二十五日に八十四歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』『米山寺過去帳』浅井宣亮「20世紀初頭のハワイにおける曹洞宗」〔禅研究所紀要〕第三十九号）

ひらいわーこがく 平岩古學

安政四年（一八五七）―昭和八年（一九三三）

岡崎市蓮華寺十四世、岡崎市萬松寺三十四世。号は哲道。安政四年二月十五日、三河国碧海郡桜井村川島に長谷部藤輔の二男として生まれ、平岩姓を称す。受業師、本師は大見古林。明治十五年（一八八二）八月、愛知県第二号専門支校に入り、四級卒業する。十八年に古林に嗣法し、二十一年三月に曹洞宗大学林に入学、二十五年七月に卒業する。二十二年九月に萬松寺三十四世に住職し、二十六年に初会結制した後、二十七年七月に蓮華寺に転住する。三十六年両大本山布教師に任命されるとともに、第一期曹洞宗教導講習院に入り、翌年卒業する。三十九年二月に愛知県第九支局取締心

得、四十一年五月に宗務所長となる。また、四十四年には布教部委員長となり、大正二年（一九一三）八月には曹洞宗第三中学林教頭となる。授戒会の戒師も多く務めたと伝わる。昭和八年四月十日に七十七歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』）

ひらおーけんしゅう 平尾賢宗

明治四十四年（一九一一）―平成三年（一九九一）

兵庫県川辺郡長傳寺十五世。号は祖山。明治四十四年三月五日、兵庫県川辺郡六瀬村に生まれる。本師は平尾活竜。駒澤大学文学部仏教科を卒業する。多々良学園理事、多々良学園高校教諭、防府市美術連盟理事も務めた。平成三年四月十九日に八十一歳で示寂した。（『洞門龍象要覧』）

ひらおかーかいあん 平岡契安

元治元年（一八六四）―昭和十九年（一九四四）

由布市興禅院三十七世、杵築市宝積寺二十

世、宮崎県西臼杵郡興禪寺開山。号は佛心。元治元年四月七日、豊前国宇佐郡佐々礼村に生まれる。受業師、本師は大峰融旬。大分県第一曹洞宗務所長を務める。昭和十九年八月三日に八十一歳で示寂した。〔現代仏教家人名辞典〕

ひらおかーじぜん 平岡字禪

明治六年（一八七三）ー

横須賀市萬藏寺、福井県三方上中郡大蔵寺五世。号は契天。明治六年十月六日、大分県速見郡に生まれる。受業師は無着下融旬、本師は平岡契庵。中島蘭洲・田辺月山に就き修学。明治二十七年（一八九四）に由布市興禪院契庵に嗣法する。三十二年に曹洞宗大学を卒業、總持寺にて転衣して、十二月に大蔵寺に任職する。三十七年には教導講習院を卒業した。両本山布教師に任命されるとともに、管内布教師も務めた。〔曹洞宗名鑑〕〔平岡字禪履歴書〕

ひらかわーこうあん 平川肯庵

文化十三年（一八一六）ー明治十四年

（二八八一）

宇治市興聖寺三十一世、池田市陽松庵二十二世、門真市長福寺二十四世、佐賀市妙安寺二十世、佐賀市高傳寺三十八世、京都市月橋院十八世。号は羅溪。文化十三年、肥前国佐賀郡本庄村に平川安右エ門の二男として生まれる。受業師は佐賀水月寺の法山、本師は回天慧杲。明治五年（一八七二）四月二十八日、興聖寺住職となる。十年二月十二日に英照皇太后、照憲皇后の行啓を受け、同年八月二十七日退隠した。明治十四年八月三十日に六十六歳で示寂した。〔寺縁雜記〕『万筆記』『宇治興聖寺文書』三

ひらさわーこうかく 平澤高岳

明治八年（一八七五）ー昭和十五年（一九四〇）

山形市傳昌寺十七世、山形市法来寺十八世、山形県西村山郡巨海院二十四世、秋田市門通寺開山、樺太大泊（現コルサコフ）楠溪寺。号は傑乗。明治八年八月二十五日、山形県村山郡釈迦堂村に石井小四郎の

二男として生まれる。受業師、本師は平澤了機。明治二十一年（一八八八）九月に法来寺十六世の了機に得度し、二十二年山形市龍門寺今野玄濤の片法幢会に入衆、二十七年傳昌寺平澤了諦の初会に立身、三十一年了機の室に入って嗣法する。また、山形市の曹洞宗小學校、県立中學校、第二高等學校を経て曹洞宗大學林に入学し、三十五年七月に卒業した。同年、永平寺で転衣し、四十一年十二月に傳昌寺に任職する。

山形市で雑誌「東北教報」を発刊して僧俗を裨益すること多大であった。大正四年（一九一五）より鉄道布教師、曹洞宗務所管内布教師および同委員長、両本山布教師、山形県第一曹洞宗務所長、同県仏教會理事および副會長、曹洞宗議會議員などを務めた後、昭和三年（一九二八）に本山副監院、六年に曹洞宗師家となる。また、十年には樺太布教管理に就任し、大泊の楠溪寺住職となった。宗外においては、大正十年三月に私立山形盲学校第二代校長に就任、昭和二年七月八日に私立山形聾啞学校を創設し、十年四月一日に両校を山形県立

学校に移管し校長に就任する。そのほか、

山形県第一健康保険審査会委員、同県方面委員、同県選挙粛正委員会委員、同県社会教育委員、同県時局対処委員会委員などを歴任した。昭和十五年一月二十二日に六十七歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典〕

ひらさわーどうかん 平澤道貫

明治三十年(一八九七)ー昭和三十八年

(一九六三)

福知山市長川寺十三世。明治三十年八月二十日、福井県丹生郡織田村に生まれる。本師は平澤梅山。大正十二年(一九二三)に駒澤大学を卒業した。永平寺僧堂係長、円通寺認可禅林講師、教区長、布教委員、宗勢調査会地方調査委員、宗務所長、梅花流京都府連合会長、革新政策審議会専門委員を務める。宗外では、季節保育連盟理事長、民生児童委員、社会福祉協議会評議員、保護司、福祉山学園理事、仏教会長などを務めた。昭和三十八年五月十七日に六十七歳で示寂した。〔洞門龍象要覧〕「宗

報」第三四〇号)

ひらたーりゅうほう 平田隆鳳

ー明治二十九年(一八九六)

木更津市東泉寺三十世、木更津市妙光院、君津市地福寺。号は南嶽。本師は無参真禅。薩摩藩士族平田左衛門の二男として生まれる。明治二十九年一月四日に地福寺で示寂した。

ひらつかーりようめい 平塚良明

明治十六年(一八八三)ー昭和四十六年

(一九七二)

東京都永久寺十八世、八王子市高乗寺三十五世。号は大光。明治十六年三月四日、永久寺に生まれる。本師は大久祖明。明治三十六年(一九〇三)、曹洞宗高等学林中学科を卒業。宗務所会計を経て、昭和二十年(一九四五)に宗務所長となる。十五年、二十年に總持寺御忌焼香師を務める。宗外では、司法保護曹洞宗報効会常務理事を務めた。昭和四十六年八月二十八日に八十八歳で示寂した。〔曹洞宗現勢要覧』『洞門

龍象要覧〕

ひらのーたいじゅん 平野泰淳

天保十二年(一八四一)ー明治三十年

(一八九七)

横浜市隨流院二十三世。号は地天。天保十二年、尾張国海東郡鍋蓋新田に生まれる。本師は東京泉岳寺三十九世の渡邊泰然。明治三十年一月十三日に五十五歳で示寂した。

ひらのーだいせん 平野大仙

ー大正二年(一九一三)

名古屋市乾徳寺十二世、清須市昌光寺(現在廃寺)開山。号は義海。平野伊助の三男として生まれる。受業師は本光瑞如、本師は未参英宗。明治三十八年(一九〇五)に乾徳寺境内東側に羅漢山を造園し、四十一年に奥書院と茶室を新築した。四十二年には授戒会を修行し、四十三年に愛知県第一宗務所長となる。四十五年、乾徳寺を常恒会地となした。大正二年七月十一日に七十一歳で示寂した。

ひらばやしーもくおん 平林黙音

文政十年(一八二七)ー明治三十八年

(二九〇五)

鳥取県日野郡正音寺六世、米子市法城寺九世、鳥取県日野郡萬福寺十五世。号は鉄成。文政十年二月一日、出雲国意宇郡岩坂村に平林文正の長男として生まれる。受業師、本師は加藤黙応。天保十一年(一八四〇)より嘉永三年(一八五〇)まで米子市総泉寺の見成に参随した。書画をよくしたと伝わる。明治三十八年一月五日に七十九歳で示寂した。

ひらやまーこくじゅん 平山國純

ー明治二十三年(一八九〇)

沼津市桃源院三十世、新城市龍岳院十四世。号は一祐。愛知県に生まれる。本師は施峰徳雲。石天道補に参随した。庫裡の一部で手習いを教え、農繁期に託児所を開いた。明治二十三年一月十八日に示寂した。(『大平年代記』)

ひらわたりーめいしゅう 平渡明修

ー昭和三十一年(一九五六)

藤岡市良信寺十八世。号は史雨。本師は岡田宜法。埼玉県志多見村に生まれる。旧制藤岡中学校を経て駒澤大学を卒業した。群馬県宗務所の初代所長に就任するとともに、群馬県各宗仏教連合会会長を務めた。宗外では、更生保護司会長、旧藤岡町会議員、藤岡市公平委員長、県立藤岡女子高等学校初代PTA会長、旧制県立藤岡中学校同窓会長を務めた。昭和三十一年十月三日に六十二歳で示寂した。

ひろうちーもくしょう 廣内黙咲

ー明治四十一年(一九〇八)

亀岡市光徳寺三十八世、南丹市観景寺、京都市永林寺十一世、南丹市天桂寺二世。号は大能。兵庫県和田山に生まれる。受業師、本師は龍山恵玉。観景寺に住職の後、明治十七年(一八八四)七月十七日に光徳寺に転住、三十四年七月に永林寺へ転住した。明治四十一年二月十八日に示寂した。(『曹洞宗全書』大系譜一)

ひろえーれいどう 廣江令童

明治二十一年(一八八八)ー昭和五十一年(一九七六)

松江市清光院二十四世、松江市龍徳寺十七世、島根県仁多郡玉雲寺、雲南市弘安寺。号は天心。明治二十一年三月五日、島根県意宇郡掛屋村に生まれる。受業師、本師は紫義賢。名古屋市圓通寺僧堂に学び、總持寺専門僧堂に安居した。管内布教師、宗務所長、後醍醐天皇遠忌香資勸募委員長、永平寺地方副監院、高祖大師七百回忌大遠忌勸募専使を務める。山陰家庭学院理事および院長、松江市仏教会会長、宗教連盟理事長、司法保護会長、民生委員を務めた。昭和五十一年六月十六日に八十九歳で示寂した。(『洞門龍象要覧』)

ひろかわーこうぜん 廣川弘禅

明治三十五年(一九〇二)ー昭和四十二年(一九六七)

西予市龍澤寺四十九世、千葉県安房郡信福寺。号は禹門。明治三十五年三月三十一日、福島県石川郡須釜村に大安寺住職広川

奇道の長男として生まれる。大正八年（一九一九）に東京の曹洞宗第一中学校補習科に学び、十年に曹洞宗大学に進む。昭和二十四年（一九四九）に總持寺顧問に就任、同年龍澤寺特選住職となる。二十六年、信福寺に転住する。宗外では、昭和三年、東京府世田谷町町会議員となり、八年に東京市会議員、十一年に東京府議会議員、十五年に衆議院議員、十八年に東京都議会議員となる。第二次世界大戦後の二十一年に衆議院選挙で当選し、二十二年に日本自由党副幹事長に、二十三年に民主自由党が結成され副幹事長に就任。二十五年より民主自由党は自由党に改名し第三次吉田茂内閣の改造により農林大臣を務めた。三十年には自由民主党顧問となる。また、大正十四年に自ら酒屋を営んで以降、酒販業にも影響を持ち、昭和二十四年に全国小売酒販生活協同組合顧問に就任、二十五年に全国酒販教代会会長、三十八年に全国小売酒販組合中央会の最高顧問となる。そのほか、昭和二十八年には宮城県に気仙沼漁業冷蔵株式会社を設立し、社長に就任した。学事関係で

は、昭和五年には自宅に隣接して世田谷さくら幼稚園を創立、三十一年に三宿さくら幼稚園が認可され、園長に就任する。また、都議会議員時代の昭和十八年に青葉高等女学校を引き継ぎ、三十三年に青葉学園中学・高校長に、四十一年には青葉学園短期大学の初代学長に就任する。昭和四十二年一月七日に六十五歳で示寂した。（『追想の広川弘禪』『傘松』第三〇三号「跳龍」第二三三号「そうせい」第一四一号）

ひろさわーかくどう 廣澤覺道

ー大正五年（一九一六）

北海道利尻郡大澤寺開闢一世、小樽市宗圓寺五世。号は能忍。越中国新川郡荻生村に有倉久兵衛の三男として生まれる。本師は徹旨得隨。嘉永四年（一八五二）、大坂佛眼寺にて得度し、明治元年（一八六七）蝦夷地に渡り徹旨得隨に嗣法、宗圓寺に住職する。十三年利尻島に渡り、説教所を設立、十六年には同島で利尻山大澤寺の寺号公称を許可される。二十三年には本堂、庫裡、龍王堂などを建築し、翌年には客室を

建て札幌中央寺の小松萬宗を請して結制江湖会を修行した。また、利尻・礼文両島で各宗の寺院を開くことに尽力した。大正五年三月三十日に示寂した。（『曹洞宗報』第五号『家屋 北海立志編』）

ひろさわーどうせん 廣澤道仙

明治三十九年（一九〇六）ー昭和四十一年（一九六六）

横浜市成願寺二十二世。号は竺心。明治三十九年三月二十三日、石川県七尾町百海に生まれる。受業師は七尾市靈泉寺の南嶽調道、本師は矢作法眼。昭和四年（一九二九）に駒澤大学東洋学科を卒業、八年まで總持寺に安居し、三十六年に中央大学法学部を卒業した。神奈川県第一宗務所第二教区長、宗務所管内布教師、特派布教師を務める。また、曹洞宗審判会審判員、審事院審事、監事を経て審事院長となる。宗外では、町内会正副会長、横浜市仏教会役員、民生委員、防犯協力会副会長、豊岡地区社会福祉協議会副会長など務め、鍼灸師でもあった。昭和四十一年四月二十八日に五十

九歳で示寂した。（『洞門龍象要覧』）

ひろしまーぶんゆう 廣嶼文雄

明治九年（一八七六）ー昭和六年（一九

三二）

一関市願成寺三十八世、一関市圓満寺住職。号は墨庵。本師は芳川雄悟。明治九年三月十六日に生まれる。明治二十五年（一八九二）願成寺の雄悟のもとで立身し、三十七年二月に嗣法する。宮城県専門支校（仙台中学林）を卒業し、二十八年に曹洞宗大学に入学するが、三年次に病気で退学した。二十九年瑞世転衣し、圓満寺に住職する。三十七年八月に願成寺に転住する。地方布教に努め、日曜少年教会、婦人会、青年会を組織、願成寺に各教会を聯合統一した四誓会を作る。また、両本山布教師に任命され、四十四年には曹洞宗宗会議員となり硬骨議員として県下の重鎮となった。昭和六年七月二十日に示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』）

ひろせーげんりん 廣瀬玄鱗

明治十三年（一八八〇）ー昭和十五年

（一九四〇）

福島市法伝寺十九世、福島市明光寺十七世、福島市明智寺二十七世。号は若外。明治十三年四月、福島県に父末永勇作と母茂與の三男として生まれる。本師は廣瀬智賢。第二十六中学林を卒業、萬松寺の義道、法持寺の天珠などに随侍した後、早稲田大学に学び、曹洞宗大学で聴講する。大蔵経の比喻因縁談の研究を行い、翻訳して少年お伽文学として世に紹介し文壇に名声をあげた。明治三十八年（一九〇五）に總持寺で瑞世し、同年明光寺に住職、四十四年に法伝寺に転住する。昭和十五年三月十五日に六十一歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』）

ひろせーだいうん 廣瀬大雲

明治五年（一八七二）ー

大東市勝福寺十二世、亀岡市青峰寺（現在廃寺）。号は靈洞。明治五年二月三日、堺県河内郡植附村に杉本茂作の三男として生

まれる。受業師、本師は廣瀬愚紋。大阪府第二号専門支校卒業。明治十六年（一八八二）から二十五年まで和泉市蔭涼寺に、二十五年から二十八年まで堺市紅谷庵に安居する。四十年十一月二十二日に大阪吉祥講布教師、四十四年から三度にわたり大阪第三曹洞宗務所布教師を務める。大正三年（一九一四）十一月より大阪府第三宗務所長を務めた。（『現代仏教家人名辞典』）

ひろたーどうきん 弘田道欽

慶応三年（一八六七）ー昭和二十二年

（一九四七）

菰崎市法泉院十一世、北杜市龍福寺。号は禹功。俗姓は初め廣瀬、後に弘田。受業師、本師は河村道鱗。慶応三年、尾張国名古屋に生まれる。明治十六年（一八八三）より二十三年まで金沢天徳院に、その後、永平寺にも安居した。曹洞宗地方布教部委員長を務めた。昭和二十二年六月十九日に八十一歳で示寂した。（『現代仏教家人名辞典』）

ひろつーせっさん 弘津説三

文久二年（一八六二）―昭和七年（一九

三二）

岩国市彌勒寺四世、同市洞泉寺三十九世、
龜岡市宗蓮寺十四世、三田市心月院二十二
世、岩国市大應寺十五世。号は大声、黙
地。文久二年八月二十四日（一説・文久二
年二月十日）、周防国玖珂郡横山村の平尾
家に生まれる。幼名は幸次郎。受業師、本
師は村上黙矣。明治十四年（一八八一）に
山口専門支校を卒業、十五年に専門学本校
（曹洞宗大学林）に入学し、十七年四月に
卒業する。十九年二月に永平寺に転衣して
彌勒寺に住職し、同年九月には洞泉寺に転
住する。この頃に弘津と改姓した。二十二
年に特選議員となり、二十三年に總持寺東
京出張所副監院に就任、二十五年には曹洞
宗宗制改良委員になるとともに、永平寺副
監院に任ぜられる。二十六年、臨時宗務局
参与となった。二十七年に心月院に転住、
二十八年に東京出張所副監院となる。三十
五年に永平寺顧問となり、高祖六百五十回
大遠忌参与に任ぜられる。その後、宗議會

議長を務め、四十年に永平寺東京出張所監
院に就任した。大正十二年（一九二三）の

関東大震災を機に公務を退き、心月院に帰
山し、大應寺に隠棲するが、十五年に永平

寺西堂に就任した。昭和七年二月二十日に
示寂した。編著に『承陽大師御伝記』『承

陽大師聖教全集』『黙応和尚遺稿』があ
る。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞

典』『心月禅院住山記』『曹洞宗選書』第六
巻「傘松」第二九七号、二九八号、二九九

号「大乘禅」第九卷第四号「洞上公論」第
八十七号）

ひろのーちざん 廣野智山

―昭和十六年（一九四一）

東京都宗円寺三十七世。号は智山。新潟県
加茂市鶴森に生まれる。受業師は徳光普
山、本師は技山道林。昭和十六年七月五日
に示寂した。

ひろまーかんずい 廣間寛瑞

―大正十三年（一九二四）

湖西市藏法寺十七世、湖西市京福寺開山、

豊橋市醫王寺開山。号は白峰。三河国宝飯
郡下地村の田中源八の子として生まれる。

受業師は祥山、本師は嘯雲光均。大正十三
年八月二十八日に七十八歳で示寂した。

ひろやまーげんじょう 廣山玄乘

文政三年（一八二〇）―明治三十一年
（一八九八）

綾瀬市報恩寺二十五世、横浜市松岳院。号
は天津。文政三年に生まれる。安政四年
（二八五七）八月九日より十月下旬までに
上京して転衣する。松岳院に住職した後、
万延元年（一八六〇）十二月に報恩寺に転
住した。明治三十一年六月十九日に七十八
歳で示寂した。（『松岳院玄乘願上書』）

ほ

ほうきーかんどろ 寶龜觀道

文久二年(一八六二)ー昭和六年(一九

三二)

薩摩川内市福昌寺七十二世、京都市勝明寺十三世。号は大光。文久二年十月四日、丹波国船井郡に生まれる。本師寶龜大麟。本山特選派(鹿兒島)宗務所長を務める。昭和六年六月十三日に七十歳で示寂した。『現代仏教家人名辞典』『福昌寺過去帳』

ぼうさわーぎょうしん 坊澤行信

ー明治二十二年(一八八九)

石巻市龍洞院二十一世、石巻市妙円寺二十三世。号は如庵。陸奥国閉伊郡八木沢村の佐々木三石エ門の次男として生まれる。本師は髻寶宣明。髻寶宣明および孝道寶淳に参随する。坊澤の姓は龍洞院の山号坊澤に由来する。武家の出身であるが、それを嫌い出家したと伝わる。石巻市永巖寺内に観音堂を建立した。明治二十二年十二月十七

日に七十一歳で示寂した。〔明教新誌〕第一七六六号)

ほうさんーばんじょう 寶山梵成

ー明治三十九年(一九〇六)

福岡市明光寺二十九世、宗像市建興院、糸島市喜久寺、宮若市東禪寺。号は佛鑑。福岡県糸島郡有田で生まれる。本師は仏邦梵童。總持寺後堂を務めた。稀にみる宗学者で、著書に『原人論啓蒙鈔』『少室六門集』『承陽大師行實図会』『太祖弘徳圓明国師行實図会』『禅海探珠要訣集』『洞上伝燈講式』〔説教必用〕珠林摘要舐犢鈔』〔校正〕夢遊集』『説教落草談』などがある。明治三十九年一月三十日に示寂した。〔明光寺歴住世代略記〕

ほうじょうーけいほう 北條珪峰

万延元年(一八六〇)ー昭和八年(一九

三三)

西尾市最明寺十四世。万延元年正月五日、三河国幡豆郡羽角村に服部甚吉の四男として生まれる。本師は北條道機。大正十三年

(一九二四)に徳島、香川、十四年に茨城、山梨において永平寺北野元峰禪師の随行布教師を務めるなど、曹洞宗両本山布教師として全国各地に巡回し布教活動に従事した。昭和八年十月三十一日に八十二歳で示寂した。〔現代仏教家人名辞典〕

ほうじょうーぜんえい 北條禪英

明治十四年(一八八二)ー昭和三十三年

(一九五八)

笠間市龍泉院、善慶寺。明治十四年九月一日、茨城県新治郡に生まれる。本師は北条得禪。大正八年(一九一九)に總持寺二世大遠忌事務員を務め、九年に龍泉院に住職した。宗務所長四選、宗議會議員二期、曹洞宗事変対処局参務、布教管理事務取扱同管理、總持寺太祖大遠忌事務本部主事を務めた。宗外では、茨城県岩間町救護員、方面委員、岩間町長、調停委員を務めた。昭和三十三年十月二十五日に七十八歳で示寂した。〔曹洞宗現勢要覧〕

ほうじょうーふまい 北條不昧

天保九年（一八三八）ー昭和七年（一九

三二）

平塚市真芳寺三十二世、平塚市満願寺。号は大修。天保九年十二月十五日、尾張国名古屋矢場町に江坂惣（宗）助の長男として生まれる。受業師は隆傳、本師は北條一牛。安政三年（一八五六）夏に三河国加茂郡足助村香積寺の陽宗の初会に入衆、慶応元年（一八六五）に北條一牛に嗣法する。

安政三年秋より尾張熱田法持寺の鼎三に、続いて長崎皓台寺の傳翁祖心に鉗鎚を受けた。慶応四年（一八六八）三月、永平寺に瑞世し、その後京都に上り勸修寺家の執奏により繪旨を拝戴する。明治二年（一八六九）に満願寺に任職し、十一年四月に真芳寺に転住する。七年に教導職試験、九年十月に権訓導、二十一年四月に支局庶務、支校監理となった。二十九年冬に真芳寺に初転法輪を建立する。昭和七年九月六日に九十五歳で示寂した。（「北條不昧禅師彰徳碑」『曹洞宗名鑑』）

ほさかーかんりゅう 保坂寛龍

明治三十三年（一九〇〇）ー昭和六十一年（一九七六）

年（一九七六）

北海道松前郡龍雲院二十一世。号は大嶽。明治三十三年十一月十八日、秋田県南秋田郡飯島村に保坂寛峰の五男として生まれる。受業師、本師は龍雲院十九世の近藤愚童。宗務所書記、教区長を務めた。昭和六十一年一月四日に八十五歳で示寂した。

ほさかーぎよくせん 保坂玉泉

明治二十年（一八八七）ー昭和三十九年（一九六四）

十日町市観音寺二十九世、佐野市興福寺二十世、佐野市興聖寺二十世。号は龍山。明治二十年五月十五日、新潟県東頸城郡浦田村に保坂嘉市郎の二男として生まれる。本師は観音寺の本山豪泉。大正二年（一九一三）に曹洞宗大学卒業後、曹洞宗研究生として、法隆寺の佐伯定胤に俱舎、唯識、因明などを学ぶ。学事においては、大正五年曹洞宗大学講師となり、第一中学校校長を経て、十四年駒澤大学教授となる。その後

一旦教授職から離れるが、昭和十年（一九三五）に大学教授に再任、世田谷中学校長を経て、三十三年に駒澤大学長となる。同年、「唯識三類境の研究」にて文学博士の学位を受け、三十四年駒澤大学総長に就任した。また、この間昭和九年から九年間、

観音寺に住職し、その後興福寺に転住、三十五年府中市観音寺の勧請開山となる。その後、宗議会議員、宗務院人事、教学各部長、特派布教師を務め、三十九年六月、全日本仏教界の仏書贈呈親善使節団団長としてデンマーク及び欧州十七ヶ国を訪れる。著作は『道元禅師聖訓講話』『禅の要諦』『唯識根本教理』『参同契・宝鏡三昧・洞上五位説現代講話』『仏教学概論』『禅学研究』などがある。昭和三十九年八月二十八日に七十七歳で示寂した。（『現代仏教家人名辞典』『洞門龍象要覧』『宗報』第三五四号「傘松」第二九一号）

ほさかーじつさん 保坂實参

安政六年（一八五九）ー昭和七年（一九

三二）

上越市光栄寺三十世、上越市昌禅寺。号は悟法。安政六年八月十二日、越後国頸城郡菅原村に保坂喜七の次男として生まれる。

受業師、本師は園林實應。天徳院の森田悟由、總持寺の畔上模仙に参随する。明治五年（一八七二）光栄寺において得度、翌年光栄寺に首先安居し、十一年夏に同寺において立職する。十四年九月から新潟県曹洞宗専門支校に学ぶ。十八年十二月に昌禅寺住職となり、三十一年十一月に光栄寺に転住した。この間、二十年に新潟県曹洞宗教会会頭となり、三十五年第九曹洞宗務支局管区監事、三十八年に支局取締、三十九年宗務所長を務め、四十年に總持寺再建本部総務部長心得となる。昌禅寺に経蔵を建てるとともに、授戒会を興行するなど、寺門経営と布教伝道に尽力した。昭和七年九月十七日に示寂した。（『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗名鑑』『明教新誌』第二五四九号）

ほさかーしんさい 保坂眞哉

明治十一年（一八七八）ー昭和八年（一

明治期以降曹洞宗人物誌（十二）

九三三

埼玉県児玉郡安盛寺二十二世、本庄市泉林寺。号は魯堂。明治十一年十一月三日に生まれる。受業師、本師は保坂臥山。明治二十四年（一八九一）四月に安盛寺臥山について得度、同年冬、群馬県緑野郡鬼石町永源寺の池田瑞巖の常恒会に入衆、二十六年埼玉県児玉郡本庄町安養院にて立身、三十一年十二月、臥山に嗣法した。中学校、哲学館、国民英学会を経て曹洞宗大学に入学し、三十六年七月に卒業した。三十七年七月泉林寺に住職、三十八年に安盛寺に転住する。三十九年六月に清国留学生を命ぜられ、二年間にわたり、北京に滞在した。また、宗議会議員、埼玉県第七曹洞宗務所長なども務めた。昭和八年二月十一日に示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『宗教時報』第五十四号）

ほしーいりゅう 保志意龍

ー明治十九年（一八八六）

松本市全久院三十五世、静岡県周智郡大洞院輪住。号は巨海。万延二年（一八六〇）

三月六日に全久院住職となり、文久二年（二八六二）八月一日に大洞院に輪住した。明治二年（一八六九）二月僧録司役を務める。四年二月に、大檀那で松本藩知事の戸田光則による廃仏毀釈で松本全久院は廃寺となり、意龍は愛知県渥美郡仁連木村全久院住持官堂金牛へ伽藍法脈を引き渡し什宝書類なども移した。その後は、新潟県出雲崎隠寮（現在、全久院）において余生を送り、明治十九年六月十九日に示寂した。（『仙寿山全久院志』『角川日本地名大辞典』『大日本山永平寺名古屋別院奉安殿護国院史』）

ほしのーえりん 星野恵林

ー明治三十六年（一九〇三）

佐久市正安寺二十八世、佐久市宗福寺十七世。号は岱嶽。新潟県に生まれる。本師は鉄岩大志。明治三十六年四月十二日に示寂した。

ほしのーせんりょう 星野仙梁

明治二年（一八六九）ー昭和十四年（一九三九）

本庄市安養院三十五世、狹山市禪龍寺。号

ほしのーばいみょう 星野梅苗

は棟雲。明治二年八月八日、武蔵国入間郡川越町の松平亘の子として生まれる。受業

嘉永元年（一八四八）―大正十四年（一九二五）

師、本師は星野古梁。師僧に入籍して星野

北海道二海郡門昌庵。号は祖傳。嘉永元年

と改姓。明治十四年（一八八一）三月に埼玉県専門支校に入り、同年九月に川越廣済寺にて古梁により得度、川越養壽院にて入

九月、陸奥国に生まれる。明治十八年（一八八五）、私立徳昌小学校を開校した。大正十四年四月二十九日に示寂した。

衆する。また、十八年四月から曹洞宗大学林に入り、在学中の二十一年に古梁より嗣

ほしみーてんかい 星見天海

法、同年に養壽院にて立身し、二十三年に

天保四年（一八三三）―大正二年（一九

大学林を卒業した。同年十二月に總持寺において瑞世、転衣する。二十七年に禪龍寺

一三）
柏崎市福勝寺十九世、柏崎市香積寺、五泉

住職となり、二十八年に安養院に転住した。二十九年八月には三陸地方海嘯被害地

市慈光寺、南足柄市最乗寺独住四世、北海道苫前郡海龍寺、樺太（サハリン）海福寺

へ慰問のために出発している。埼玉県専門

開山。号は天海、諱は皎月。天保四年十二

支校長を始め群馬県前橋市中学林学監、支

月二十三日、越後国刈羽郡南条村に星野治兵衛の三男として生まれる。受業師、本師

局取締、高祖大師大遠忌説教師、仏骨奉迎

は臥雲俊龍。嘉永四年（一八五一）三月、

委員、両本山布教師などを歴任した。昭和

吉祥寺梅檀林越後寮に掛錫し、大訥愚禪に

十四年一月二日に七十一歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕『現代仏教家人名辞典』『傘

松』第一三七号、第一三八号）
参随、安政六年（一八五九）天徳院の旃檀

奕堂に参随する。明治三年（一八七〇）九月に總持寺で瑞世し、十一月に福勝寺に住職した。五年に教導職試験補となり、訓導、

少講義に進み、十二年に香積寺に転住し

た。十四年七月に新潟県曹洞宗務支局教導取締に、次いで大講義に進んだ。十五年十

二月に慈光寺に転住し、十八年十二月より

十七年間最乗寺に住持した。二十年四月に曹洞宗大学林総監、二十二年十一月に曹洞

宗大会議幹事となった。二十六年、両本山

分離問題に際して内務大臣の命により曹洞宗事務取扱となり、事態の收拾に努めた。

三十四年に最乗寺を退き、福勝寺に閑居す

るとともに、總持寺西堂に任じられる。大正二年五月十三日に示寂した。（吉祥）第

三六六号『洞上高僧月旦』『大雄山誌』『半雲遺稿』『星見天海老師の行状』『近代曹洞宗法語精選』坤）

宗法語精選』坤）

ほそかわーかくほう 細川覺峰

―明治十三年（一八八〇）

三田市永沢寺二百六十九世、独住十九世。

篠山市長和寺二世。号は素宗。長和寺住職の麻野大陳に招かれ、同寺の法地開山となる。明治十三年四月十九日に示寂した。

（長和寺住職佐久間貞道趣旨書）

ほそかわーこうざん 細川靠山

明治二十八年（一八九五）―昭和四十八年（一九七三）

福井県吉田郡天龍寺二十一世、コナ大福寺四世。号は得水。明治二十八年九月三十日、福井県南条郡神山村松森に細川家の二男として生まれる。受業師、本師は長谷（東野）玉尖。大正十五年（一九二六）三月に東洋大学印度哲学倫理科を卒業。同年九月に、曹洞宗のハワイ開教師を志願してハワイに渡り、コナ島の大福寺、オアフ島の竜潜寺主任開教師、日本語学校校長を務めた。昭和十五年（一九四〇）二月に帰国、曹洞宗宗務院報国会幹事を務め、十六年八月に天龍寺に住職する。教区長、特派布教師などを歴任するとともに、長く北海道の布教師としても活躍した。また、宗外では県社会教育委員長も務めた。昭和四十八年十一月十二日に七十九歳で示寂した。

『洞門龍象要覧』『天龍寺と芭蕉』

ほそかわーしゅうどう 細川秀道

明治三十九年（一九〇六）―平成六年

明治期以降曹洞宗人物誌（十二）

（二九九四）

珠洲市千光寺二十世、珠洲市大聖院二世。明治三十九年三月四日、石川県珠洲郡正院村正院小路に細川道関の長男として生まれる。受業師は細川道関、本師は石崎梅幹。大正十五年（一九二六）に世田谷中学校を卒業、昭和二年（一九二七）十二月に駒澤大学を中退、石川県小学校教員養成所を修了した。また、總持寺祖院に安居する。宗務所職員、石川県青少年教化員、總持寺祖院布教師、管内布教師、参禅道場師家、教区長を務めた。宗外では、昭和二年四月から二十年九月まで小学校教員を務めたほか、珠洲市中央公民館長、児童委員、珠洲市社会教育講師、司法委員、民生委員、石川県立飯田高等学校PTA会長を務めた。平成六年五月三十一日に八十九歳で示寂した。『洞門龍象要覧』『曹洞宗現勢要覧』

ほそかわーしゅんどう 細川俊道

安政六年（一八五九）―大正十一年（一九二二）

さくら市璉光院十八世、矢板市長興寺三十

九世。号は大徹。安政六年三月三日、下野

国芳賀郡馬門村に細川髓運の長男として生まれる。受業師、本師は細川髓運。本師の先住地である璉光院に十八世として入寺、後に長興寺に転住した。栃木県第二曹洞宗務所長を務める。山林平地三町歩開墾事業を興すとともに、明治二十五年（一八九二）には本堂、庫院の大改修を行ない、長興寺の復興に尽力した。大正十一年八月十五日に六十四歳で示寂した。『現代仏教家人名辞典』

ほそかわーせいゆう 細川清祐

明治二十九年（一八九六）―平成四年

（二九九二）

京都市宗仙寺二十五世。号は容伯。明治二十九年二月十一日に京都市葛籠屋町に生まれる。宗仙寺、臥竜院に安居する。宗務所長、布教部委員長、宗議会議員を務めた。宗外では、府仏教会理事、同評議員も務めた。平成四年十二月十五日に九十七歳で示寂した。

ほそかわーせきおく 細川石屋

明治二十年（一八八七）―昭和四十三年

（一九六八）

奥州市正法寺五十三世、豊田市恩真寺、豊田市淨泉寺、一関市安養寺、東京都伝叟院。明治二十年十月十一日、愛知県西加茂郡の恩真寺に細川亮雲の次男として生まれる。受業師、本師は細川亮雲。丘宗潭、岸沢惟安に参随した。明治三十四年（一九〇一）に恩真寺亮雲により得度、三十九年に愛知県東加茂郡香積寺に安居。大正六年（一九一七）から十三年まで伊豆市修禪寺僧堂の典座として務め、同年四月十五日に淨泉寺に転住した。十四年より横浜市西有寺玉田仁齡下で僧堂監寺、都寺、後堂を務めた後、昭和十三年（一九三八）四月一日から二十二年十二月まで神奈川県南足柄村最乗寺僧堂の後堂を務めた。二十三年一月五日に曹洞宗師家に任じられ、總持寺後堂に就任、同年および二十六年、二十七年に教学審議会委員となる。二十八年二月二十日に泉佐野市禪徳寺専門僧堂堂長に任じられ、六月十二日には正法寺僧堂堂長とな

り、新僧堂を開いた。三十三年三月二十日に安養寺を兼務、七月十五日に總持寺監院となり、九月十九日に伝叟院を兼務する。

三十六年、三十七年、四十一年、四十二年、四十三年に總持寺の伝光会講師を務めた。四十年四月には峨山禪師六百回大遠忌焼香師も務めた。昭和四十三年九月八日に八十一歳で示寂し、總持寺西堂を贈与される。（『跳龍』第三一六号、第三一八号『細川石屋老師回顧録』『細川石屋老師餘芳録』『洞門龍象要覽』）

ほそかわーどうけい 細川道契

明治十五年（一八八二）―昭和三十年

（一九五五）

秩父市定岳寺十八世、八王子市高乗寺三十世。号は悟蔭、仏遷。明治十五年一月三日、広島県比婆郡本田村に生まれる。受業師、本師は金寶臺曉。明治二十八年（一八九五）、広島県甲奴郡光明寺で得度、同年に山口県佐波郡玉林寺にて入衆、三十八年に埼玉県北足立郡普門院で立身、三十九年光明寺で金寶臺曉に嗣法する。中学林、高

等中学林を経て曹洞宗大学林に入学し、三十九年七月に卒業した。大正六年（一九一七）に東京都青松寺僧堂准師家、次いで師家となり、九年には永平寺北野禪師侍局長を務めた。高田道見主筆「仏教新聞」編集長を務めるとともに、大乘仏教会を開設し、布教に尽力した。昭和二十六年（一九五一）には旧軍事施設に買収された寺有山林の払下げに奔走し、旧寺有山林の殆どを確保した。著書には『寒巖禪師嗣承決』

『活用自在禅学道話集』『新撰観音信仰講話』『最新観音靈驗集』『北野元峰禪師伝歴』『北野元峰禪師説話集』『参禅道話集』『洞上室内伝法口決三物秘弁講話』『在家生活化せる宗門の現状に順応する高祖道の復活法』などがある。昭和二十年四月九日に示寂した。（『高乗寺沿革史』『曹洞宗名鑑』『曹洞宗現勢要覽』）

ほそかわーどうせん 細川道仙

明治二十六年（一八九三）―昭和三十六年（一九六二）

三木市雲龍寺二十五世、三木市地藏寺二十

二世。号は大覺。明治二十六年一月二十八日、兵庫県明石郡神出村に汐谷家の子として生まれる。受業師、本師は細川良道。細川と改姓する。般若林（神戸八王寺）専門僧堂・後堂、大正から昭和初期まで愛知中学林教頭を務めた。昭和三十六年九月一日に示寂した。（『宗報』第三一八号『洞門龍象要覽』）

ほそかわ ゆうほ 細川祐保

昭和十年（一九三五）―平成三年（一九

九二）

宇治市能化院二十二世、京都市宗仙寺二十六世、南丹市昌林寺。号は寛山。昭和十年六月三日、京都府加佐郡中舞鶴町に生まれる。受業師、本師は細川清祐。昭和二十一年（一九四六）三月に宗仙寺の細川清祐について得度、二十六年に同寺で立身、三十年に細川清祐に嗣法した。二十九年四月に駒澤大学仏教学部禅学科に入学、三十三年三月に卒業する。その後、同年四月に曹洞宗教化研修所一般課程に入所し、三十六年三月に修了。三十五年七月に能化院住職と

なり、五十二年五月に宗仙寺に転住、六十二年四月には昌林寺兼務住職となった。宗務関係では、三十九年七月に曹洞宗総合企画室幹事となり、以後平成二年（一九九〇）にかけて曹洞宗宗務庁課長、曹洞宗全書刊行会幹事、曹洞宗出版審議会委員、曹洞宗総合特別審議会委員、五十五年三月曹洞宗宗制審議会委員、曹洞宗社会教化審議会委員、曹洞宗特別審議会委員、ソートービル運営委員会委員、曹洞宗出版審議会委員、曹洞宗責任役員および人事部長、同財政部長、曹洞宗財政審議会委員、曹洞宗総合特別審議会委員、曹洞宗財政審議会委員、宗務監査委員会委員、曹洞宗責任役員および総務部長、「修証義」公布百周年記念行事推進室長および同大会委員長を務めた。また、昭和五十年から曹洞宗議会議員に六選される。学事関係では、昭和五十七年三月に学校法人駒澤大学理事となり、以後平成元年までに学校法人愛知学院理事、学校法人旃檀学園理事、学校法人多々良学園理事、学校法人世田谷学園理事および理事長を務めた。總持寺関係では、昭和三十

九年十二月に二祖国師大遠忌奉讃寺族大会委員を務めて以降、總持寺審議室委員、本山跳竜編集委員、瑩山禅師六百五十回大遠忌記念出版委員会委員、瑩山禅師六百五十回大遠忌局「大遠忌だより」編集委員などを務める。また、昭和三十八年二月に「京都曹洞宗青年会」を結成して、「禅の集い運動」を展開するとともに、五十四年、五十五年の二度にわたり海外宗教事情視察員を務めた。その後、五十九年三月に「京都曹洞禅センター」を創設するなど、曹洞禅の海外普及にも貢献した。宗外では、昭和三十三年四月一日に大法輪閣編集部に入社、ほかに日本仏教会評議員および常務理事、京都府仏教会理事、日中友好仏教協会理事、京都仏教徒会議編集委員、勸仏教伝道協会「ドイツ恵光センター」建立奉讃会運営委員を務める。平成三年十二月三日に五十七歳で示寂した。（『搬柴運水』『曹洞宗現勢要覽』『傘松』第五八〇号「宗報」第六七六号）

ほそやーちぜん 細谷知全

ー昭和十年(一九三五)

山形県最上郡雲徳寺十八世。号は徳巖。山形県北村山郡長瀬村に柴田家の子として生まれる。本師は圓山瑞明。山形県第五曹洞宗務所長を務めた。昭和十年六月十八日に七十四歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

ほだーてつちゅう 補陀鐵柱

ー明治三十二年(一八八九)

つくば市西福寺二十七世。号は大船。新潟県刈羽郡黒滝村に生まれる。明治二十二年旧二月二十三日(新・三月三十一日)に示寂した。

ほりーかくせん 堀 鶴仙

ー昭和二十年(一九四五)

金沢市龍源寺二十六世。号は寿山。大正初めに龍源寺住職となり、六年(一九一七)十月十七日に授戒会を行なった。十四年七月二十二日に夢栄殿を建立した。昭和二十年一月二十二日に九十歳で示寂した。(『延

命山永住寺史』)

ほりーしょうなん 濠 湘南

ー大正十一年(一九二二)

姫路市安養寺十七世、姫路市實際寺(旧實際院)。号は嶺徹。本師は佛關惠法。大正十一年二月十二日に示寂した。(『安養寺過去帳』)

ほりーせんれい 堀 仙嶺

ー明治三十六年(一九〇三)

青森県下北郡門流寺九世。号は大岳。明治三十六年六月十七日に示寂した。

ほりーばいてん 堀 梅天

明治二十年(一八八七)ー昭和四十八年

(一九七二)

山形市龍岩寺十九世、山形市金勝寺。明治二十年五月十二日、山形県東村山郡大森村龍岩寺住職堀宗山の子として生まれる。受業師は堀宗山、本師は山本太雄。明治二十六年(一八九三)四月に山形県東村山郡高瀬村大森尋常小学校に入学、三十年三月に

卒業し、同年四月に山形県東村山郡天童尋常高等小学校高等科に入学、三十四年三月に卒業した。七月に宗山について得度している。三十五年九月に曹洞宗第二中学林第二学年に編入、三十九年七月に卒業した。その後、同年九月に慶應義塾大学予科第一学第二学期に編入、四十一年三月に卒業、同年四月に同大学文科に入学、四十四年三月に卒業した。なお、同年一月に金勝寺の山本太雄に嗣法する。五月には心理学教育学研究のために渡米し、四十五年九月に米国マサチューセッツ州ウースター市クラーク大学に入学する。大正二年(一九一六)に同大学において学位『マスター・オブ・アーツ』を受け、五年六月十五日には学位『ドクター・オブ・フィロソフィ』を受けた。同年九月に帰国し、同時に慶應義塾大学の教授となり、昭和二十年(一九四五)まで務めた。この間、同大学の仏教青年会の会長も務めた。二十五年四月に活水女子短期大学の教授となり、四十二年三月まで務める。著作は『教育心理学』。昭和四十八年六月二十日に八十六歳で示寂した。

〔堀梅天履歴書〕『曹洞宗名鑑』

ほりーみつじょう 堀 密成

明治元年（一八六八）―昭和二年（一九

二七）

名古屋市西光寺六世、名古屋市清閑寺三世。号は泰安。明治元年八月十五日、尾張国春日井郡三ツ淵村に舟橋源助の長女として生まれる。受業師は徳成、本師は泰道。

明治十七年（一八八四）九月に永平寺にて尼首座号を受け、十八年夏に京都養林庵に安居する。二十一年二月から二十四年十一月まで、名古屋市法持寺の白鳥鼎三について宗乗を、二十一年五月から三十六年五月まで名古屋市の臨濟宗妙心寺派徳源寺において、關鰲巔と關實叢について余乗を、三十二年二月から三十四年九月まで、名古屋市禪芳寺出張所において早川見竜につき余乗を研究する。二十八年四月、名古屋市西光寺（竜泉窟）六世として住職した。三十五年秋、養林庵住職水野常倫を推戴して私立尼学林を開設し、学監に就任した。四十二年九月には總持寺貫首石川素童より和尚

号を允可されている。四十四年四月に清閑寺（長性庵）へ転住し、工場布教、免囚保護事業、一般布教などに携わった。大正十四年（一九二五）に清閑寺本堂を建築し、布教道場とし、十五年五月に入仏供養を営んだ。昭和二年七月二十六日に六十歳で示寂した。〔曹洞宗尼僧史〕「中外日報」第二六二三五号）

ほりーりんどう 堀 麟童

天保十年（一八三九）―大正六年（一九

一七）

上越市徳泉寺十八世、富山市瑞泉寺、富山市東源寺、金沢市開禪寺、金沢市大乘寺六十三世。号は天出。天保十二年三月二十五日、能登国石川郡野村に生まれる。受業師は融童、本師は長州功山寺の佛心道海。富山光巖寺の松堂に参随した。嘉永四年（一八五二）八月に能登国金沢廣誓寺融童により得度、同年夏に越中国新川郡光西寺来應初会に入衆する。文久二年（一八六二）夏、長門国豊浦郡功山寺佛心の常恒会にて立身し、三年には佛心に嗣法する。元治元

年（一八六四）正月に總持寺に瑞世し、慶応二年（一八六六）二月に越中新川郡の瑞泉寺に初住、同年六月に東源寺に転住し、同年冬に初会結制修行した。四年十月に開禪寺、明治二年（一八六九）五月に徳泉寺に転住して、六年三月に大乘寺に転住した。二十九年、大乘寺に認可僧堂を開設し、三十年に師家となる。瑩山禪師五百五十回忌承陽大師諡号宣下慶讃会、懷契六百回忌、釋尊三千年大遠忌、月舟二百回忌などを厳修した。大正六年三月七日に八十三歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕『現代仏教家人名辞典』『加賀大乘寺史』

ほりうちーかんずい 堀内寰瑞

明治九年（一八七六）―昭和三十一年（一九五六）

山梨市永昌院四十二世、山梨市通宝寺十一世、甲州市景德院二十一世。号は本光。明治九年十月十一日、山梨県山梨郡堀ノ内村に堀内市右衛門の二男として生まれる。本師は橘田寰海。曹洞宗第六中学林を卒業した。初め通宝寺に住職し、大正十年（一九

意書)

二二)に景德院に転住、昭和十年(一九三五)に永昌院に転住した。昭和五年十二月に山梨県宗務所長となり、他に曹洞宗宗議会議員を二期、山梨仏教会会長も務めた。

昭和三十一年十月二十六日に八十歳で示寂した。(曹洞宗現勢要覧)

ほりえーげんこう 堀江玄光

ー大正十二年(一九二三)

富山市大川寺三十三世。号は寂庵。越中国新川郡小泉村に生まれる。曹洞宗大学林で寮監、豊川出張所において教師、明治二十七年(一八九四)より東京府下小学校林教授を務めた後、曹洞宗第一中学校の教授となる。多年、徒弟教育に尽力したが大川寺の住職となるため職を辞し、三十一年九月にはその功を表彰された。三十五年には曹洞宗得度以上の学徒教育を目的として曹洞宗学五葉社を設立した。他に富山県第一曹洞宗務所長、地方布教部委員長も務めた。

大正十二年十二月二十三日に五十八歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』『明教新誌』第四一八三号「曹洞宗学五葉社設立趣

ほりえーしゅんりょう 堀江春量

弘化二年(一八四五)ー昭和八年(一九

三三)

雲南市洞光寺二十二世、雲南市清岸寺八世。号は海天。弘化二年(一八四五)十一月七日、出雲国飯石郡下熊谷村に堀江本三郎の五男として生まれる。嘉永二年(一八四九)三月、妙昌寺七世の道鳴について得度した。本師は西村春朝。宇治興聖寺に安居した。明治十五年(一八八二)に洞光寺に住職し、四月に諸堂を修覆して境内に安置する観音堂の開扉を行い多くの参詣者で賑わった。終生精進を通され、禅学にも秀で西堂を数多く務めた。昭和八年八月三日に九十歳で示寂した。(『明教新誌』第三五二号「下海老屋家譜」)

ほりおーどくほう 堀尾獨峰

ー明治二十九年(一八九六)

雲南市龍徳寺十五世。号は大庵。出雲国大原郡宇治村に西家の子として生まれる。本

師は無学全量。明治二十九年五月三日に五十歳で示寂した。

ほりかわーいちゅう 堀川一雄

ー明治三十七年(一九〇四)

佐賀県杵島郡新光寺、長崎市菩提寺二十七世。号は大峯。島原に生まれる。本師は島原晴雲寺十四世の庸山玄仲。明治三十七年五月十九日(七月十三日)に示寂した。(菩提寺歴住世代帳)

ほりぐちーぎいち 堀口義一

明治二十九年(一八九六)ー昭和四十三年(一九六八)

館林市普濟寺三十世。号は大法。明治二十九年十月三十一日、埼玉県南埼玉郡慈恩寺村鹿室に生まれる。受業師、本師は堀口禎三。明治四十三年(一九一〇)に普濟寺の堀口禎三について得度、栃木市大中寺岡部萬中のもとで立身し、普濟寺禎三に嗣法した。大正三年(一九一四)三月に前橋中学校を卒業、九年七月に曹洞宗大学を卒業した。九年から十三年まで曹洞宗宗務院に務

める。宗外では、第一書房、十二年から十四年まで小泉八雲全集社、十四年から十五年まで鴻盟社に務め『仏教童話全集』を、後にアルス出版に務め『北原白秋全集』の出版に携わった。十年から昭和五年（一九三〇）に月刊雑誌「蛾人形」を執筆編輯、城西仏教会館において「仏教年鑑」や「布教体系」を執筆編輯した。ほかに駒澤大学監事および教務課長を務めた。著作に『禪門逸話選』『新布教辞典』『新布教便覧』などがある。昭和四十三年十一月十五日に七十二歳で示寂した。（『洞門龍象要覧』）

ほりぐちーきんみょう 堀口謹明

明治三十年（一八九七）ー昭和四十五年

（一九七〇）

秋田市歓喜寺二十四世、湯沢市香川寺二十九世。号は活水。明治三十年八月二十八日、秋田県河辺郡下北手村梨平の歓喜寺に生まれる。受業師、本師は哲翁寛明。大正十年（一九二一）に曹洞宗大学を卒業する。第四中学林副学監、梅檀中学副学監、永平寺副寺、秋田県宗務所長、教誨師を務

めた。宗外では、秋田県仏教会副会長、秋田県仏教連合会長、秋田市遺族会長も務めた。昭和四十五年十月六日に七十四歳で示寂した。（『洞門龍象要覧』『傘松』第三三〇号）

ほりぐちーこうりゅう 堀口宏龍

明治三十六年（一九〇三）ー昭和五十八年（一九八三）

沼田市成孝院二十四世。明治三十六年十月九日、群馬県多野郡小野村大字中に生まれる。本師は清水浩龍。總持寺に安居した。群馬県第七教区長、県仏教連合保護会幹事、總和会県支部常任幹事を務めた。宗外では、民生委員、保護司、檀信徒護持会県支部評議員を務めた。昭和五十八年四月二十二年に八十歳で示寂した。（『洞門龍象要覧』）

ほりぐちーしゅうどう 堀口周道

天保九年（一八三八）ー明治四十三年

（一九一〇）

本庄市長泉寺、さいたま市寶國寺十三世、

加須市醫王寺十六世、館林市普濟寺二十八世、前橋市龍海院。号は慶運、露山。天保九年に生まれる。本師は堀口大梁。はじめ長泉寺に住職し、寶國寺、明治二十二年（一八八九）に醫王寺、二十七年に普濟寺、その後龍海院へと転住した。明治初期には寺子屋を開設し、多くの人びとに教育を行った。二十年三月には埼玉県第一号曹洞宗務支局の選任を以て支校助教師を務めている。書家としても著名で、露山の号を用いた。明治四十三年七月二十四日に七十三歳で示寂した。（『醫王寺過去帳』『明教新誌』第二二八七号）

ほりぐめーちじゅん 堀込智準

ー大正五年（一九一六）

上田市靈泉寺二十二世。号は大安。受業師、本師は天外智照。永平寺に四年間安居した。大正五年十一月八日に七十四歳で示寂した。

ほりばーしゅんりゅう 堀場俊龍

明治七年（一八七四）ー昭和二十七年

(二九五二)

豊橋市正林寺二十世。号は靈瑞。明治七年八月十七日、愛知県中島郡起村に生まれる。本師は伊藤大俊。宗務所長心得、宗務所長、布教委員長を務め、明治四十四年(一九一〇)には宗会議員となる。大正元年(一九一〇)に正林寺の寺格昇等。宗外では、日清、日露戦争に従軍、豊橋在郷軍人会第十五部長、有隣財団孤児院理事、方面委員、司法保護委員を務めた。著作に『正林寺千体骨地藏尊縁起の栞』がある。昭和二十七年三月十三日に七十九歳で示寂した。(曹洞宗現勢要覧)

ほりもとーけんしゅう 堀本堅洲

文久元年(一八六一)ー明治二十三年

(二八九〇)

鳥取県岩美郡瑞泉寺二十世、鳥取県倉吉市定光寺五世。号は百煉。文久元年十月五日、但馬国二方郡諸寄村に堀本治右エ門の二男として生まれる。受業師は前田堅光、本師は田口徳随。得度の後、明治四年四月より同郡鳥取県岩美郡湯所村天徳寺清水天

充のもとで修学し、十二年には瑞泉寺徳随の推挙により教導職試補となる。二十年に瑞泉寺住職となり、大破していた同寺の諸堂を修補し結制を興行した。明治二十三年十二月十日に示寂した。(明教新誌「第二七五八号」瑞泉寺十九世代記案牘)

ほんごうーたっせん 本郷達宣

ー明治三十七年(一九〇四)

由利本莊市永泉寺三十六世、山形県西村山郡長谷寺十六世、由利本莊市檀淵寺勧請開山。号は義門。陸奥国栗原郡鷲沢村に永井家の次男として生まれる。鷲沢村の金剛寺において得度した。天保十四年(一八四三)より出羽国由利郡塩越村蛸満寺で修学した。明治維新後に秋田県曹洞宗取締を務める。また、永泉寺を法幢地僧録所に定めた。また、文久三年(一八六三)から慶應元年(一八六五)の間に永泉寺の山門を建立した。明治二十一年(一八八八)七月、永泉寺近郷の高齢者を招いて尚齡会を開いて齋を施与している。明治三十七年七月二十四日に八十六歳で示寂した。(永泉寺歴

住世代帳「明教新誌」第二三九七号)

ほんだーぎぜん 本多喜禪

明治二十八年(一八九五)ー昭和三十四年(一九五九)

石巻市永巖寺二十七世。号は祖岳。明治二十八年五月六日、福井県今立郡味真野村五分市に生まれる。受業師、本師は三輪泰輪。曹洞宗第二中学校を経て、大正十年(一九二〇)に曹洞宗大学を卒業した。曹洞宗布教師、宗務所長、宗会議員を四期務め、昭和二十四年(一九四九)には宗務総長となった。二十九年七月に永平寺監院に就任。三十一年秋にはネパールのカトマンズで開催された第三回世界仏教徒会議日本代表団団長として出席した。帰途、インド各地の仏蹟を巡拝し、ネール首相と面接して帰朝した。また、玄透禪師示寂百五十回忌にあたり、本山版正法眼蔵を開版するとともに、三代尊六百五十回忌の記念事業を実施し、「永平寺護持吉祥講」の規約によって広く祖山護持に努めた。宗外では、全国更生保護連盟常務理事、東北地方保護

司連盟会長を務めた。「傘松」に「職を祖山に奉じて」「祖蹟・木の芽峠と禹隣禅師」「年頭先ず思う植林の業」「吉祥講勸誘口陳」に就いて」「祖山護持の道」「玄透・慧昭・玄彝禅師の忌辰を迎えて」「祖山護持の基盤」「誌齡二百五〇号を祝して」「木版本正法眼蔵の重刊事業を完了して」「ネパール会議と仏蹟巡礼」「十七回忌を迎える勅賜密伝慈性禅師」「梅花流御詠歌と報恩会式」「祖山と宝慶寺」「歳旦に想う」「淡是れ真味―永平寺と精進料理」「義宮殿下をお迎えして」「六百五十回大遠忌正当の三代尊」「介祖の御遠忌と高祖の御忌法要」「改歳の祝詞に代えて」「三月前後の祖山」を寄稿した。また、著書に『宝慶寺誌』がある。昭和三十四年五月二日に六十四歳で示寂した。（『宗報』第二九〇号「傘松」第二六四号、第五一二号）

ほんだーそしん 本多祖信

明治元年（一八六八）―大正七年（一九

一八）

小城市香雲寺、千葉県夷隅郡大福寺二十二

明治期以降曹洞宗人物誌（十二）

世、香取市常福寺、宗像市増福院二十二世。号は齡堂。明治元年六月八日、肥前国松浦郡納所村に父江川治七と母ユクの末子として生まれる。受業師は本多齡長。本師は山中相音。明治十四年（一八八一）に得度の後、十五年に東松浦郡龍源寺の靈山洪堂片幢会に入衆、十六年に佐賀県専門支校に入学し、十九年三月に卒業した。二十年

ほんだーどうりん 本多堂雲
―明治十七年（一八八四）
豊川市東漸寺三十世、白泉寺（現在廃寺）二十二世、愛知県知多郡玉洞院伝法開山。号は祥嶽。本師は嵩岳英林。三河国寶飯郡横須賀村に生まれる。愛知県知多郡玉洞院の伝法開山である。明治十七年八月十九日に示寂した。（『萬年山般若林東漸寺誌』）

ほんだーとうりゅう 本多洞龍

文化十二年（一八一五）―明治十五年

（一八八二）

退学した。二十四年三月に總持寺で転衣し、同年香雲寺に住職、二十九年に大福寺に転住した。千葉・茨城・栃木三県連合中学林教授、佐賀県中学林学監、千葉支局議員、監獄教誨師、両本山布教師を務めた。四十一年八月に満州布教師に任じられ、布教所として安東県（現遼寧省東港市）に知音寺を創立して駐在した。四十四年十二月に朝鮮布教師となり、釜山總泉寺に駐在した。編著に『現行曹洞宗法規大全』がある。大正七年十月九日に五十一歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』）

越前市龍泉寺独住二十三世、越前市龍門寺二十六世。号は洞龍、雪堂、諱は慧雲。本師は江月満舟。文化十二年に生まれる。龍門寺では伽藍の再建などによって中興となり、その後転住した龍泉寺では明治維新後の寺院経営の危機を防いだことで中興の称号を得た。明治十五年二月十四日に五十三歳で示寂した。

ほんまーぎよくしゅう 本間玉宗

明治十九年（一八八六）―昭和三十三年

(二九五八)

南陽市東正寺三十二世、米沢市高岩寺、米沢市真福寺、白河市長壽院、香取市即翁寺。号は玄照。明治十九年三月五日、山形県米沢信夫町に生まれる。本師は規矩智玉輪。明治四十二年(一九〇九)に真福寺に首先住職し、大正五年(一九一六)に千葉の即翁寺に住職、七年に米沢の真福寺、八年に福島の高岩寺に転住する。その後、昭和三年(一九二八)に高岩寺に転住、六年に東正寺に転住し、真福寺や高岩寺を再建した。宗務関係では、明治四十二年に總持寺再建本部書記、大正七年に總持寺東京出張所知客および監院書記、十四年に曹洞宗教育興隆会書記、昭和二十年に山形県曹洞宗務所長、二十一年に宗議会議員、二十五年に總持寺副監院となった。宗外では、米沢弘教興道会理事、東置賜郡慈済会会長、少年教護委員、社会教育委員、司法保護委員、山形県司法保護常務委員会参与、司法保護司、東置賜郡保護司会常務および保護司連盟郡支部常務、赤湯町選挙委員会委員などを務めた。また、昭和十五年五月から

赤湯町保育園を経営した。昭和三十三年十月十三日に七十二歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』)

ほんまーしんゆう 本間眞勇

明治二十四年(一八九二)―昭和五十二年(一九七七)

由利本莊市恵林寺二十五世、秋田市鷲泉寺。号は勝巖。明治二十四年二月二十日に秋田県由利郡本莊町に生まれる。受業師、本師は大坂雄山。大乘寺専門僧堂に安居する。所会議員、教区長、宗務所副所長を務めた後、昭和三十三年(一九五八)三月から四十年十月まで秋田県宗務所長を務めた。宗外では、教育委員、村経済更生委員、学務委員、方面委員を務めた。昭和五十二年一月十六日に示寂した。(『洞門龍象要覧』)

ほんまーてんしん 本間天眞

―明治三十三年(一九〇〇)―

佐渡市本田寺二十五世、佐渡市興源院十四世、川口市正眼寺二十八世。号は佛性。佐

渡国雑太郡八幡町に本間長治良の長男として生まれる。受業師は徳宗忍戒、本師は大秀徳山。明治元年(一八六八)に廃寺となった興源院を復興した。明治三十三年五月八日に示寂した。(『新潟県寺院歴住世代名鑑』「本間長治良家過去帳」)

研究業績 (2024年 1 月～12 月)

浅原正和

〈論文〉

Evolution of tooth morphological complexity and its association with the position of tooth eruption in the jaw in non-mammalian synapsids. (共)	PeerJ 12	8 月	e17784
--	----------	-----	--------

岩佐宣明

〈論文〉

デカルトの循環の再考—コギトと内省的転回 (単)	名古屋哲学研究会編『哲学と現代』第39号	2 月	1-21
被造物の尊厳—比較衡量可能な内在的価値の可能性 (単)	加藤泰史編『問いとしての尊厳概念』(法政大学出版局)	3 月	157-179

〈学会発表〉

絶対的な主観的価値としての尊厳—G. シェーンリッヒを批判的に継承しつつ (単)	日本倫理学会第75回大会・主題別討議「尊厳概念の思想史的射程」(京都大学)	9 月	口頭発表
--	---------------------------------------	-----	------

内田康弘

〈著書〉

教養セミナー・ハンドブック (第 I 部)『大学で学ぶために』(共)	愛知学院大学教養部	3 月	23-28
『生徒指導・進路指導：理論と方法』(教師のための教育学シリーズ)第三版 (共)	学文社	4 月	129-147

〈学会発表〉

通信制高校におけるカリキュラムの特徴と その変化 (共)	日本教育社会学会第76回大会 (信州大学)	9 月	口頭発表
---------------------------------	--------------------------	-----	------

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈取材協力〉[月刊大学 2 月号] 通信制から進学 後押し (単)	読売新聞〔夕刊〕(2024年 2 月 24 日、第 25457 号)	2 月	3 面
〈取材協力〉変わる進学：通信制高 高まる存在感 (単)	朝日新聞 (2024年 3 月 23 日)	3 月	28 面
〈取材協力〉廃校のいま：広域通信制の松陰高本校 (単)	中国新聞 (2024年 3 月 28 日)	3 月	25 面
〈シンポジウム報告〉通信制高校の「多様化」とそのゆくえ—高等学校通信制課程の質の確保・向上はいかにして可能か— (単)	日本通信教育学会『研究論集』(令和 5 年度)	6 月	39-50
〈シンポジウム発表〉通信制高校の特徴と現状—高大接続上の課題を理解するために— (単)	第13回 大学コンソーシアム八王子 SD・FD フォーラム (八王子市学園都市センター)	8 月	口頭発表
〈取材協力〉通信制高校 多様な学習環境魅力 (単)	読売新聞 (2024年 10 月 25 日)	10 月	19 面

〈講演〉通信教育における「学び」を問い直す—通信制高校での「個別最適な学び」の実現に向けて—（単）	茨城県通信制高等学校等連絡協議会主催 令和6年度教職員研修会 （オンライン開催）	11月	オンライン発表
〈取材協力〉制度改正でどうなった？ 有識者に聞く通信制高校の課題とこれから（単）	通信制高校ナビ（2024年12月23日）	12月	Web版

遠藤哲也

〈論文〉 <i>Fgf10</i> mutant newts regenerate normal hindlimbs despite severe developmental defects.（共）	Proc. Natl. Acad. Sci. USA. 121.	3月	e2314911121
〈学会発表〉 マウスにおける指関節再生能力を探索	研究会「Looking back of studies on planarian regeneration and future directions」 （基礎生物学研究所）	8月	口頭発表

大松久規

〈論文〉 『釈禪波羅蜜次第法門』における有漏禪について（単）	『愛知学院大学禅研究所紀要』第52号	3月	123-146
中国仏教における「禅観」について（単）	『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第25回	6月	173-180
智顗の禪定思想（単）	『印度學佛教學研究』第73巻第1号	12月	
〈学会発表〉 智顗の禪定思想（単）	日本印度学仏教学会第75回学術大会 （駒澤大学）	9月	
中国天台における禅観の実修について（単）	曹洞宗総合研究センター第26回学術大会 （曹洞宗宗務庁）	10月	

河合泰弘

〈その他〉（翻訳・資料・その他） 瑩山禪師700回大遠忌シリーズ 曹洞禅の継承者にして流布者3「女人救済と観音信仰」	仏教タイムス（2024年4月11日）	4月	第1面
---	--------------------	----	-----

北村伊都子

〈著書〉 テキスト健康科学（改訂第3版） 4章 B.1. 栄養素の機能（単）	南江堂	9月	138-150
〈その他〉（翻訳・資料・その他） 飲酒、喫煙、薬物から自分を守る（単）	教養セミナーハンドブック第Ⅰ部 大学で学ぶために	3月	34-39
感染症から自分を守る（単）	教養セミナーハンドブック第Ⅰ部 大学で学ぶために	3月	40-43

香ノ木隆臣

〈学会発表〉

シンポジウム「日本文学とアメリカ文学における『告白』の諸相」(香ノ木隆臣(司会)、岩田和男、若松伸哉) 「生死を分けたものは何か—アン・セクストンと吉原幸子の詩作の比較から」	日本比較文学会 第56回中部大会 (愛知学院大学名城公園キャンパス)	12月14日	口頭発表
--	---------------------------------------	--------	------

佐々木 真

〈学会発表〉

〈ワークショップ〉SFLと他分野の関連性を考える—語用論とAIを中心に—	日本機能言語学会2024年度春期大会 (愛知学院大学名城公園キャンパス)	4月13日	
〈ワークショップ〉選択体系機能言語学と研究上の困難点	日本機能言語学会2024年度秋期大会 (杏林大学井の頭キャンパス)	10月12日	

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈講演〉AI時代の大学教育を考える	常葉大学大学院 国際言語文化研究科 FDSD 研修会 (静岡)	2月14日	
-------------------	---------------------------------------	-------	--

柴田哲雄

〈学会発表〉

労働教養所と「職業技能教育訓練センター」(単)	中国現代史研究会 (大阪商業大学 ユニバーシティホール蒼天／オンライン)	3月24日	
-------------------------	---	-------	--

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈書評〉菊池一隆著『中国国民党特務と抗日戦争』(単)	『歴史評論』885号、歴史科学協議会	1月	92-95
〈書評〉『信仰と越境のウイグル』評(単)	WEB 東方	12月	電子媒体

白木優馬

〈学会発表〉

親切の送り手による受け手の感謝の過小評価 見知らぬ他者に対する些細な親切における検討	日本心理学会第88回大会	9月	ポスター 発表
親切の送り手による受け手の感謝の過小評価 第三者評定との比較および感謝表出の影響の検討	日本社会心理学会65回大会	8月	ポスター 発表

城 貞晴

〈論文〉

Surface morphology of naphthalene single crystals grown by the physical vapor transport technique (共)	<i>Japanese Journal of Applied Physics</i> , Vol. 63	5月	065503
---	--	----	--------

Lattice Defects of Naphtacene Single Crystals Obtained by Physical Vapor Transport Technique Investigated by White-Beam X-ray Topography (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第71巻第3号	3月	1-6
---	----------------------	----	-----

〈学会発表〉

X線構造解析による PVT-PDA 結晶の構造変化の検証 (共)	第73回高分子学会年次大会 (仙台)	6月	ポスター
----------------------------------	--------------------	----	------

菅井大地

〈論文〉

スペイン内戦の風景とヘミングウェイの嗅覚 (単)	『エコクリティシズム・レビュー』第17号	7月	58-68
-----------------------------	----------------------	----	-------

〈学会発表〉

Seafaring Chinatown: Hybridity of Anglo-Saxon Frontier in Frank Norris's Romance (単)	Symposium: "Creativity & Change in Anglo-American Literature & Culture" (中京大学)	3月	口頭発表
--	---	----	------

身体を取り戻せー #SayHerName としての <i>Nightcrawling</i> (単)	日本アメリカ文学会中部支部 2024年度12月特別例会ワークショップ (中京大学)	12月	口頭発表
---	---	-----	------

渦巻にのまれてー『武器よさらば』における 自然風景のマテリアリティ (単)	日本ヘミングウェイ協会第34回全国大会 シンポジウム 「ヘミングウェイと環境的想像力」 (杏林大学)	12月	口頭発表
--	---	-----	------

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈学会報告文〉全国大会報告：放射能汚染土の 再生利用に関する政府広報「対話フォーラム」 の批判的談話分析 (発表者：中村優子) (単)	ASLE-Japan Newsletter, no. 57	12月	11
--	-------------------------------	-----	----

菅原研州

〈論文〉

瑩山紹瑾による僧侶教育について (単)	『日本仏教教育学研究』32号	3月	25-51
---------------------	----------------	----	-------

近世洞門における『信心銘拈提』の学びについて— 附録・『信心銘拈提畧抄』翻刻資料— (単)	『愛知学院大学禅研究所紀要』第52号	3月	67-121
---	--------------------	----	--------

〈学会発表〉

セッション6 (花園大学・小川太龍氏、駒澤 大学・横山龍顯氏) (コメンテーター)	日本佛教学会第93回学術大会 (広島大学)	9月	
--	--------------------------	----	--

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈講演〉秋田県における曹洞宗教団の展開について	曹洞宗總和会秋田県支部研修会	1月	
-------------------------	----------------	----	--

〈講演〉太祖瑩山禅師の御生涯について	曹洞宗總和会秋田県支部研修会	1月	
--------------------	----------------	----	--

〈講演〉宗門の伝法式について (3・4)	埼玉県祖門会研修会	2月	
----------------------	-----------	----	--

〈講演〉初期曹洞宗教団における喪儀の歴史について	大本山永平寺名古屋別院「土曜法話の会」	3月	
--------------------------	---------------------	----	--

〈講演〉曹洞宗の喪儀作法について	大本山永平寺名古屋別院「土曜法話の会」	3月
〈講義〉宗門における「愛語」について	曹洞宗総合研究センター教化研修部門勉強会	4月
〈講演〉平安時代の仏教—『紫式部日記』に見る仏事—	愛知県知立市生涯学習推進講座	5月
〈講義〉二祖懷奘禅師のご生涯	大本山永平寺特別講義（第1回）	6月
〈講演〉現代の曹洞宗における喪儀の成り立ち	有道会「教学・人権に関する政策専門部会」	7月
〈講義〉二祖懷奘禅師の勝躰	大本山永平寺特別講義（第2回）	8月
〈講演〉『行持軌範』の成立と展開（7～9）	曹洞宗滋賀県宗務所現職研修会	9月
〈講演〉『甘露門』について	大本山永平寺名古屋別院「土曜法話の会」	9月
〈講義〉二祖懷奘禅師の教え	大本山永平寺特別講義（第3回）	10月
〈講演〉これからの寺院のあり方について考える	大成会（宮城県）研修会	11月
〈講演〉宗門の伝法式について（5・6）	埼玉県祖門会研修会	11月
〈講義〉75巻本系統『正法眼蔵』を学ぶ	曹洞宗愛知県第一宗務所青年会有志「百不当の会」（毎月2回）	1～12月
〈寄稿〉峨山禅師からみた師・瑩山禅師—總持寺と永光寺の関係から	仏教タイムス 4月25日号	4月
〈寄稿〉瑩山紹瑾禅師の俗姓について	中外日報 10月2日号	10月

清 忠師

〈その他〉（翻訳・資料・その他）			
量子電磁力学による反射と透過—散乱確率とダイヤモンドの輝き—	材料工学コンソーシアム （日本大学理工学部駿河台キャンパス タワー・スコラ 6階 S604教室）	3月	口頭発表 【20分】

中村 綾

〈その他〉（翻訳・資料・その他）			
〈講演〉芥川龍之介『杜子春』と唐代伝奇—「杜子春伝」をめぐって—（単）	東洋文化振興会 （新日本法規出版本社別館）	7月	

野田大志

〈著書〉			
『日語词汇研究（日本語語彙論）』（共）	外語教学与研究出版社	3月	24-42
〈学会発表〉			
市販薬等の効能・効果に関する広告コピーの解釈をめぐって（単）	中部ことばのコミュニティ第7回例会 （金城学院大学）	3月	口頭発表
連語論と構文文法の言語観に関する多角的検討（単）	奥田言語学研究会（学習院大学）	7月	口頭発表
語の位相—「雅語」と「古風な語」—（共）	2024年度「台湾日本語教育研究」国際学術シンポジウム （淡江大学淡水キャンパス）	11月	ポスター発表

早川真理子

〈学会発表〉

Leila Mottley の <i>Nightcrawling</i> における家のモチーフについて (単)	日本アメリカ文学会中部支部2024年度12月特別例会ワークショップ (中京大学)	12月	口頭発表
---	---	-----	------

三上綾介

〈論文〉

工学を専門とする大学生の英語学習への動機づけ—探索的因子分析と心理ネットワーク分析を用いて— (共)	外国語教育メディア学会中部支部研究紀要 34巻	10月	43-54
--	-------------------------	-----	-------

〈学会発表〉

学習開始時の英語力と動機づけが学習成果に及ぼす影響 (共)	全国英語教育学会第49回福岡研究大会	8月24日	口頭発表
-------------------------------	--------------------	-------	------

外国語発話のわかりやすさに関わる言語特徴 (単)	愛知学院大学語学研究所第39回研究発表会	11月29日	講演
--------------------------	----------------------	--------	----

英語スピーキング抵抗感の低減におけるシャドーイングの効果 (共)	外国語教育メディア学会中部支部第103回支部研究大会	12月14日	口頭発表
----------------------------------	----------------------------	--------	------

水上 茜

〈論文〉

Cluster effect through the oligomerisation of bioactive disaccharide AMOR on pollen tube capacitation in <i>Torenia fournieri</i> (共)	RSC Chemical Biology, 5	5月	745-750
---	-------------------------	----	---------

文 嬉眞

〈著書〉

『カチガヨ！ 韓国語』文嬉眞・金美淑 (共)	朝日出版社	1月	総162
------------------------	-------	----	------

山名賢治

〈論文〉

ルイス酸存在下でのトリアルキルホスファイトの1-フェニル-1H-ピロール-2,5-ジオンへの1,4-付加反応による2量体反応 (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第72巻1号	9月	21-26
--	---------------------	----	-------

吉村正宏

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈報告書〉金属錯体の結晶化を利用した不斉増幅現象による触媒的不斉合成法の開発 (共)	『触媒科学計測共同研究拠点報告』令和5年度提案型第二期	3月	459
--	-----------------------------	----	-----

鷲嶽正道

〈論文〉

Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 1) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第71巻第1・2合併号	1月	1-21
--	--------------------------	----	------

Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 3) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第71巻第1・2合併号	1月	23-42
--	--------------------------	----	-------

Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 2) (単)	『愛知学院大学語研紀要』第49巻第1号	1月	3-22
Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 4) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第72巻第1号	9月	27-43
〈学会発表〉			
「科学論文」の読解を困難にしているもの— テキスト形成的メタ機能を中心に— (単)	第32回日本機能言語学会秋期大会	10月	口頭発表

『教養部紀要』第72巻総目次

第72巻 第1号（通巻第205号）令和6年9月発行

論文

- 山口 均：『荒地』の原風景……………（1）
Hitoshi YAMAGUCHI : Some Versions of *The Waste Land*
山名 賢治・中野 博文：イス酸存在下でのトリアルキルホスファイトの
1-フェニル-1*H*-ピロール-2,5-ジオンへの1,4-付加反応による2量化反応……………（21）
Kenji YAMANA and Hirofumi NAKANO : Lewis Acid Promoted Dimerization Reaction by 1,4-Addition Reaction of
Trialkyl Phosphite to 1-phenyl-1*H*-pyrrole-2,5-dione
Masamichi WASHITAKE : Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 4)……………（27）

第72巻 第2・3合併号（通巻第206号）令和7年3月発行

論文

- 川口 勇 作：英語学習者のライティングプロセスと結束性の関係
——課題序盤・終盤の行動に焦点を当てた予備的検討——……………（1）
Yusaku KAWAGUCHI : Writing Processes and Cohesion in English Learners' Writing:
A Preliminary Study Focusing on Early and Late Stages of Essay Writing Tasks
佐々木 真：AI時代の英語教育についての一考察……………（13）
Makoto SASAKI : On English Education in the Era of Artificial Intelligence
Sadaharu JO : Quality Evaluation by Synchrotron Radiation X-ray Topography of Hen-Egg-White Lysozyme Single
Crystals Obtained by NiCl₂ Concentration Gradient Technique……………（33）
資料
川口 高 風：明治期以降曹洞宗人物誌（十一）……………（86）

執筆者紹介

川口 勇 作 (本学講師……………英 語)
KAWAGUCHI Yusaku

佐々木 真 (本学教授……………英 語)
SASAKI Makoto

城 貞 晴 (本学准教授……………物 理 学)
JO Sadaharu

川口 高 風 (本学名誉教授……………宗 教 学)
KAWAGUCHI Kōhū

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 鷲 嶽 正 道 (副会長)※糸 井 川 修

(会計) 南 裕 明

※内 田 康 弘 海 野 勇 三 澤 田 真由美

※柴 田 哲 雄 ※白 木 優 馬 ※菅 井 大 地

菅 原 研 州 ※中 村 綾 ※山 名 賢 治

※ 2・3 合併号編集委員

編 集 後 記

『教養部紀要』第72巻第2・3合併号をお届けします。本号には論文3編と資料1編を掲載することができました。ご投稿いただきました先生方、編集にあられた委員の先生方に御礼申し上げます。また、研究業績の掲載にあたっては、多くの先生方のご協力をいただきました。ありがとうございました。

今後も本紀要が研究活動に関する情報共有の場として活用され、益々充実したものになるよう祈念いたします。今後ともご協力賜りますよう謹んでお願い申し上げます。(菅井記)

令和7年3月20日 印刷
令和7年3月30日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢

編集責任者

教養部紀要第72巻

鷲 嶽 正 道

第2・3号 (通巻第206号)

発行者 愛 知 学 院 大 学
教 養 教 育 研 究 会

〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

電 話 〈0561〉 (73) 1111 (代表)

印刷所 株 式 会 社 あ る む

電 話 〈052〉 (332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.72 No.2, 3
(Whole Number 206)

C O N T E N T S

Articles

- Yusaku KAWAGUCHI : Writing Processes and Cohesion in English Learners' Writing:
A Preliminary Study Focusing on Early and Late Stages of Essay Writing Tasks..... (1)
- Makoto SASAKI : On English Education in the Era of Artificial Intelligence..... (13)
- Sadaharu JO : Quality Evaluation by Synchrotron Radiation X-ray Topography of Hen-Egg-White Lysozyme
Single Crystals Obtained by NiCl_2 Concentration Gradient Technique (33)

Material

- Kōhū KAWAGUCHI : On Sōtō Sect Priests' Lives and Works After the Meiji Era (11)..... (86)
- Achievements (2024) (87)
- Vol. 72 The Total Contents..... (95)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2025